

第 140 回 火山噴火予知連絡会資料

(その4)

その他の火山（気象庁）

（※ その1－1 ～ その3－5に掲載されていない気象庁資料）

平成 30 年 2 月 14 日

火山噴火予知連絡会資料（その4）

目次

気象庁

その他の火山（要約）	3
------------------	---

北海道地方の火山	4
----------------	---

知床硫黄山 4-7、羅臼岳 8-10、天頂山 11-14、摩周 15-18、雄阿寒岳 19-23、
丸山 24-26、利尻山 27-28、恵庭岳 29-32、羊蹄山 33-36、ニセコ 37-40、
渡島大島 41-42、茂世路岳 43-44、散布山 45-46、指臼岳 47-48、小田萌山 49-50、
択捉焼山 51-52、択捉阿登佐岳 53-54、ベルタルベ山 55-56、ルレイ岳 57-58、
爺爺岳 59-60、羅臼山 61-62、泊山 63-64

東北地方の火山	65
---------------	----

恐山 65-72、八幡平 73-74、鳴子 75-81、肘折 82-84、沼沢 85-87、
燧ヶ岳 88-89

関東・中部地方の火山	90
------------------	----

高原山 90-91、男体山 92-93、赤城山 94-95、榛名山 96-97、横岳 98-99、
妙高山 100-101、アカンダナ山 102-103

伊豆・小笠原諸島の火山	104
-------------------	-----

利島 104-105、御蔵島 106-107

中国・九州地方及び南西諸島の火山	108
------------------------	-----

三瓶山 108-109、阿武火山群 110-111、由布岳 112-113、福江火山群 114-115、
米丸・住吉池 116-118、若尊 119-120、池田・山川 121-122、開聞岳 123-124、
口之島 125-127、中之島 128-134、硫黄島 135-136

その他の火山（要約）（2017 年 12 月 31 日現在）

その他の火山の評価（2017 年 1 月～2017 年 12 月）

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

火山名

1. 北海道地方

知床硫黄山、羅臼岳、天頂山、摩周、雄阿寒岳、丸山、利尻山、恵庭岳、羊蹄山、ニセコ、渡島大島、茂世路岳、散布山、指臼岳、小田萌山、択捉焼山、択捉阿登佐岳、ベルタルベ山、ルルイ岳、爺爺岳、羅臼山、泊山

2. 東北地方

恐山、八幡平、鳴子、肘折、沼沢、燧ヶ岳

3. 関東・中部地方、伊豆・小笠原諸島

高原山、男体山、赤城山、榛名山、横岳、妙高山、アカンダナ山、利島、御蔵島、ベヨネース列岩、須美寿島、伊豆鳥島、嬬婦岩、海形海山、海德海山、噴火浅根、北福德堆、南日吉海山、日光海山

4. 中国・九州地方及び南西諸島

三瓶山、阿武火山群、由布岳、福江火山群、米丸・住吉池、若尊、池田・山川、開聞岳、口之島、中之島、硫黄鳥島、西表島北北東海底火山

知 床 硫 黄 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・表面活動（図 1～図 4）

7 月 14 日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、噴気は確認されなかった。赤外熱映像装置による観測では、北西側中腹の爆裂火口で弱い地熱域が認められたが、2015 年 5 月と比較して特段の変化は認められなかった。

また、カムイワッカ川の河口付近の海岸には、2015 年 5 月と同様に温泉水による変色域が確認された。

・地震活動（図 5）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。



図 1 知床硫黄山 周辺図（矢印は赤外熱映像及び写真の撮影方向）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。



図 2 知床硫黄山 北西側上空からの状況
図 1 の①から撮影
・噴気は認められない。



図 3 知床硫黄山 カムイワッカ川から
流出した温泉による変色水の状態
図 1 の②から撮影

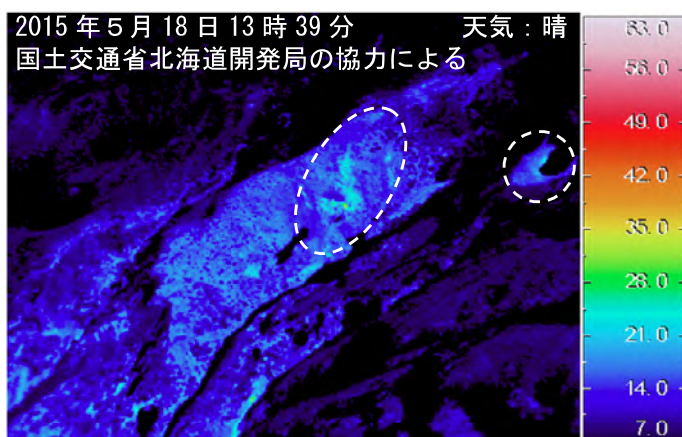
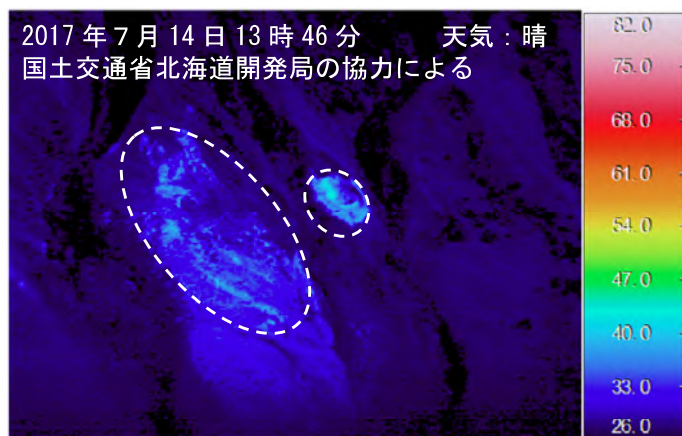


図 4 知床硫黄山 北西側中腹の爆裂火口の地表面温度分布
上：図 1 の③から撮影 下：図 1 の④から撮影
・地熱域（白破線内）の状況に特段の変化は認められない。

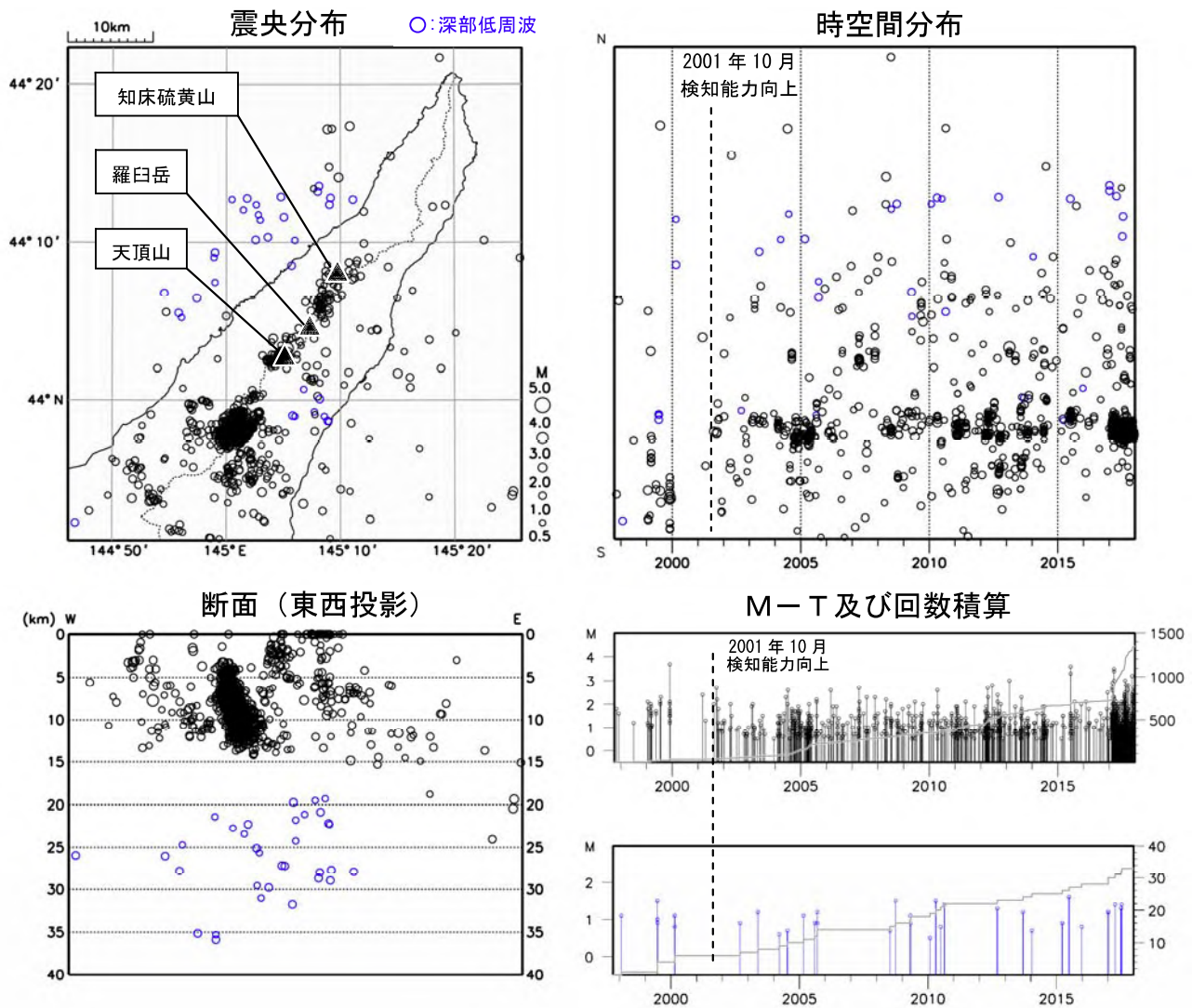


図5 知床硫黄山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
(1997年10月～2017年12月31日、 $M \geq 0.5$ 、深さ40km以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001年10月以降、Hi-netの追加に伴い、検知力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用した。

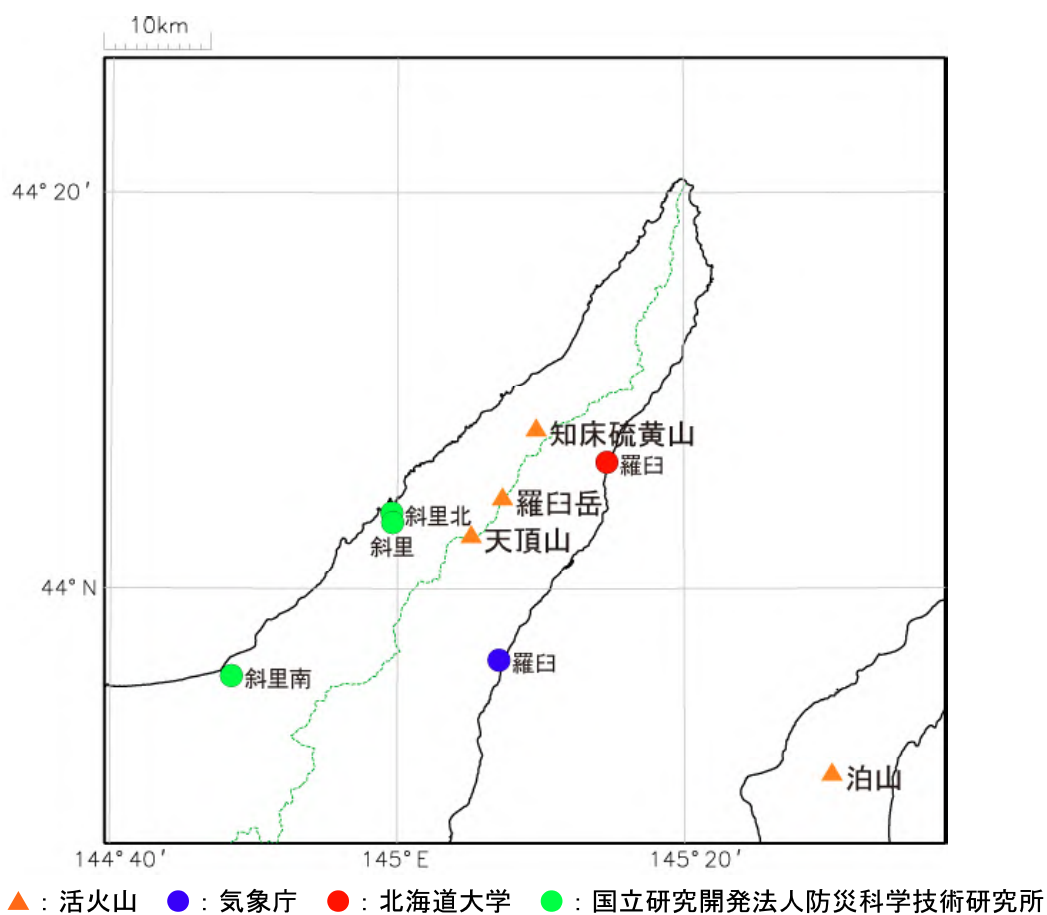


図 6 知床硫黄山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

羅 臼 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・表面活動（図 1～図 3）

7 月 14 日に国土交通省北海道開発局の協力を得て上空からの観測を実施した。山頂付近から噴気は確認されず、赤外熱映像装置による観測では地熱域は認められなかった。

・地震活動（図 4）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。



図 1 羅臼岳 周辺図と赤外熱映像及び写真の撮影方向（矢印）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。

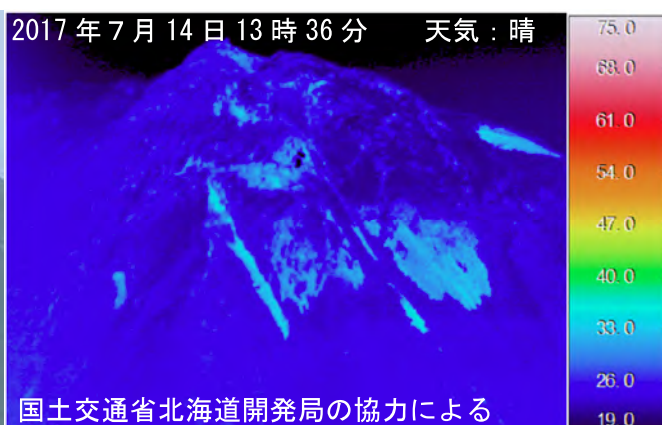


図 2 羅臼岳 全景写真
図 1 の①から撮影



図 3 羅臼岳 赤外熱映像装置による山頂付近の地表面温度分布
図 1 の②から撮影

・地熱域は認められない。



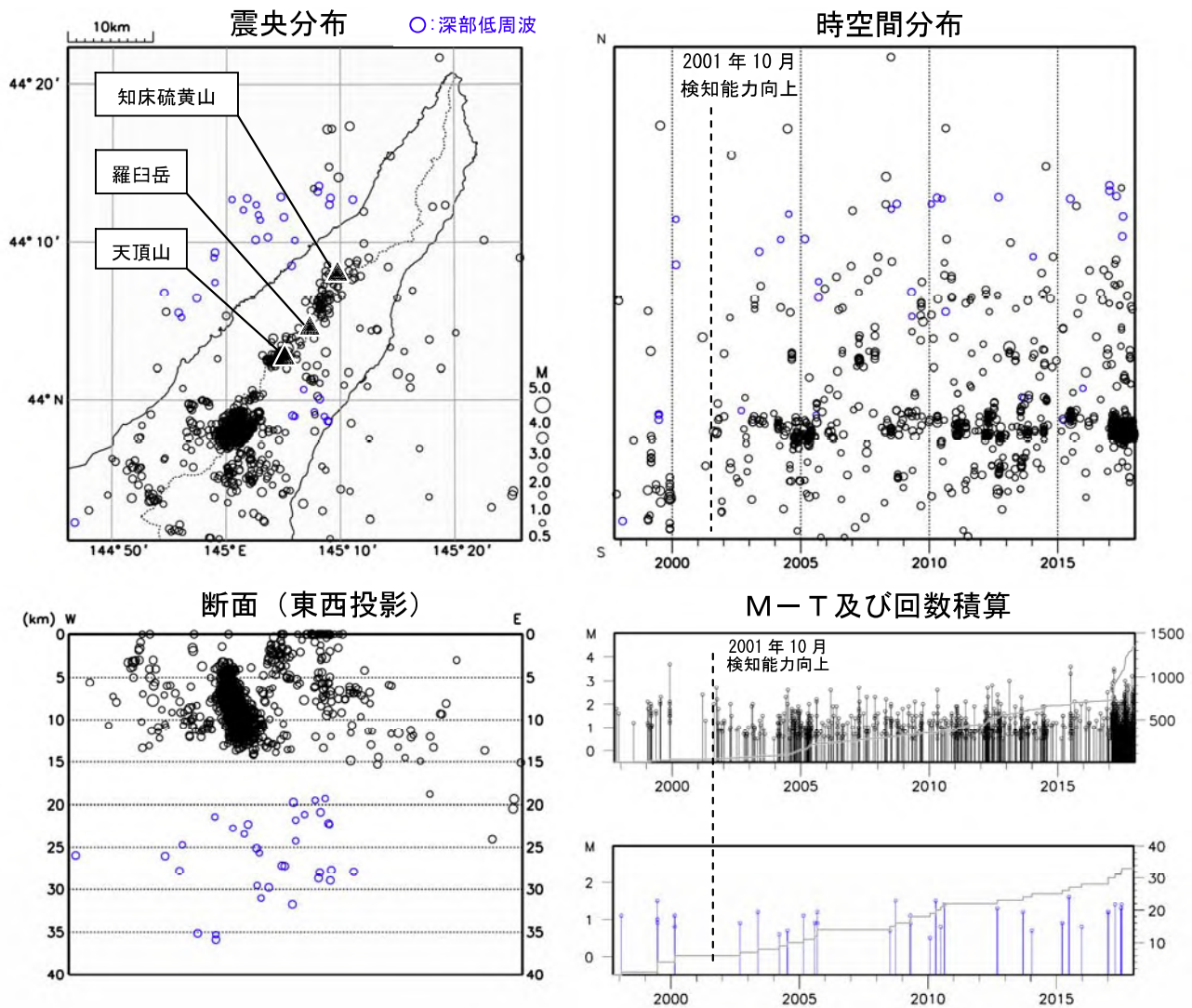


図 4 羅臼岳 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い、検知力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

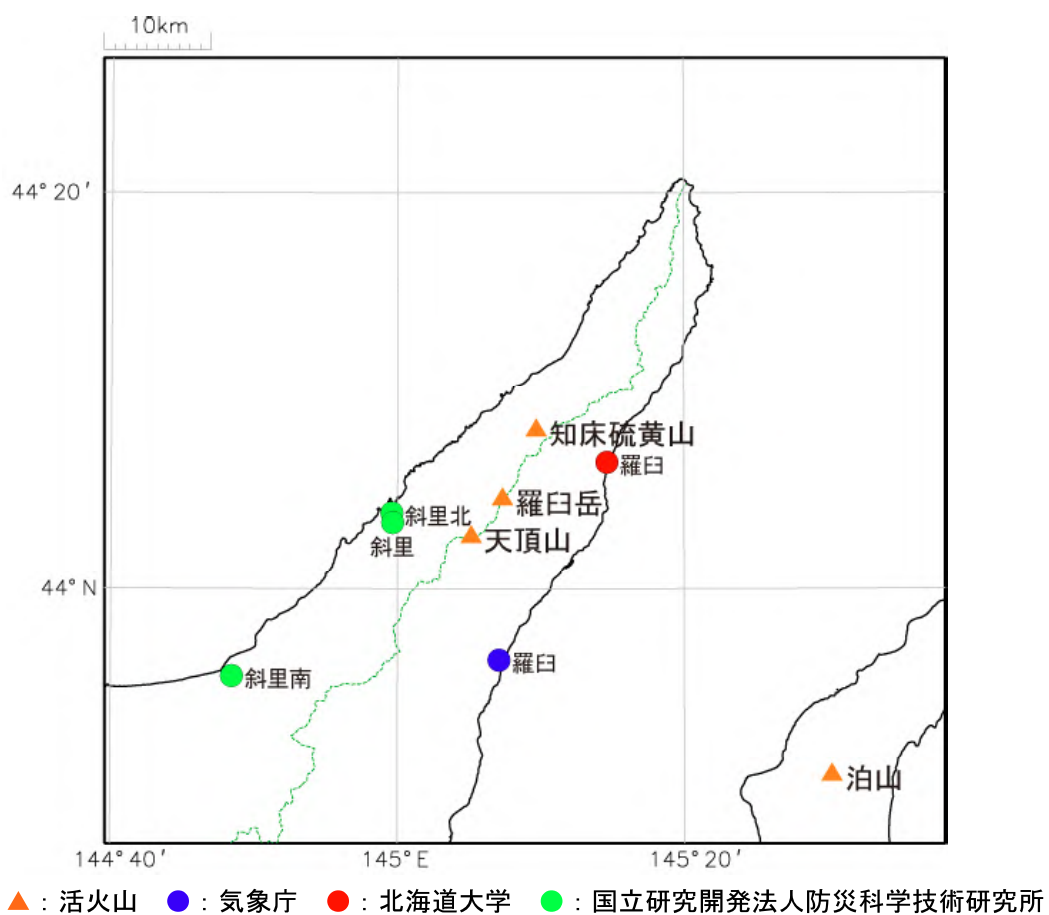


図5 羅臼岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

天 頂 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・表面活動（図 1～図 3）

7 月 14 日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、噴気は認められず、赤外熱映像装置による観測では、地熱域は認められなかった。

・地震活動（図 4）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。

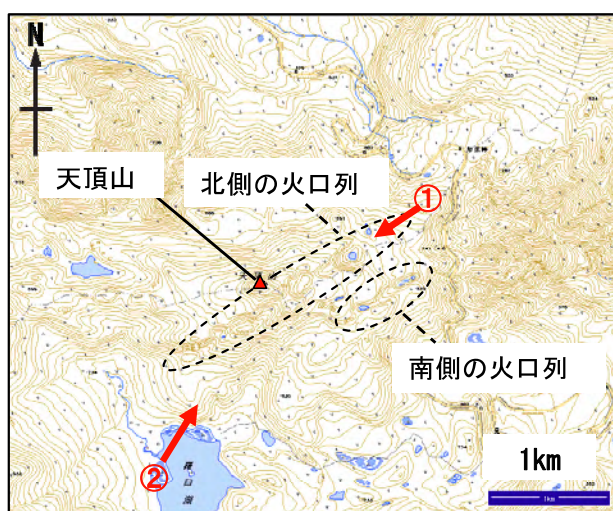


図 1 天頂山 周辺図
(矢印は写真及び赤外熱映像の撮影方向)
この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。



図 2 天頂山 火口列の状況
図 1 の①から撮影

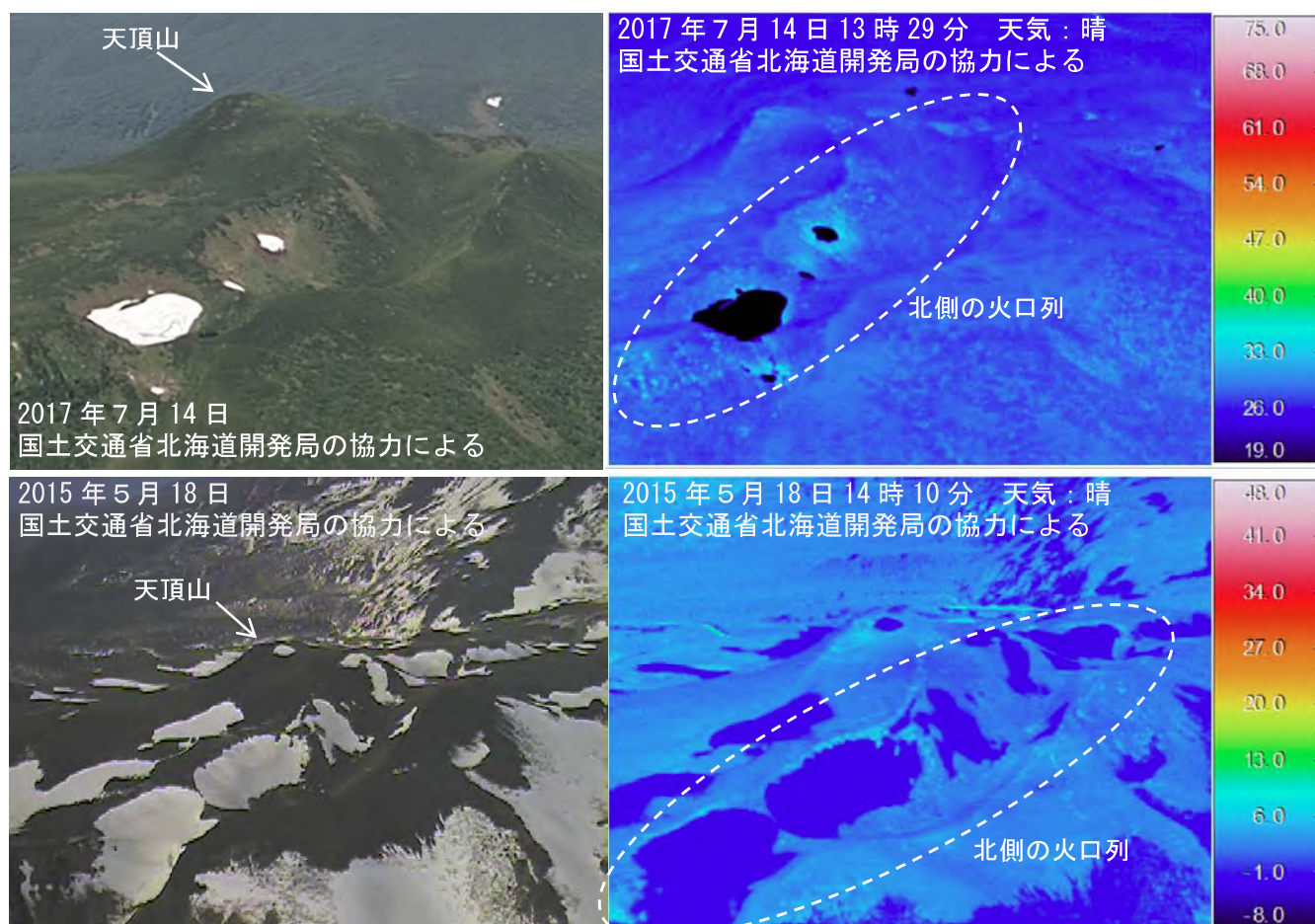


図 3 天頂山 火口列の地表面温度分布の状況

図 1 の②から撮影

・地熱域は認められない。

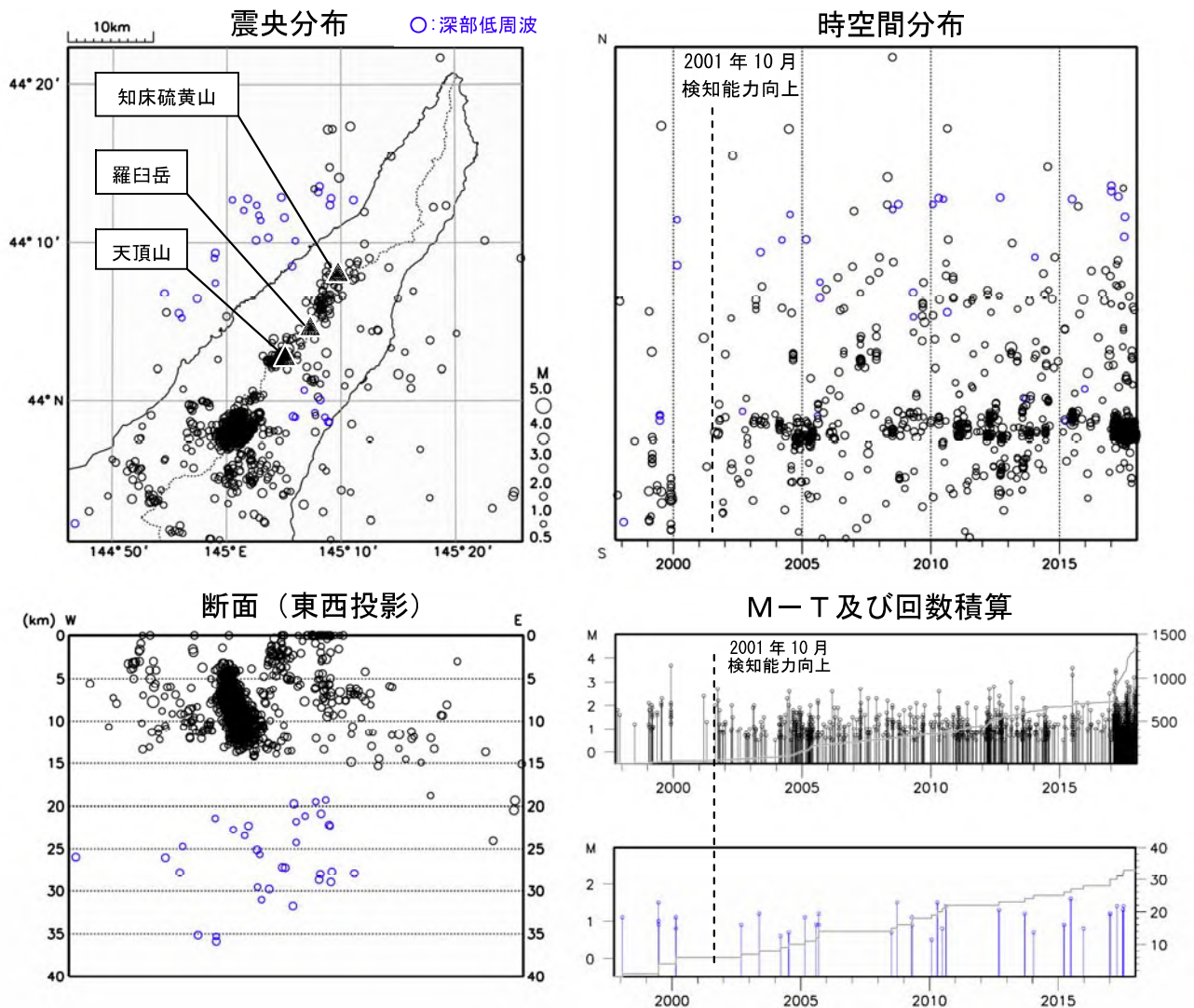


図 4 天頂山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。
2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い、検知力が向上している。

- ・ 2017 年以降天頂山の南東約 10km 付近（遠音別岳）で、地震がやや増加しているが、天頂山の活動とは関係ないと考えられる。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

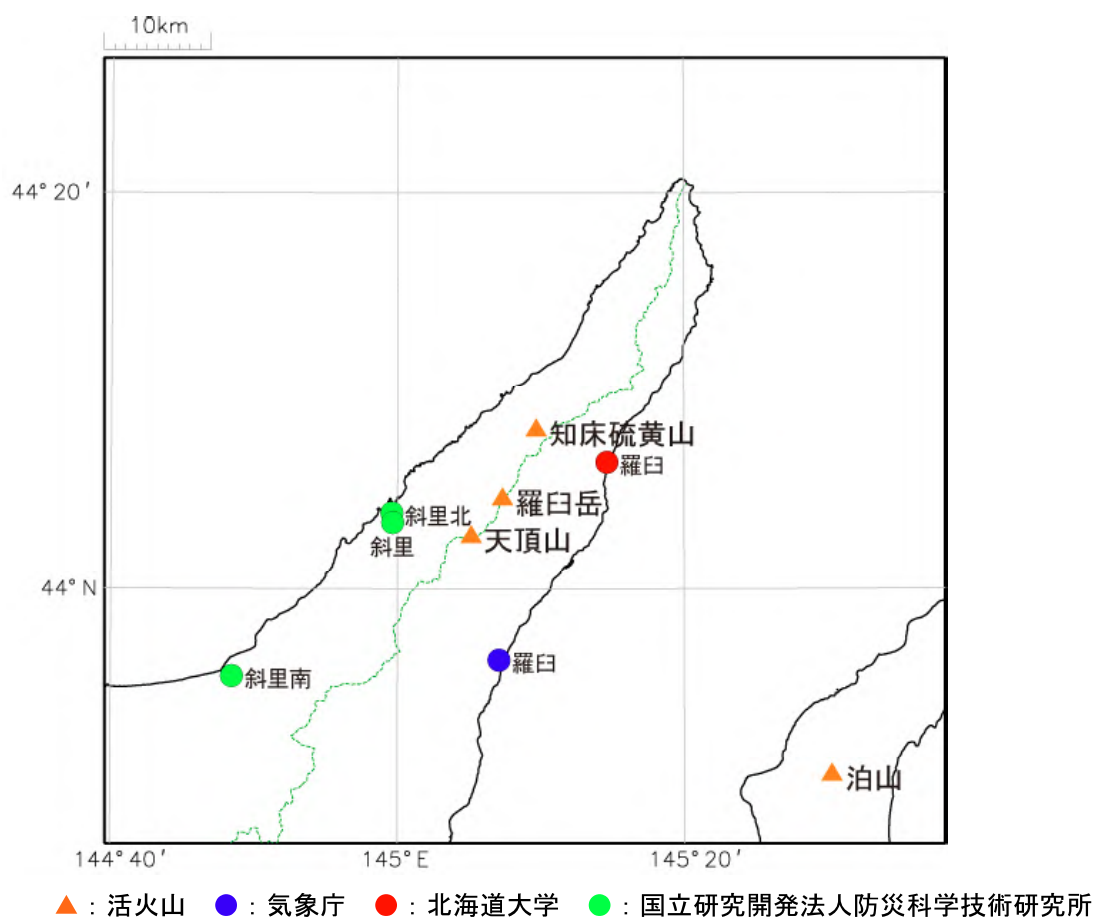


図5 天頂山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

摩 周

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・表面活動（図 1～図 3）

7 月 14 日に国土交通省北海道開発局の協力を得て上空からの観測を実施した。
噴気は確認されず、赤外熱映像装置による観測でも地熱域は認められなかった。

・地震活動（図 4）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。

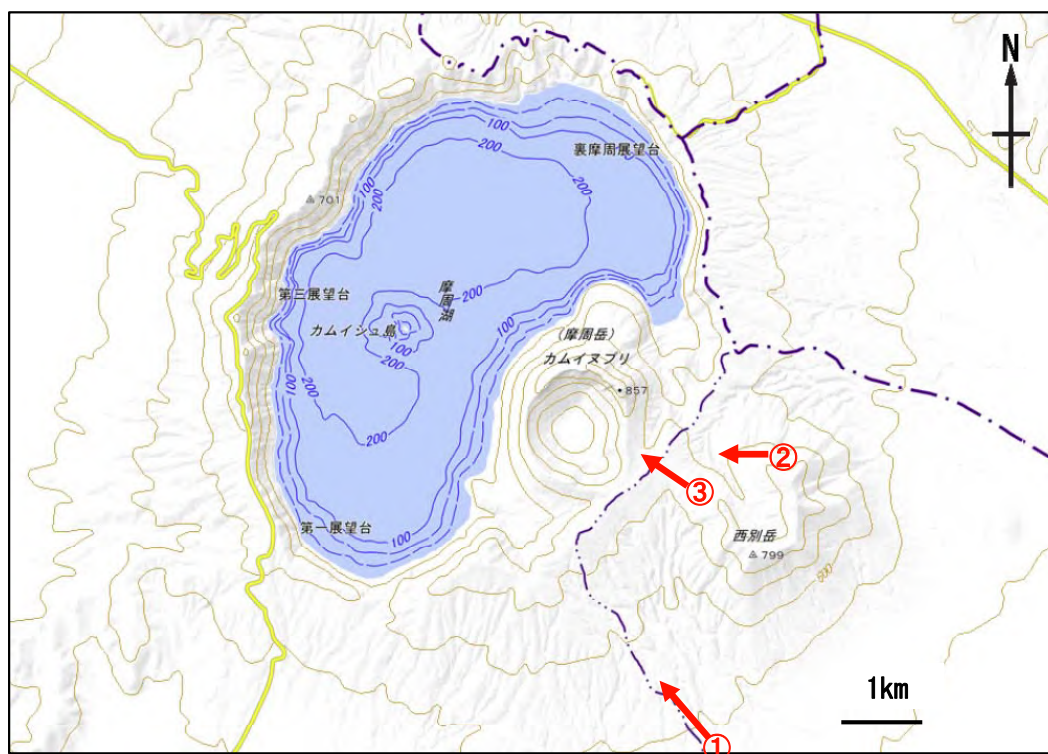


図 1 摩周 周辺図（矢印は赤外熱映像及び写真の撮影方向）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。



図 2 摩周 南東側上空からの状況

図 1 の①から撮影

・噴気等は認められない。

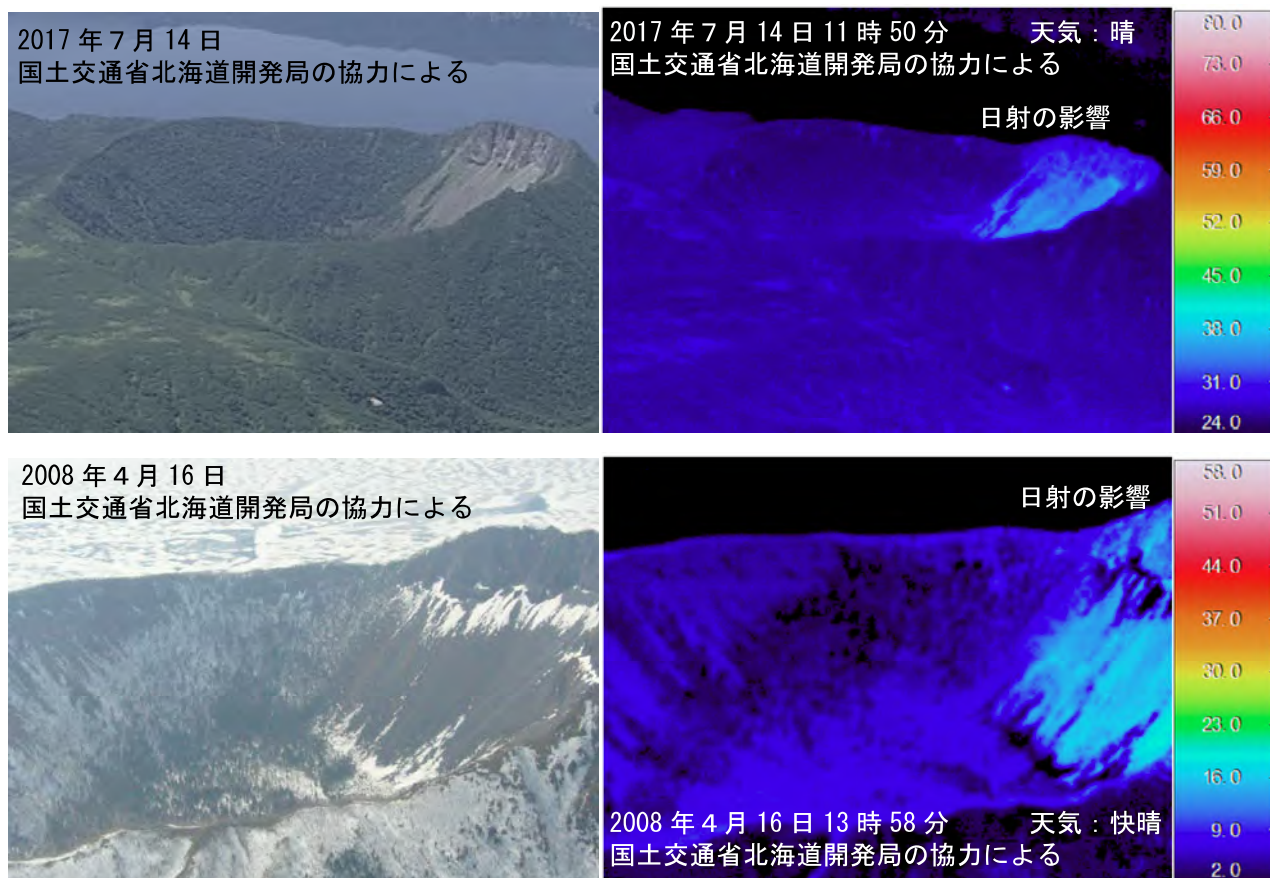


図 3 摩周 カムイヌプリの地表面温度分布

上：図 1 の②から撮影 下：図 1 の③から撮影

・地熱域は認められない。

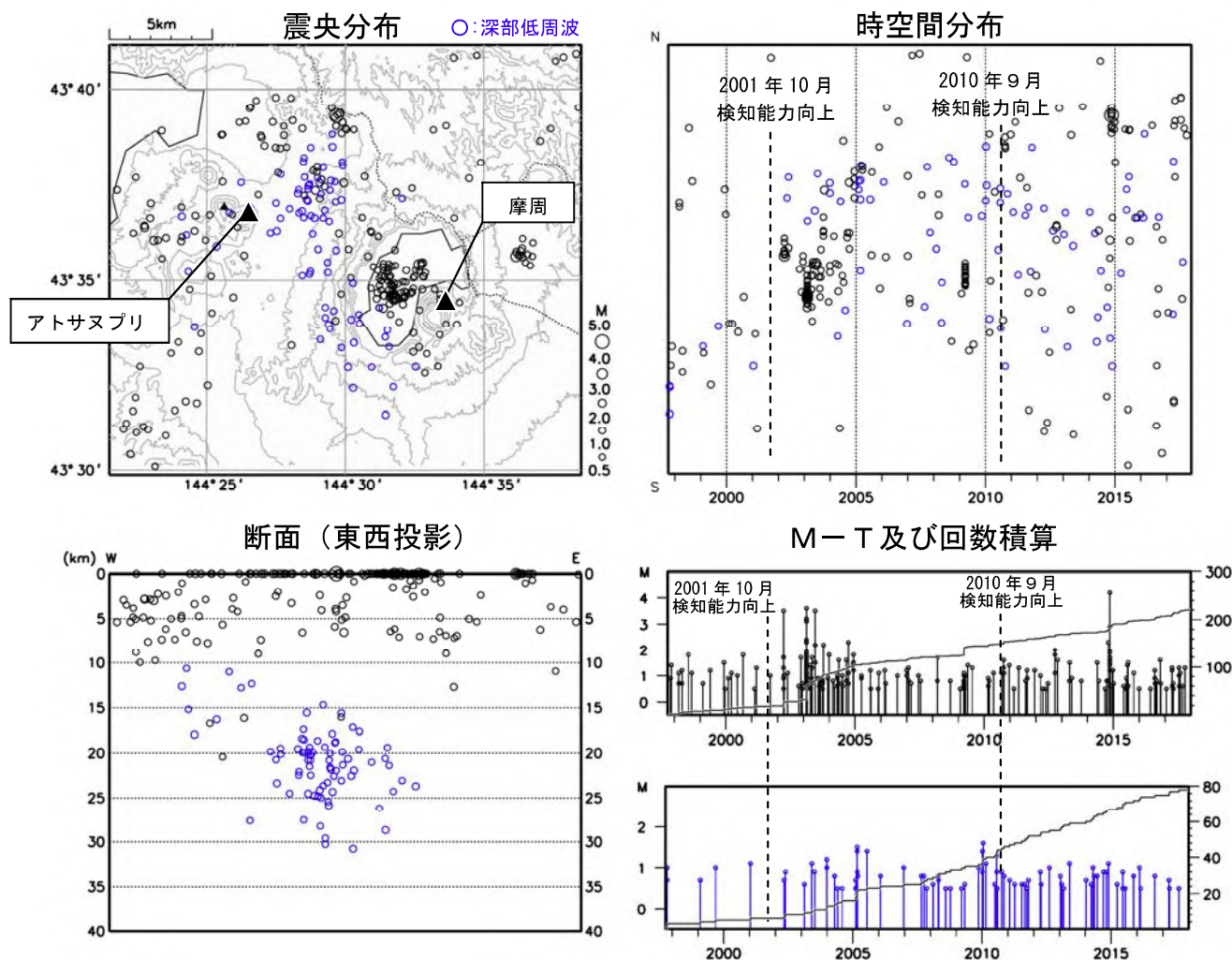


図 4 摩周 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知能力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ(標高)』を使用した。



18

雄 阿 寒 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 地震活動（図 1）

一元化震源によると、2016年11月に雄阿寒岳周辺を震源とする浅い地震がやや増加したが2017年1月には低下し、地震の少ない状態で経過している。

・ 表面活動（図 2～4）

7月14日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、噴気は確認できず、赤外熱映像装置による観測でも、以前から認められている北西側斜面の地熱域以外に地熱域はみられず、地表面温度分布に特段の変化はなかった。

・ 地殻変動（図 5～6）

GNSS 連続観測では、2016 年 10 月下旬以降、雌阿寒岳・雄阿寒岳周辺の観測点で膨張性の地殻変動と考えられる変化がみられていた。2017 年 5 月以降は小さくなったが、わずかに継続している。

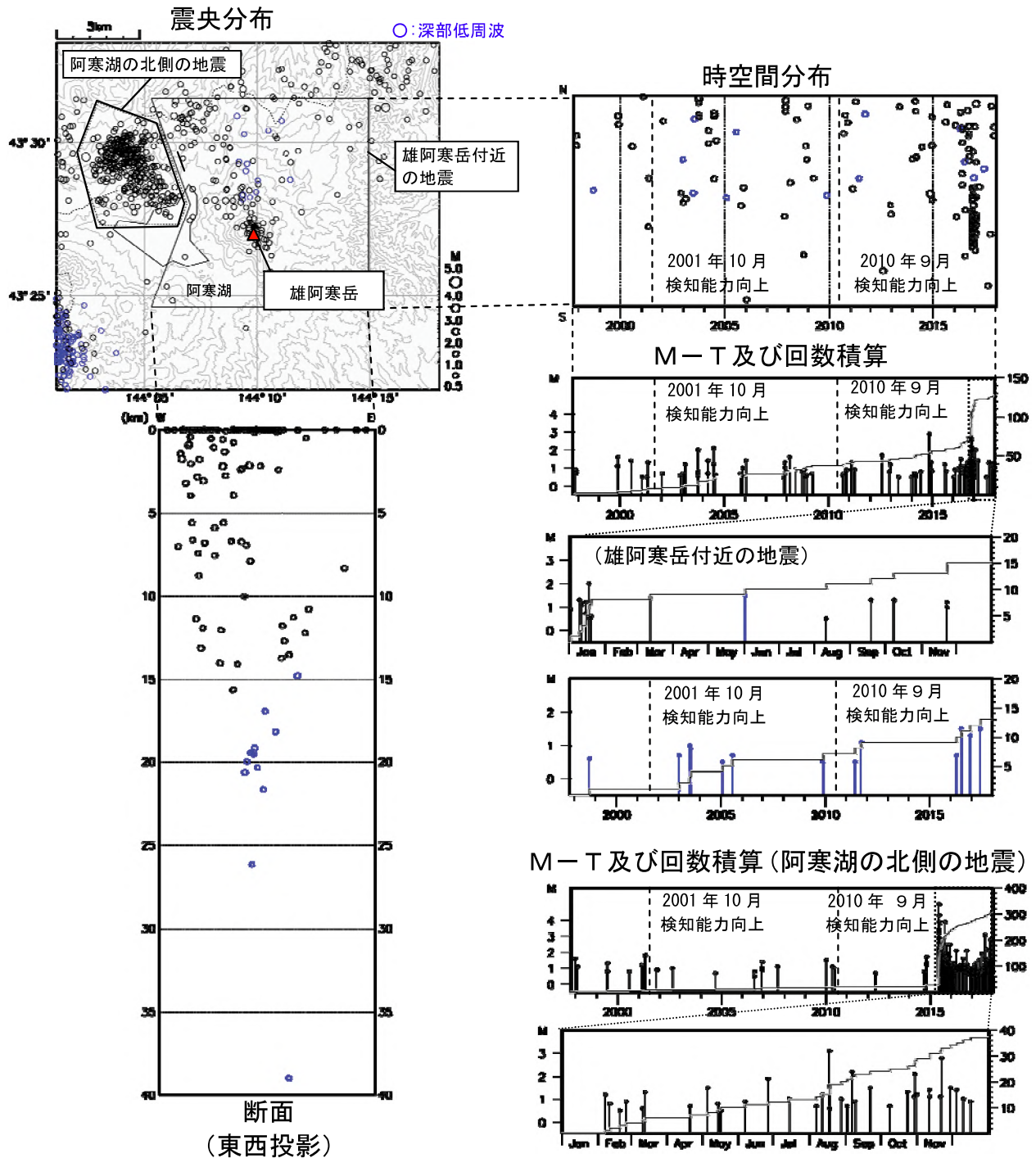


図 1 雄阿寒岳 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知能力が向上している。

2010 年 9 月以降、火山観測点の追加に伴い検知能力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

- ・ 2016 年 11 月に雄阿寒岳周辺を震源とする地震がやや増加したが 2017 年 1 月に活動は低下した。
- ・ 2015 年 6 月に活発化した阿寒湖の北側を震源とする地震活動は、その後次第に低下しながらも継続している。



図 2 雄阿寒岳 周辺図

(矢印は写真及び赤外熱映像の撮影方向)

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図 (タイル)』の複製を使用した。



図 3 雄阿寒岳 東側斜面の状況

東側上空 (図 1 の①) から撮影

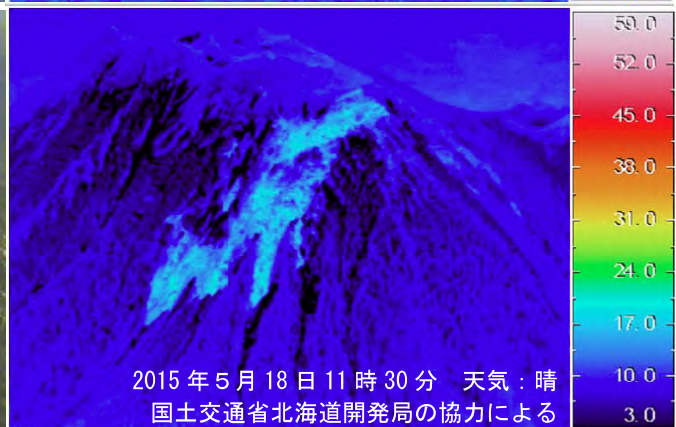
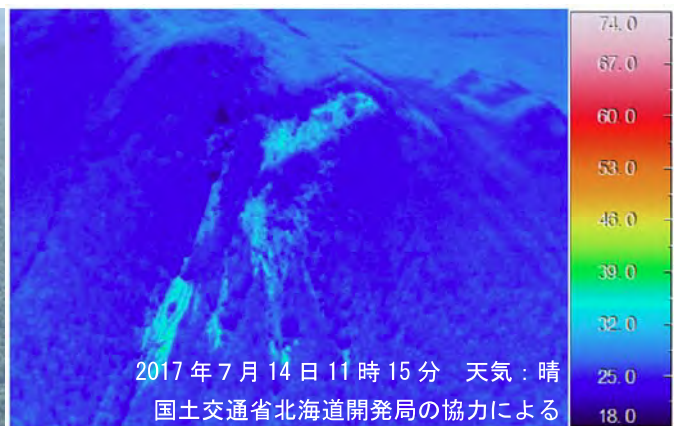


図 4 雄阿寒岳 北西側斜面の地表面温度分布

上：北西上空 (図 1 の②) から撮影、下：北西上空 (図 1 の③) から撮影

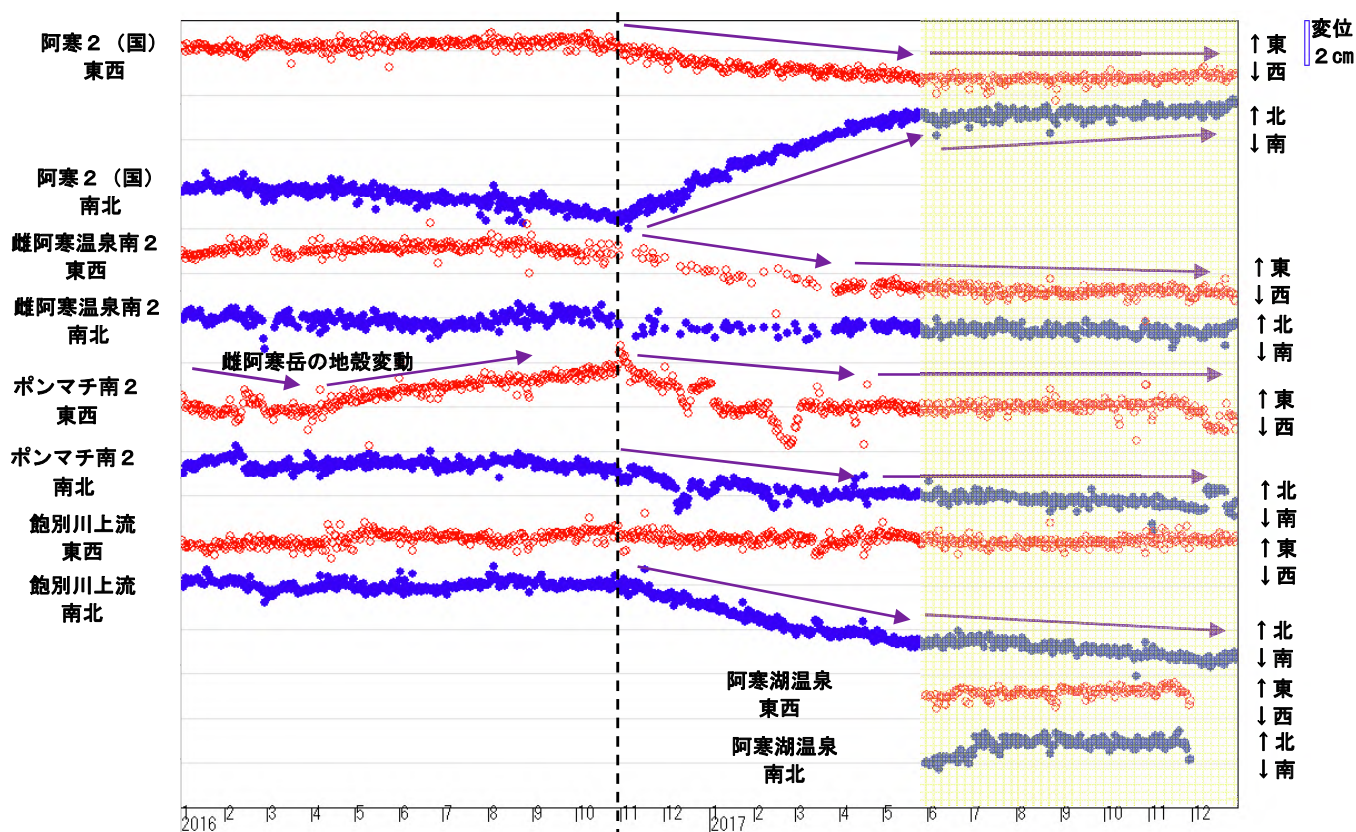


図5 雌阿寒岳・雄阿寒岳 GNSS 連続観測の座標時系列 (国): 国土地理院
(2015年10月1日～2017年12月31日 基準点: 阿寒1 (国))

- ・2016年10月下旬から阿寒2 (国) で北北西向き、雌阿寒岳周辺の観測点では南～南西向きの変化がみられていたが、2017年5月頃から(黄色の網掛け部分) 伸びの変化が小さくなっている。

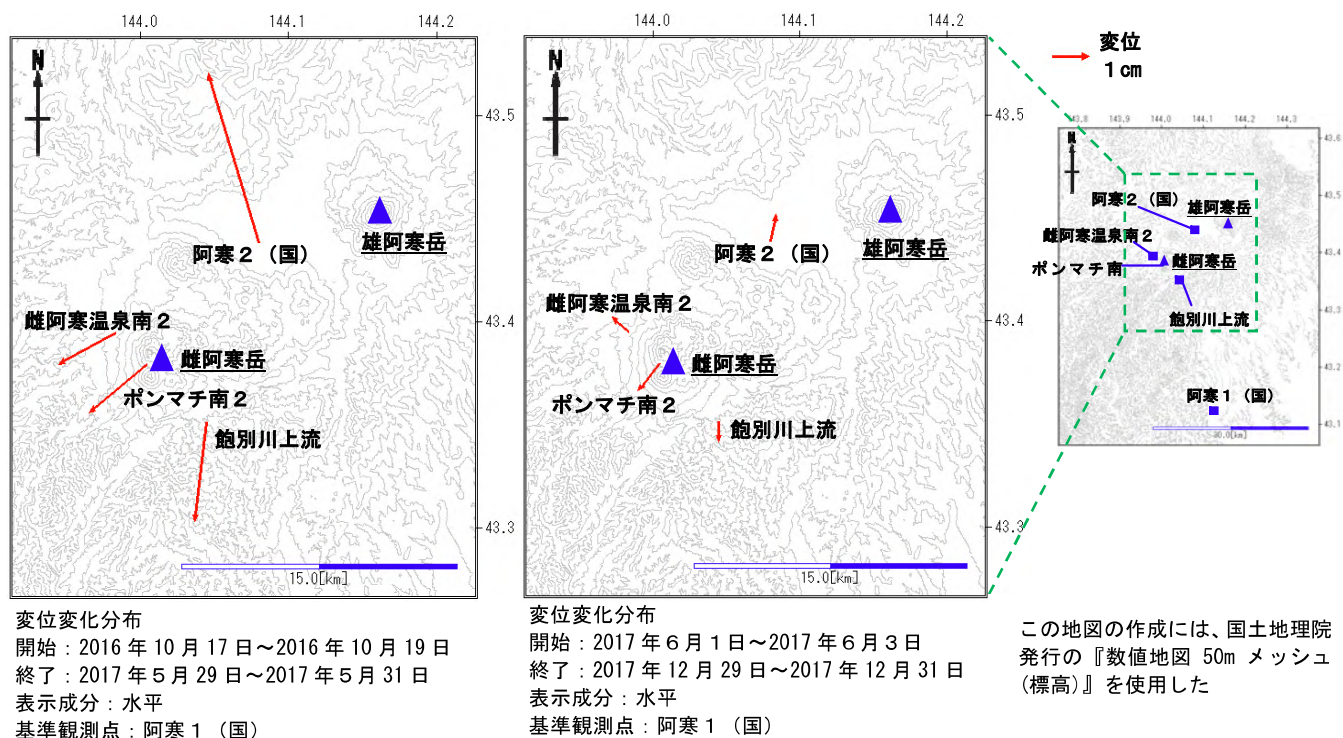
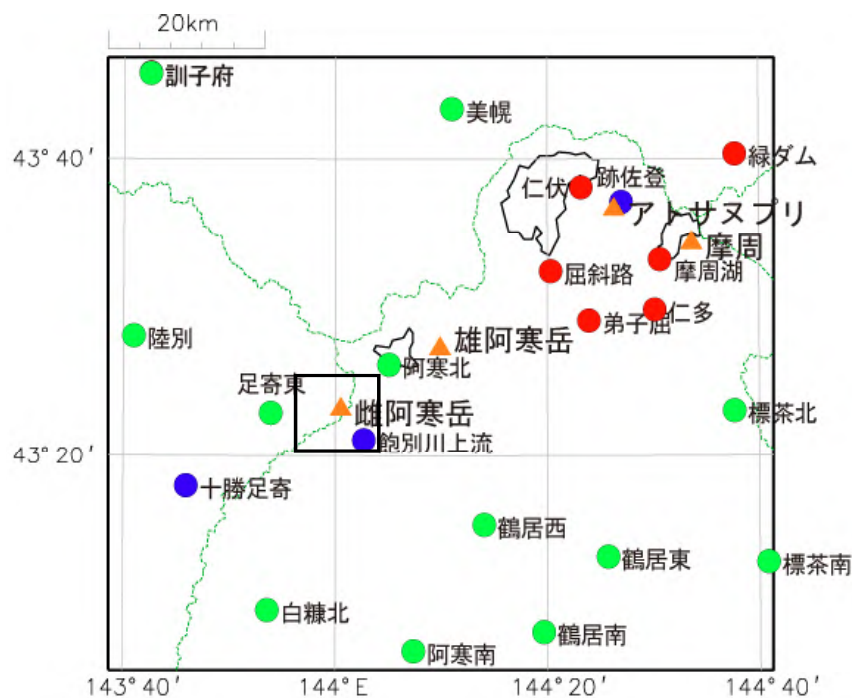


図6 雌阿寒岳・雄阿寒岳 GNSS 変化量ベクトル図 (基準点: 阿寒1 (国))

- ・2016年10月下旬から、雌阿寒岳山体内及び阿寒湖付近の観測点で膨張性の変化が観測されていたが、6月以降のデータによると、膨張性の変化は小さくなっている。

(国): 国土地理院



▲：活火山 ●：気象庁 ●：北海道大学 ●：国立研究開発法人防災科学技術研究所

図 7 雄阿寒岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

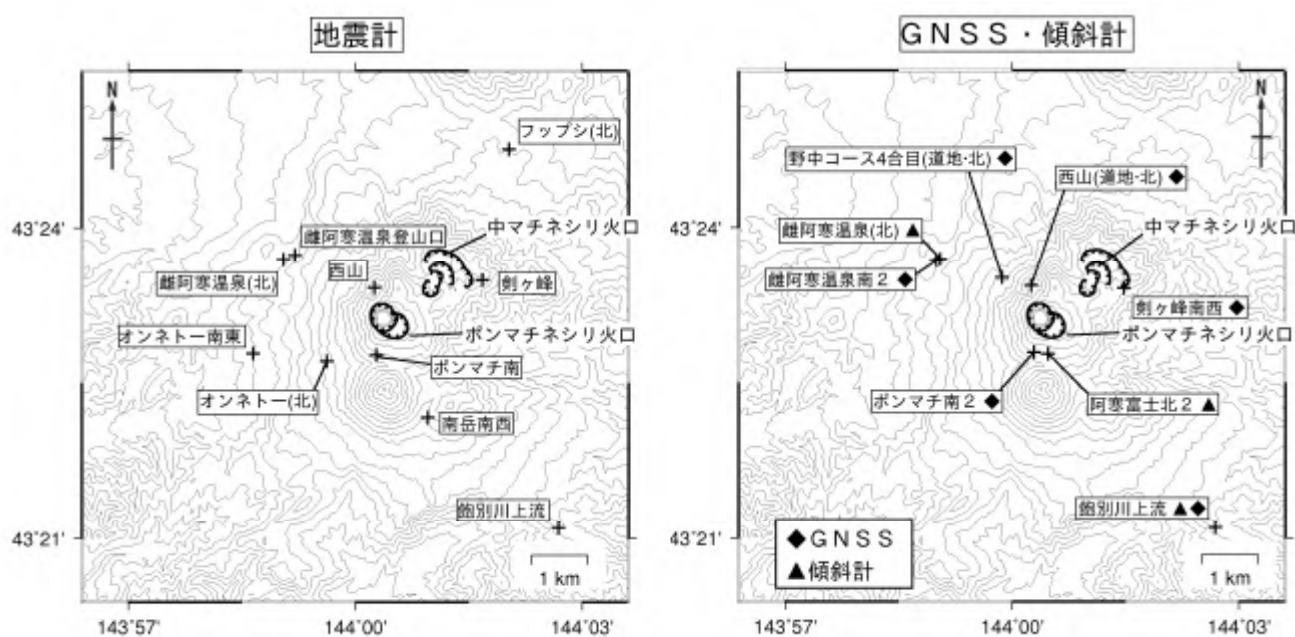


図 8 雌阿寒岳 観測点配置図

各機器の配置図は、図 7 内の口で示した領域を拡大したものである。

＋は観測点の位置を示す。

気象庁以外の機関の観測点は以下の記号を付している。

(北) : 北海道大学

(道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所

この地図の作成には国土地理院発行の「数値地図 50m メッシュ (標高)」を使用した。

丸 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 表面活動

丸山に関して異常現象等の報告はされていない。

・ 地震活動（図 1～2）

山体及び周辺で発生する地震は概ね低調な状態で経過したが、一時的な地震の増加が時々みられた。丸山では過去にもまとまった地震活動がみられており、1989年にはM4.5、2011年にはM4.2を最大規模とする地震増加が発生している。

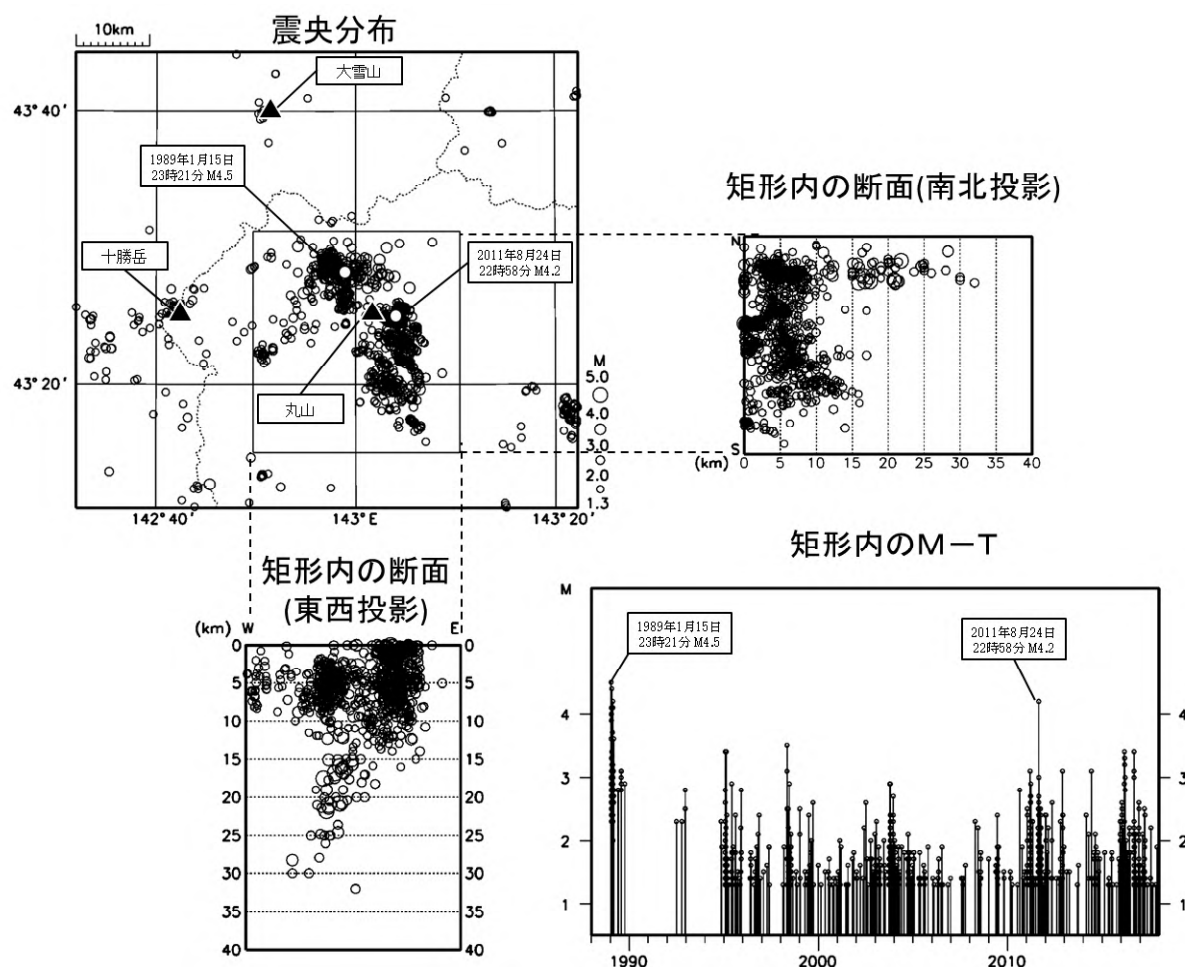


図 1 丸山 一元化震源による周辺の地震活動

(1988 年 1 月 1 日～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.3$ 、深さ 40km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものがある。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

表 1 丸山 1988 年以降の震源決定の検知能力の変遷

年月	地震観測網の変更	検知能力
～1995 年 1 月	気象官署地震計	M3.0 以上
1995 年 1 月～	津波地震早期検知網設置	M1.3 以上
1997 年 10 月～	他機関との一元化開始	M1.0 以上
2001 年 10 月～	防災科研 (Hi-net) の導入	M0.5 以上
2010 年 9 月～	火山観測点の利用開始	

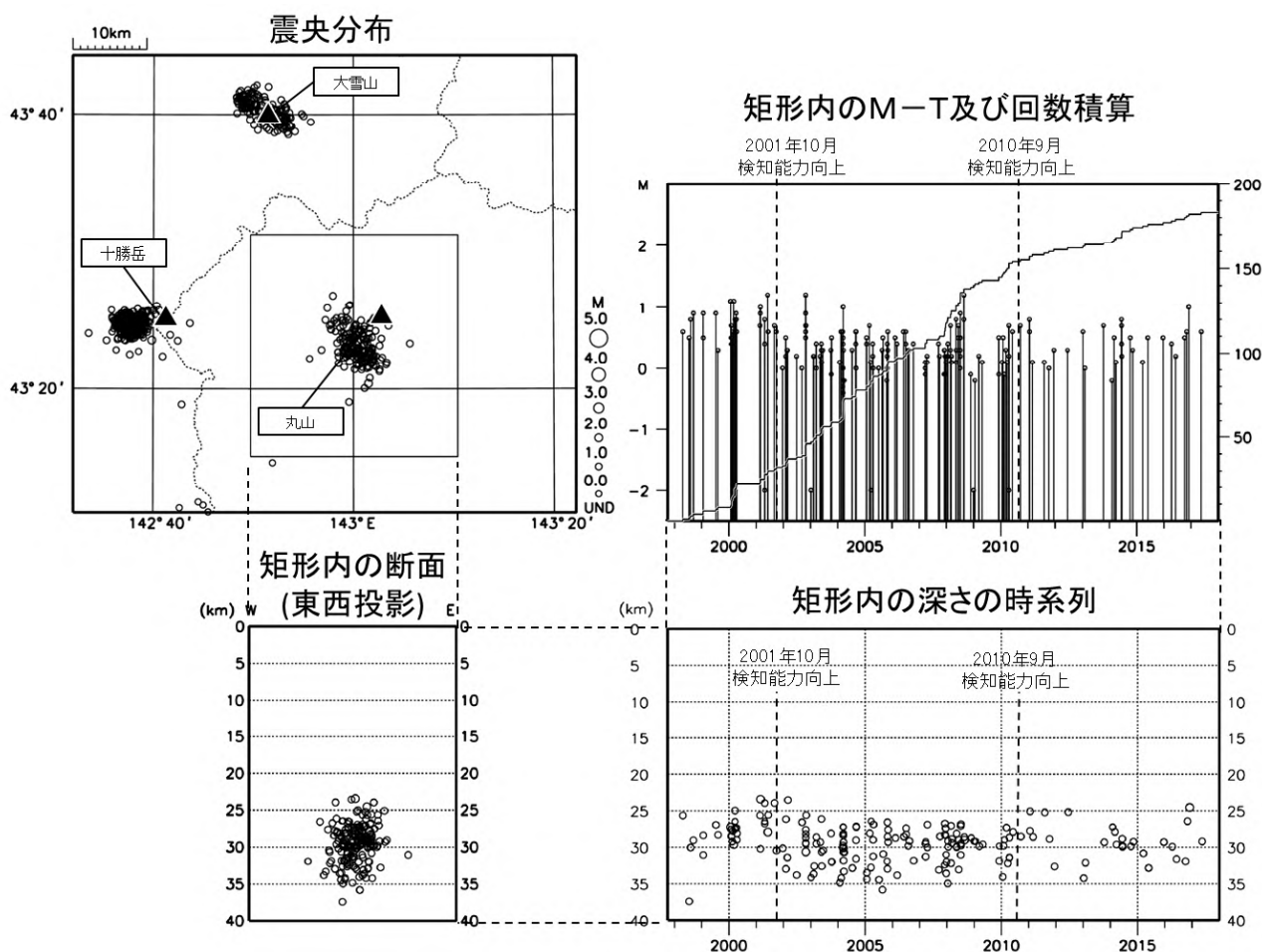


図 2 丸山 一元化震源による深部低周波地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、M 全て、深さ 40km 以浅)

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知能力が向上している。

2010 年 9 月以降、火山観測点の追加に伴い検知能力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

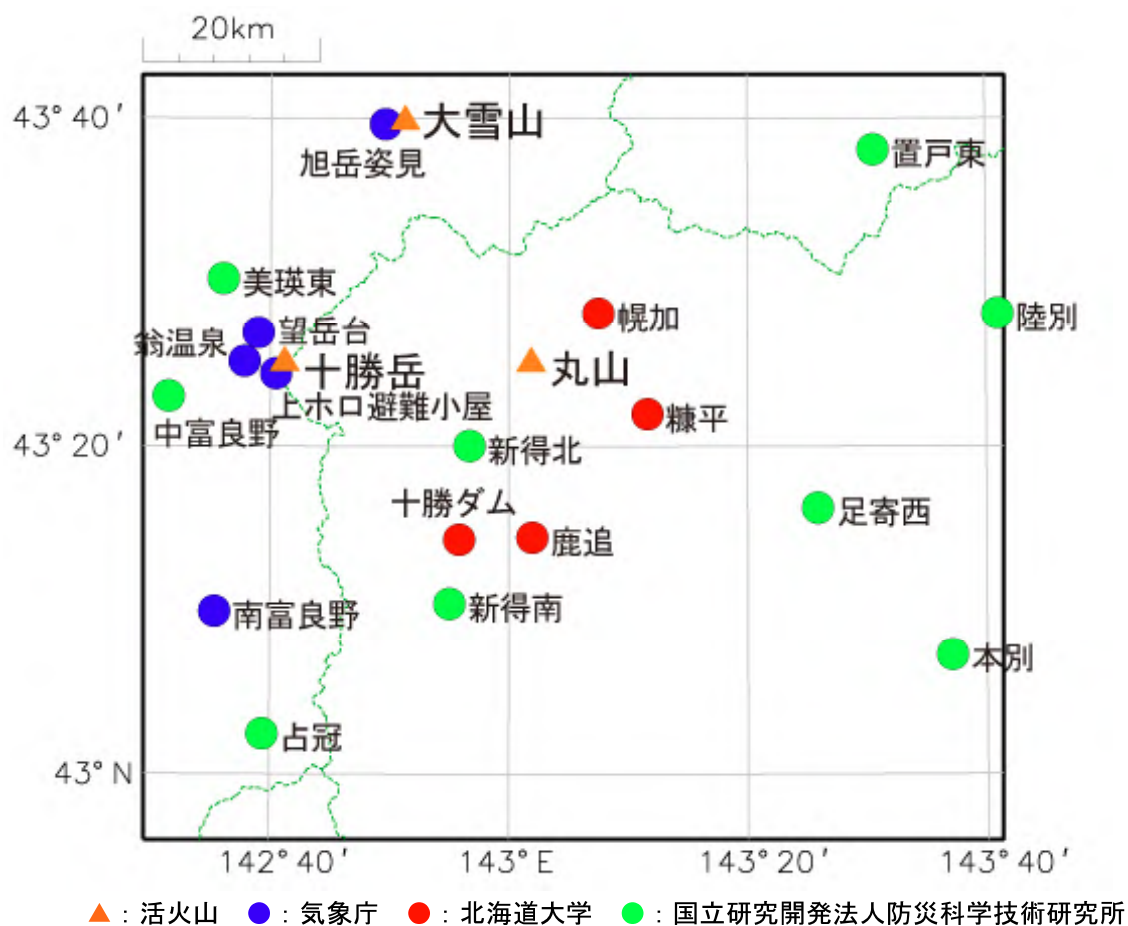


図 3 丸山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

利 尻 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 表面活動

利尻山に関して異常現象等の報告はされていない。

・ 地震活動（図 1）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。

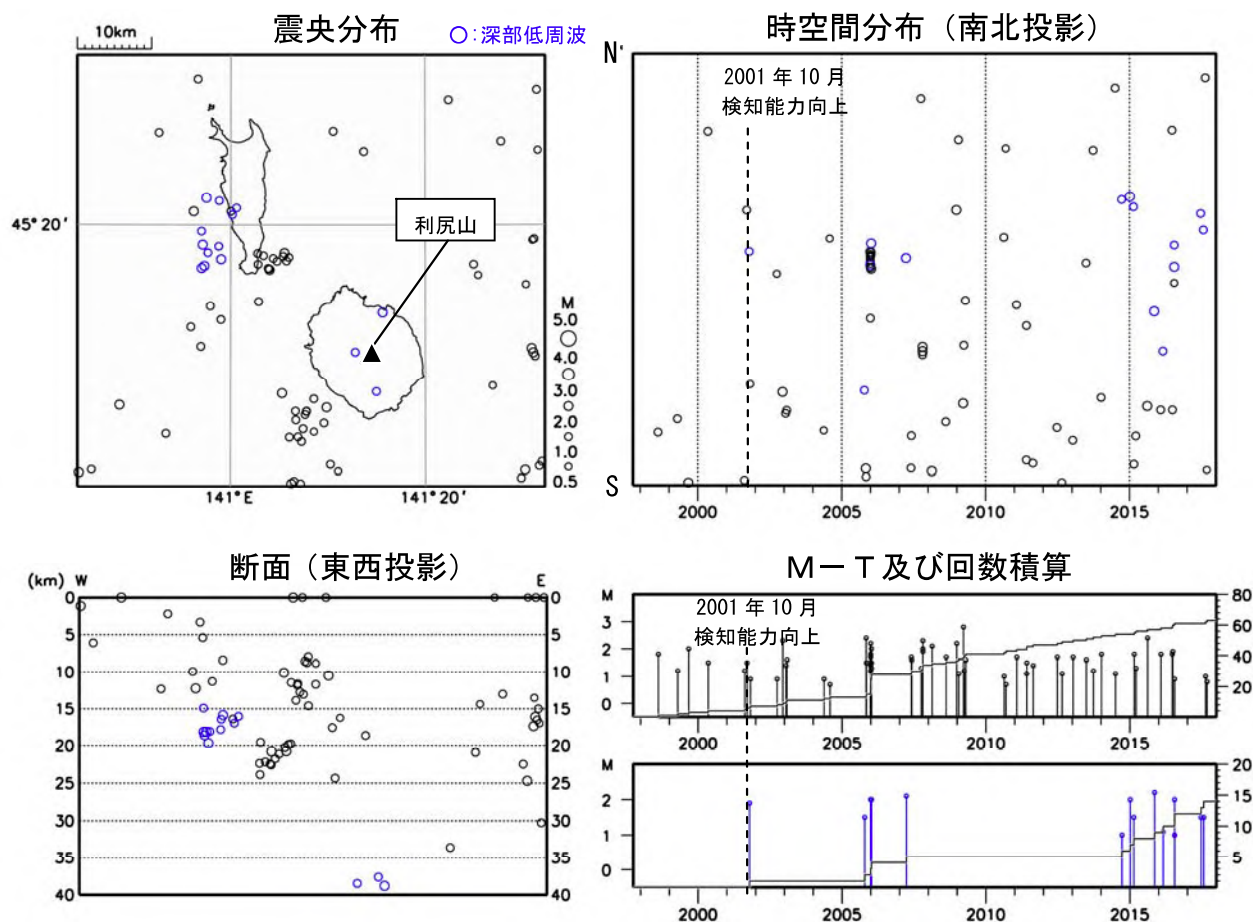


図 1 利尻山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

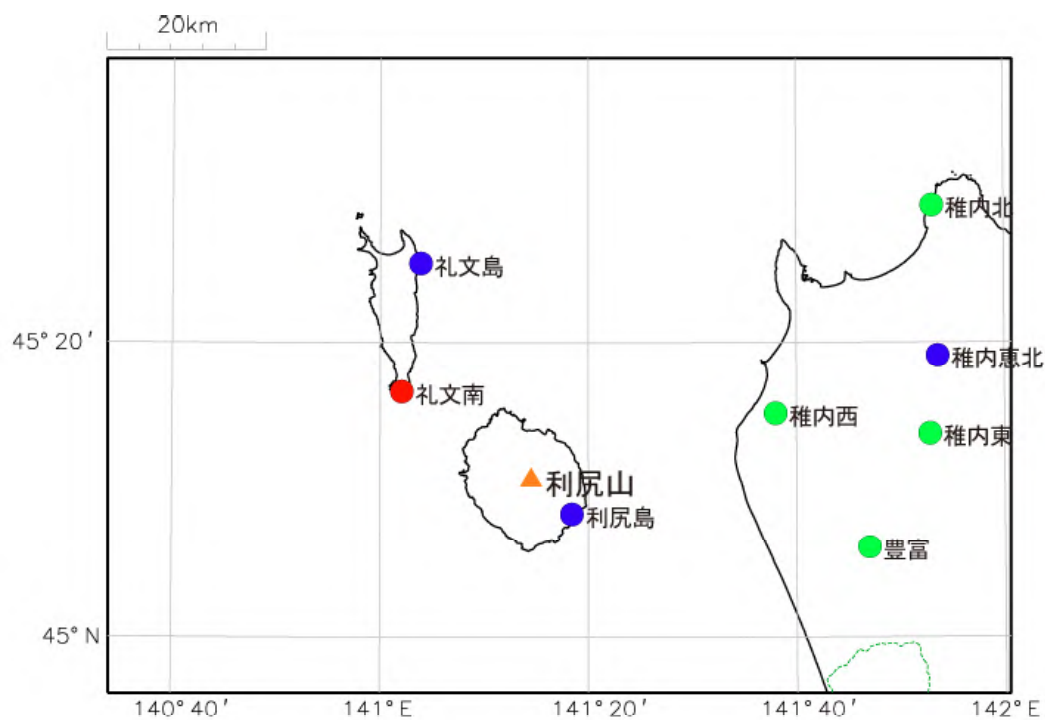
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40 km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。



▲：活火山 ●：気象庁 ●：北海道大学 ●：国立研究開発法人防災科学技術研究所

図2 利尻山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

恵庭 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・表面活動（図 1～図 2）

8 月 1 日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、山頂東側の爆裂火口内からは弱い白色噴気が認められたが火口の状況にこれまでの観測と比べて変化は認められなかった。

赤外熱映像装置による観測では、地表面温度分布の状況に特段の変化は認められなかった。

・地震活動（図 3）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。



図 1 恵庭岳 周辺図

（矢印は写真及び赤外熱映像の撮影方向）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した

この資料は気象庁のほか、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

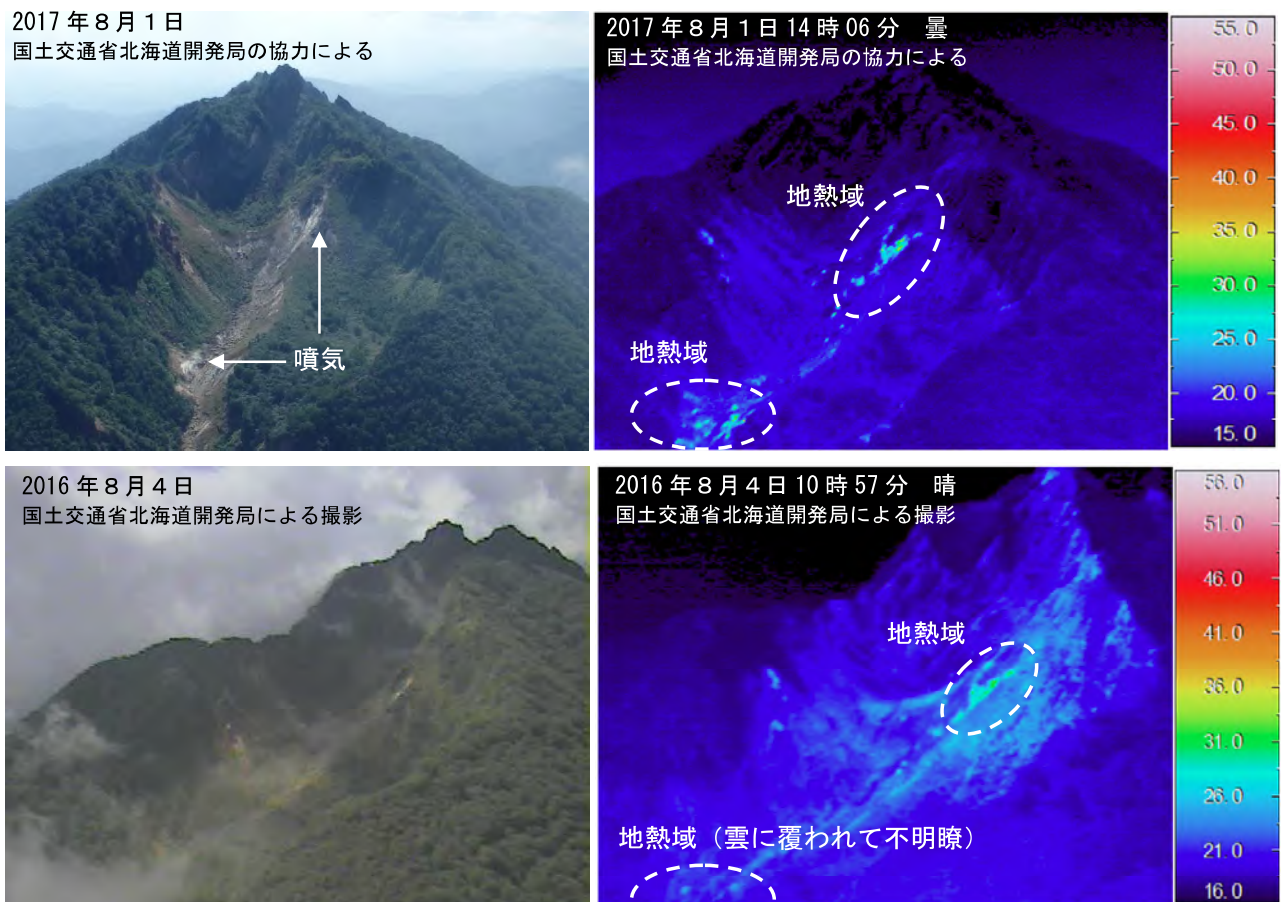


図 2 恵庭岳 赤外熱映像装置による恵庭岳山頂東側爆裂火口の地表面温度分布

上図：北東側上空（図 1 の①）から撮影

下図：北側上空（図 1 の②）から撮影

- ・ 噴気や地表面温度分布の状況に特段の変化は認められない

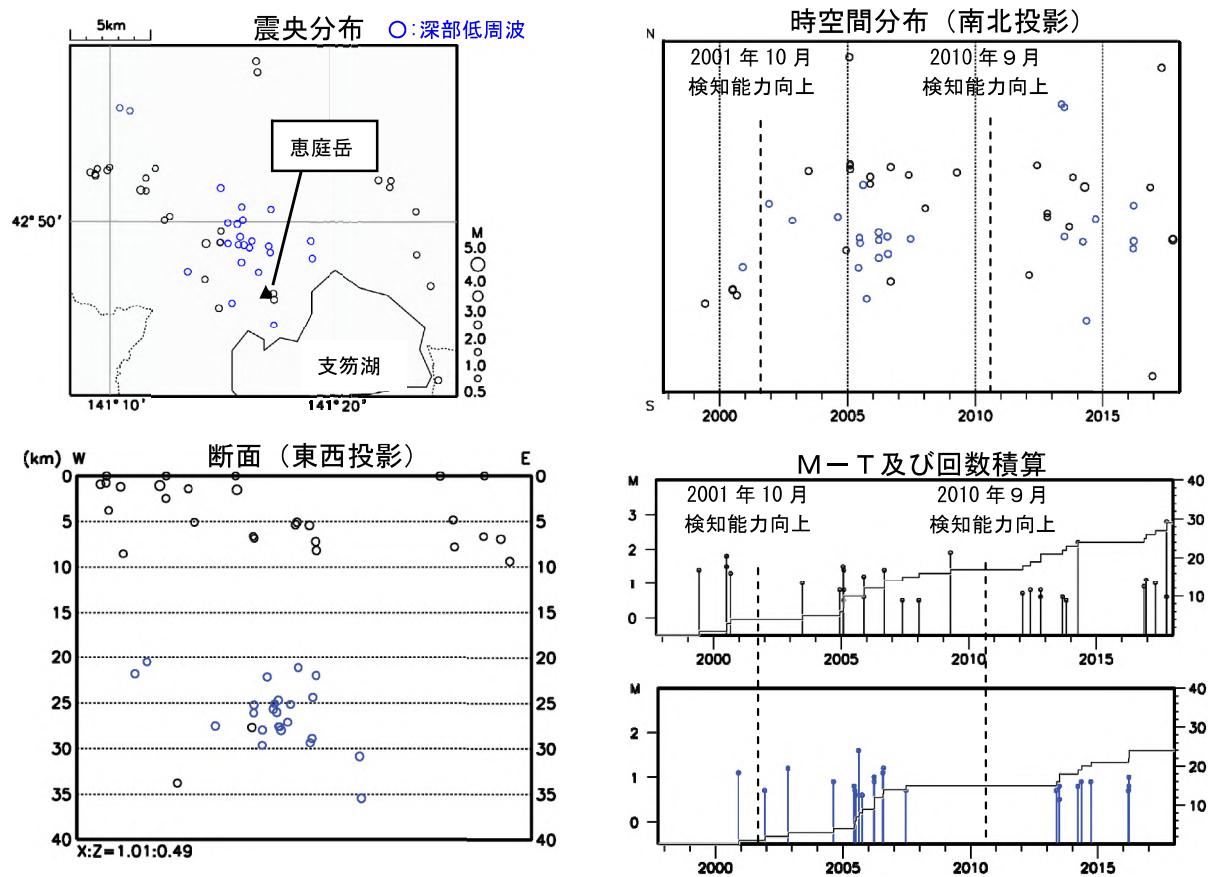


図3 恵庭岳 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
(1997年10月～2017年12月31日、 $M \geq 0.5$ 、深さ40km以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001年10月以降、Hi-netの追加に伴い検知力が向上している。

2010年9月以降、火山観測点の追加に伴い検知力が向上している。

この地図の作成には国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用した。

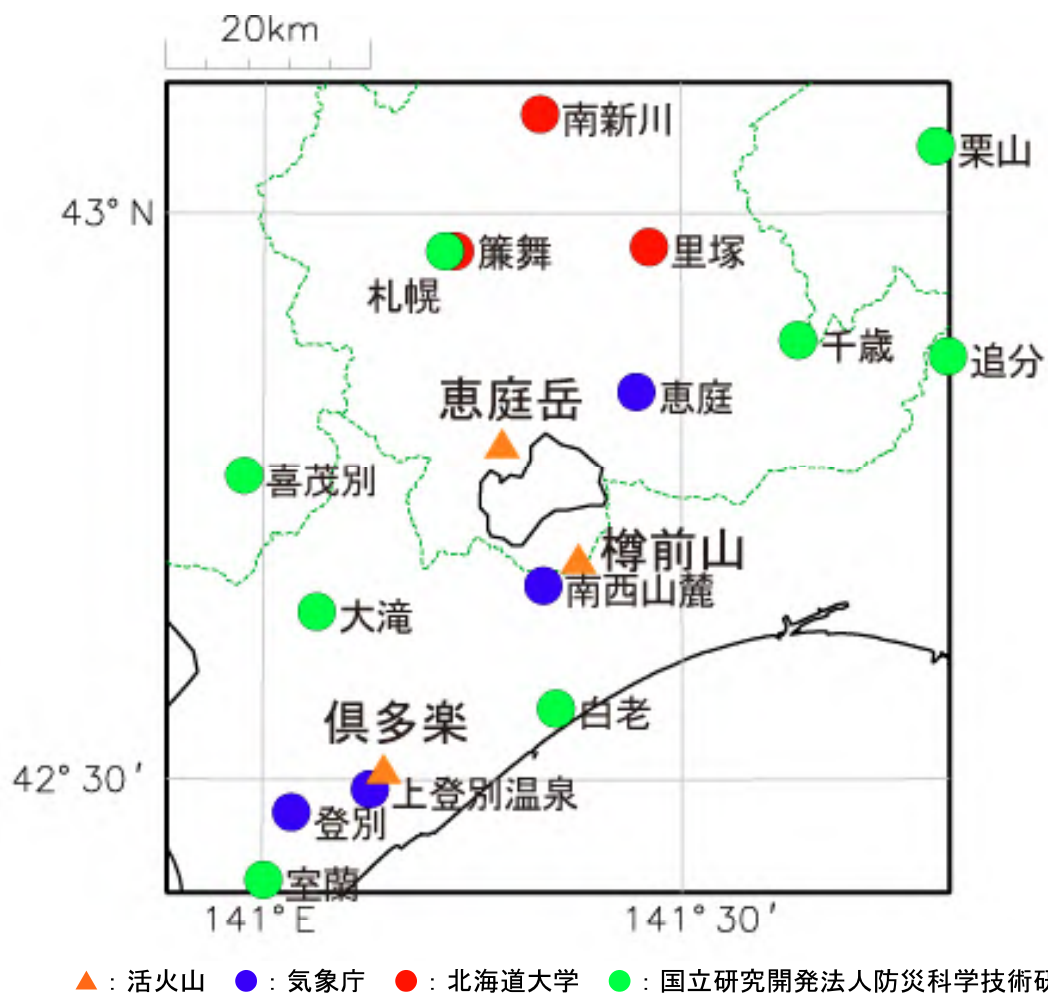


図 4 恵庭岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

羊 蹄 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 表面活動（図 1～図 3）

8 月 1 日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、山頂火口周辺及び山腹に噴気及び地熱域は認められなかった。

・ 地震活動（図 4）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。

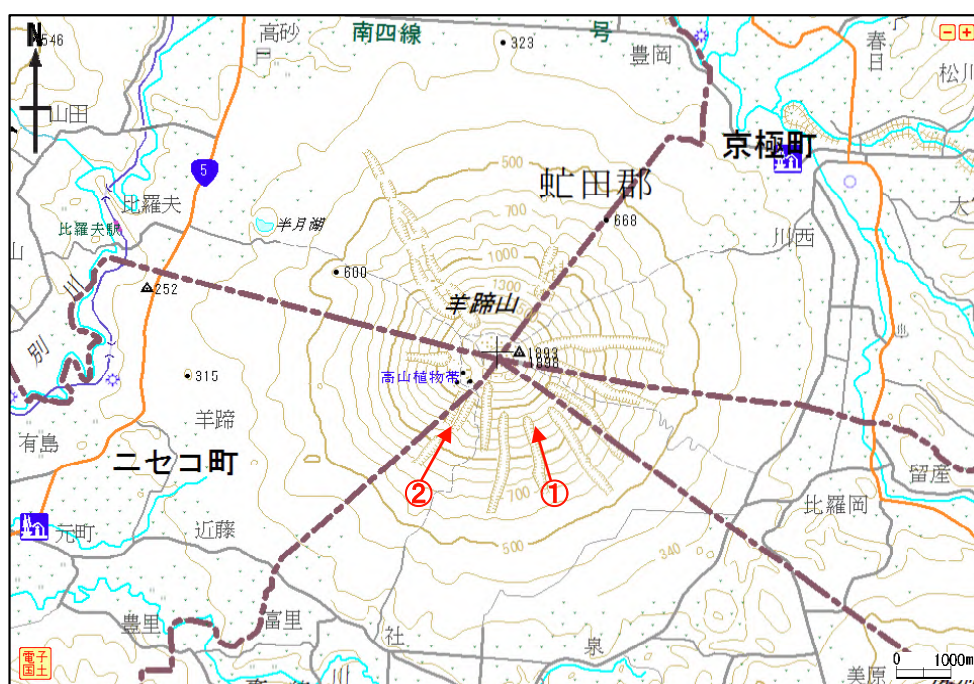


図 1 羊蹄山 周辺図と赤外熱映像及び写真の撮影方向（矢印）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。



図 2 羊蹄山 山体周辺の状況
南東側上空（図 1 の①）から撮影

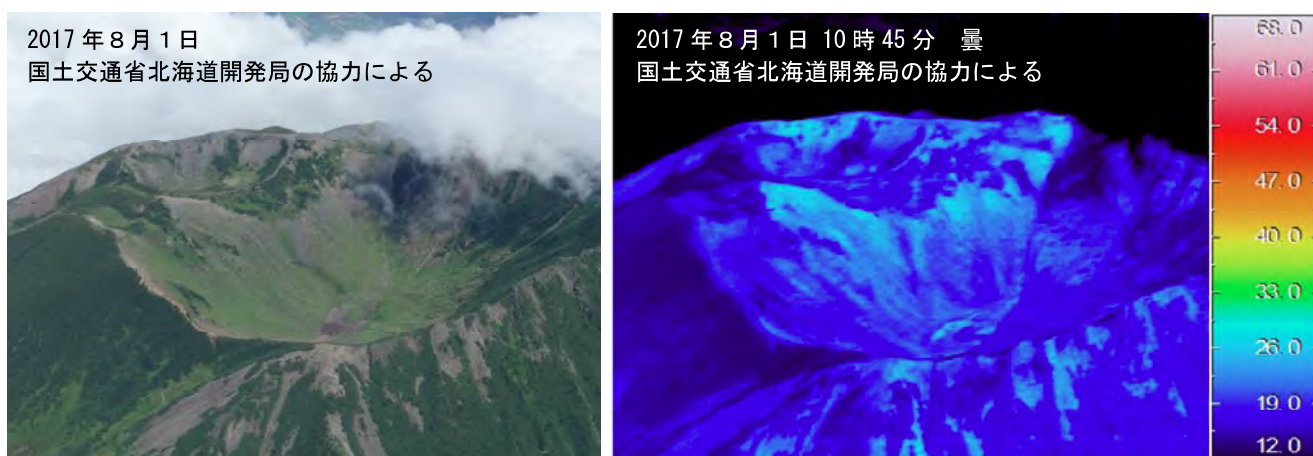


図 3 羊蹄山 赤外熱映像装置による山頂火口の地表面温度分布
南西側上空（図 1 の②）から撮影
・これまでと同様に、山頂火口周辺で噴気や地熱域は認められなかった。

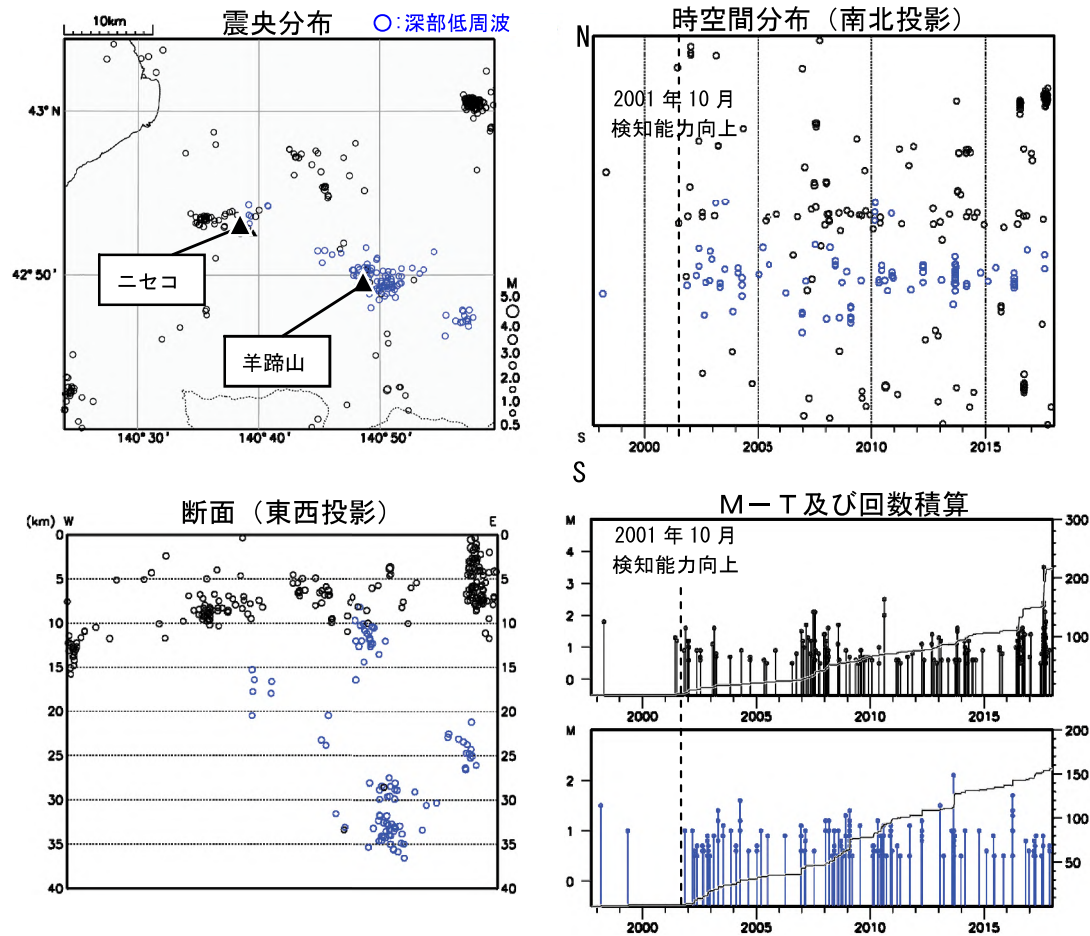


図 4 羊蹄山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

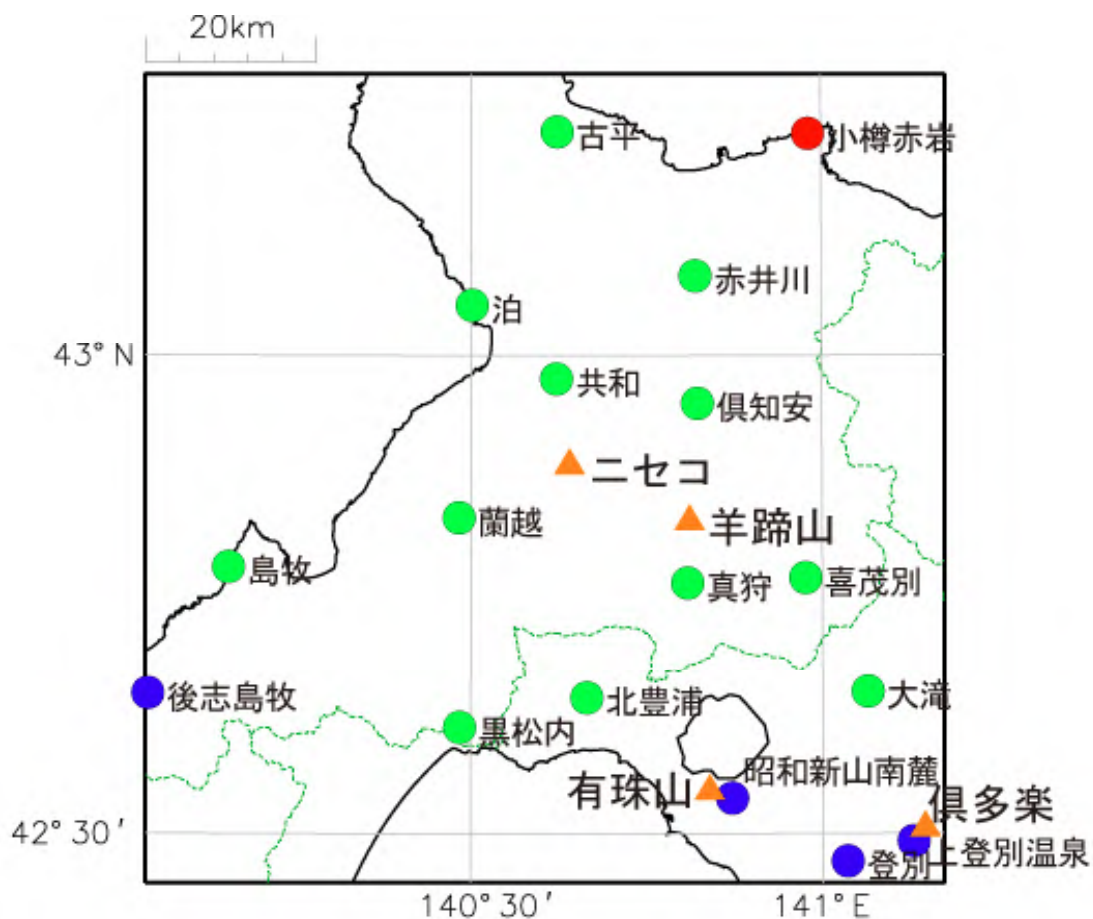
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 0.5$ 、深さ 40km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この地図の作成には国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。



▲ : 活火山 ● : 気象庁 ● : 北海道大学 ● : 国立研究開発法人防災科学技術研究所

図 5 羊蹄山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

ニ セ コ

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 表面活動（図 1～図 4）

8 月 1 日に実施した上空からの観測（国土交通省北海道開発局の協力による）では、イワオヌプリ（硫黄山）山頂部には噴気は認められず、五色温泉周辺にも噴気は認められなかった。イワオヌプリ山頂部にはこれまでと同様に地熱域は認められなかった。

・ 地震活動（図 5）

山体及び周辺で発生する地震は少ない状態で経過した。

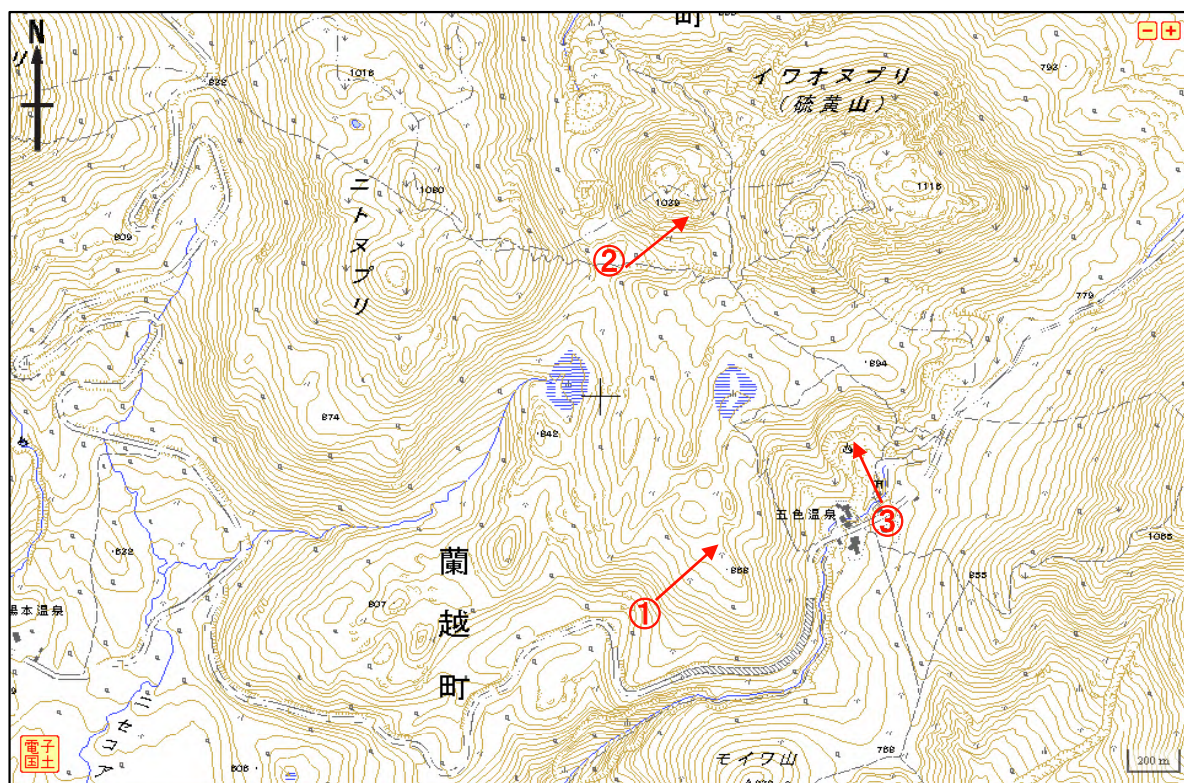


図 1 ニセコ 赤外熱映像及び写真の撮影方向（矢印）

この地図の作成には、国土地理院発行の『電子地形図（タイル）』の複製を使用した。



図2 ニセコ イワオヌプリと
五色温泉周辺の状況
南西側上空（図1の①）から撮影

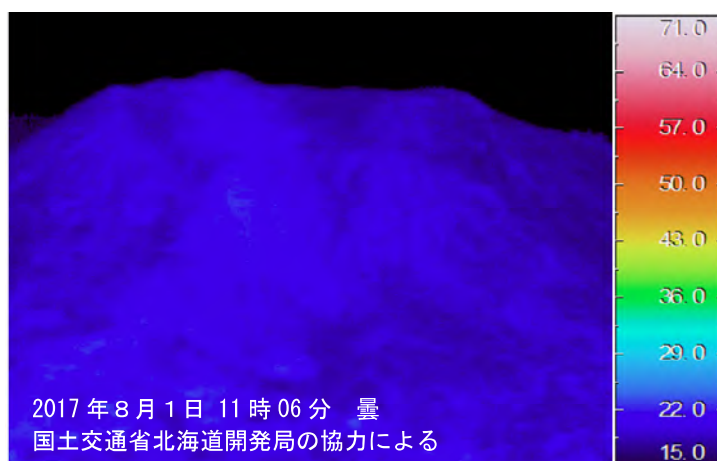


図3 ニセコ 赤外熱映像装置によるイワオヌプリ山頂部の地表面温度分布
南西側上空（図1の②）から撮影
・これまでと同様に、イワオヌプリ山頂部に噴気や地熱域は認められなかった
（山頂部で白く見えているものは薄い雲である）。

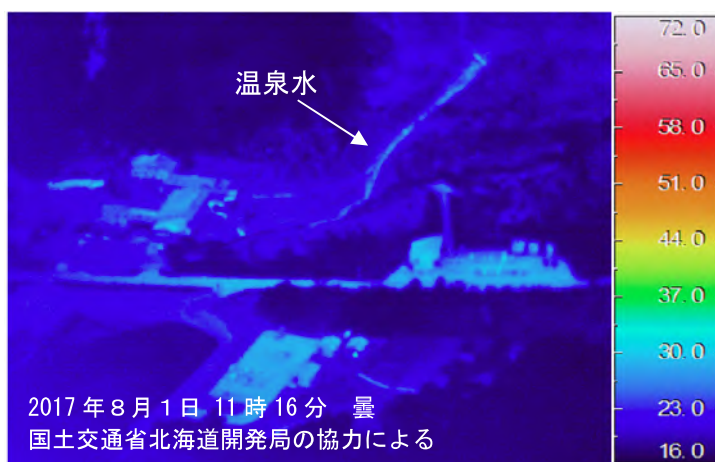


図4 ニセコ 赤外熱映像装置による五色温泉周辺の地表面温度分布
南側上空（図1の③）から撮影
・これまでと同様に、五色温泉周辺に噴気や地熱域は認められなかった。

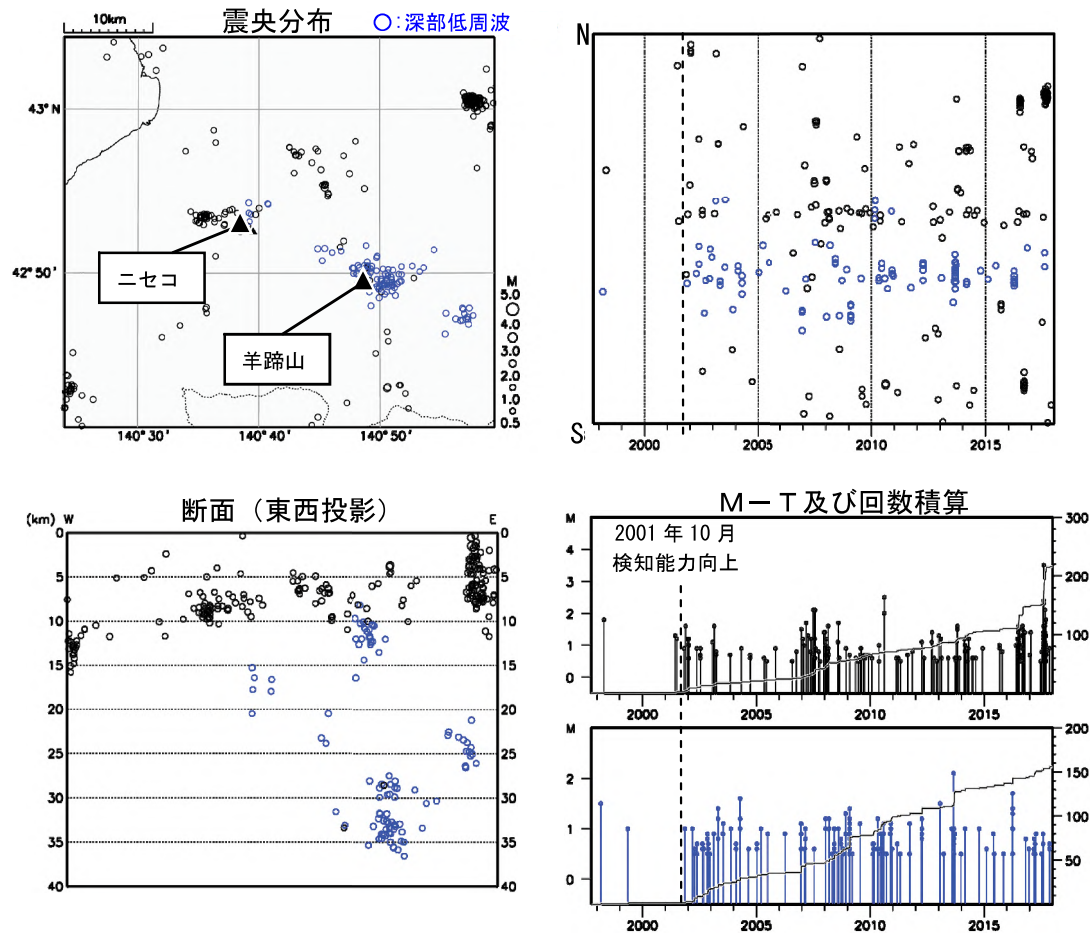


図5 ニセコ 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

(1997年10月～2017年12月31日、 $M \geq 0.5$ 、深さ40km以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものがあることがある。

2001年10月以降、Hi-netの追加に伴い検知力が向上している。

この地図の作成には国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用した。

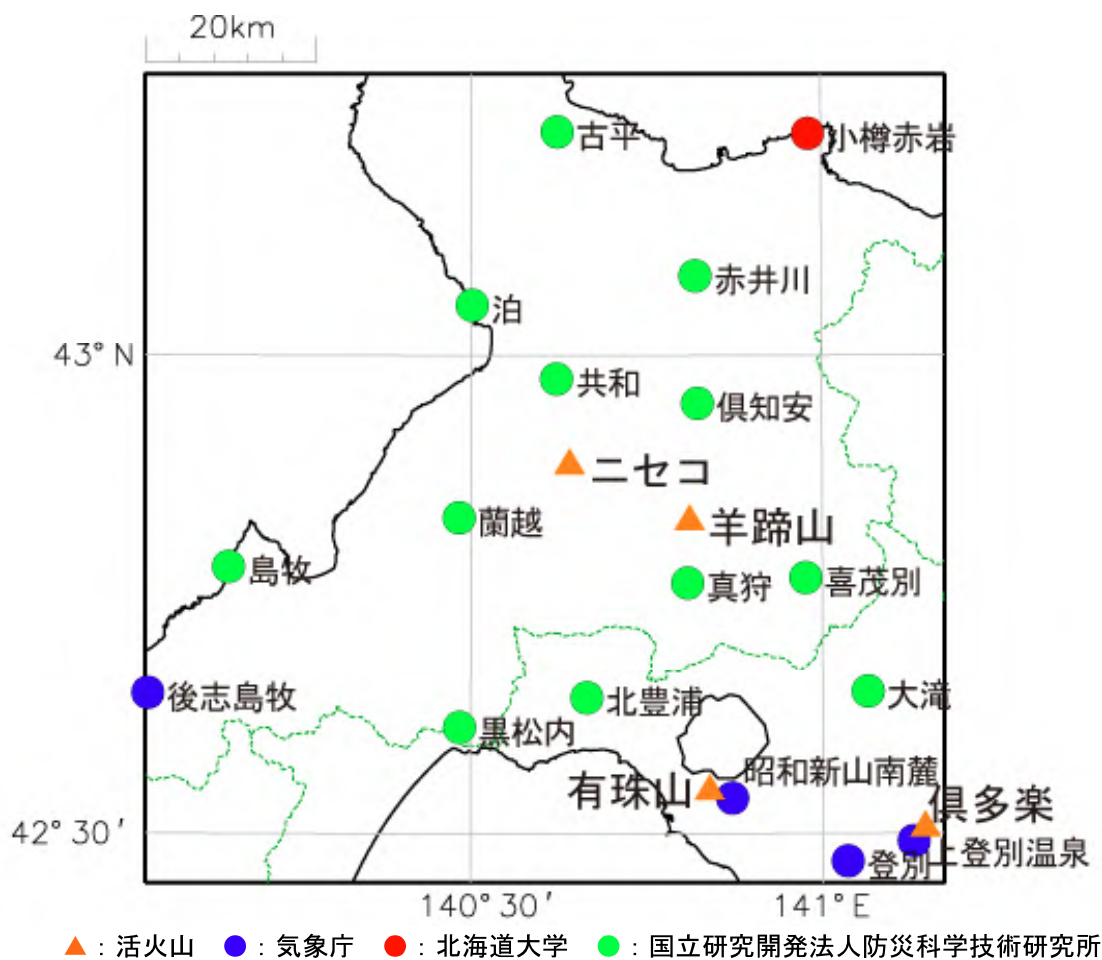


図 6 ニセコ 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

渡 島 大 島

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

・ 表面活動

渡島大島に関して異常現象等の報告はされていない。

・ 地震活動（図 1）

山体を震源とする地震は発生していない。

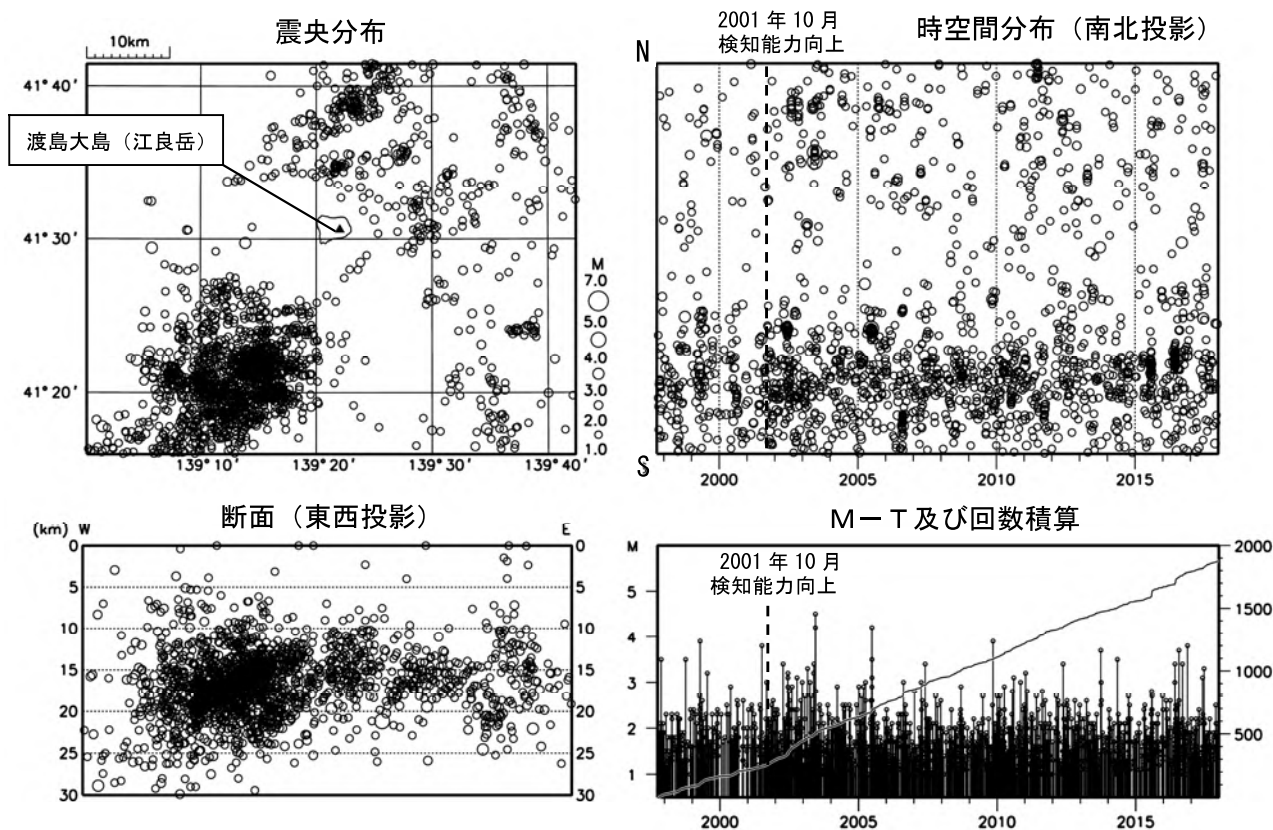


図 1 渡島大島 一元化震源による周辺の地震活動

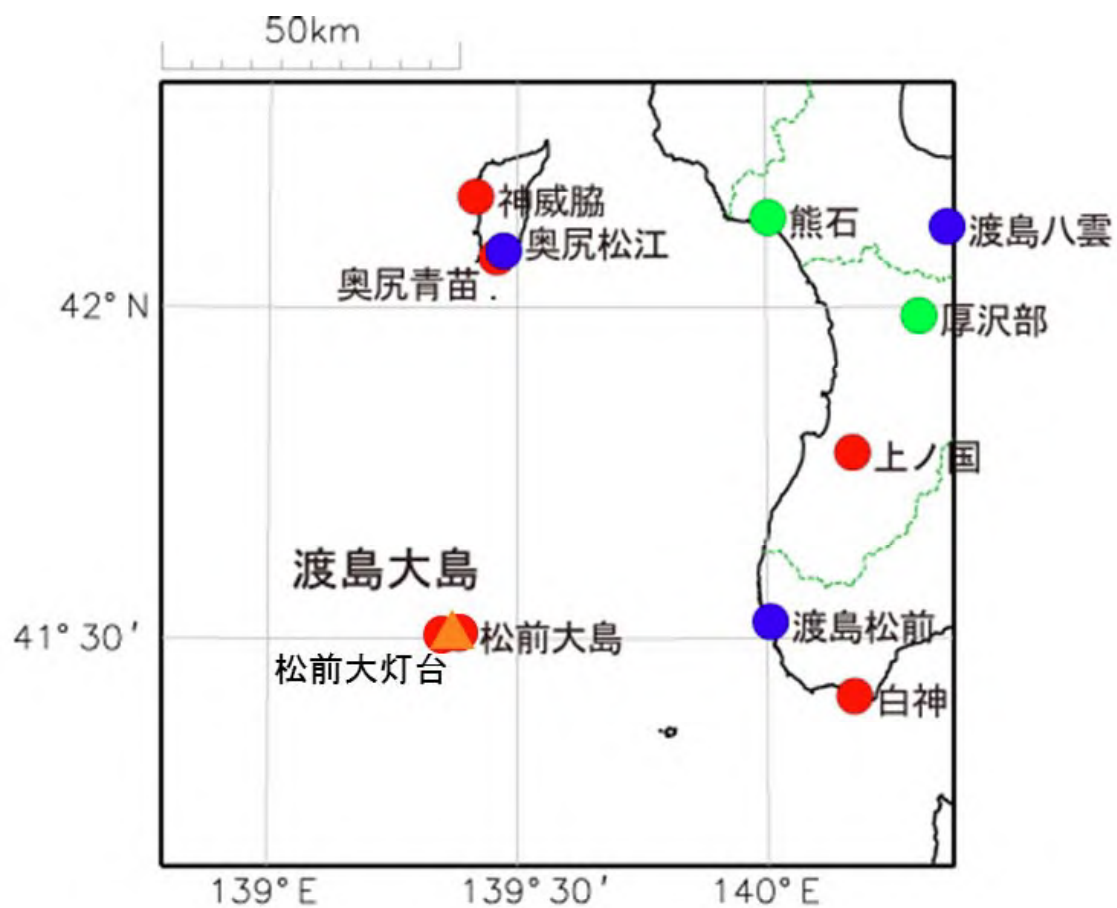
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 30km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知能力が向上している。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。



▲ : 活火山 ● : 気象庁 ● : 北海道大学 ● : 国立研究開発法人防災科学技術研究所

図2 渡島大島 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

茂 世 路 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

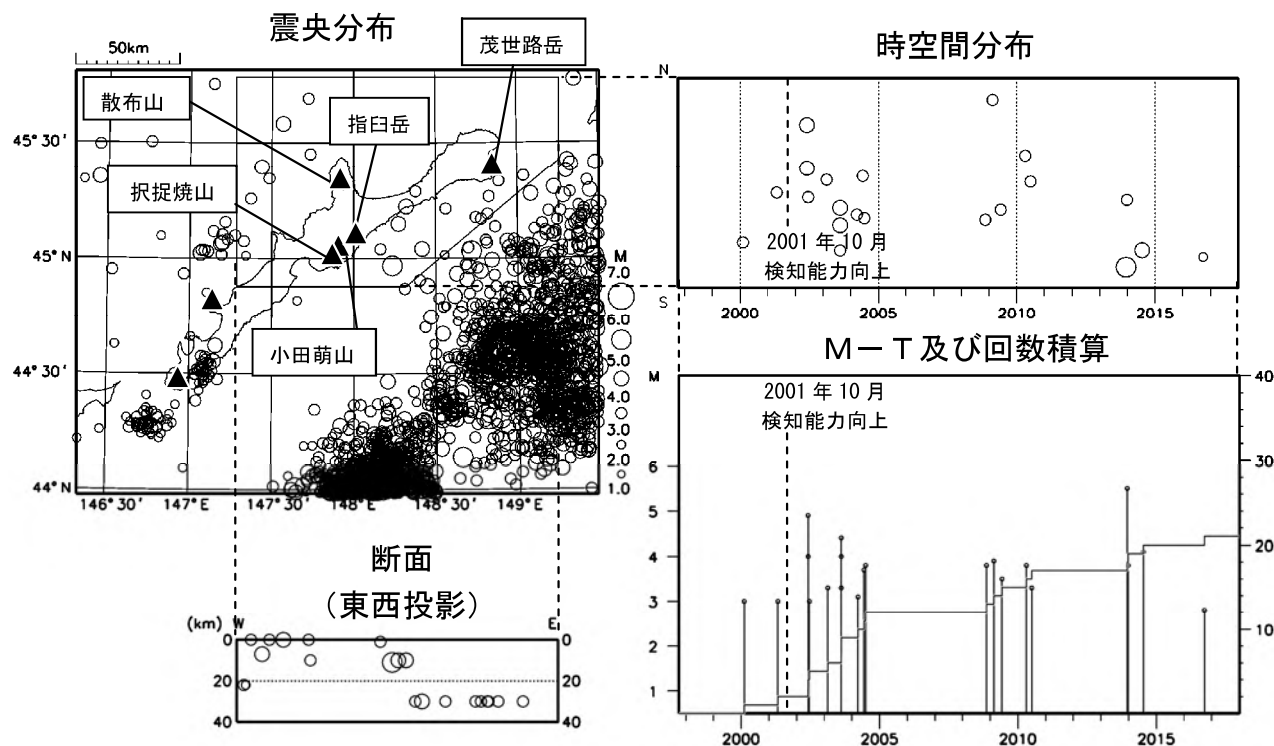


図 1 茂世路岳 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000 (行政界・海岸線)」を使用した。

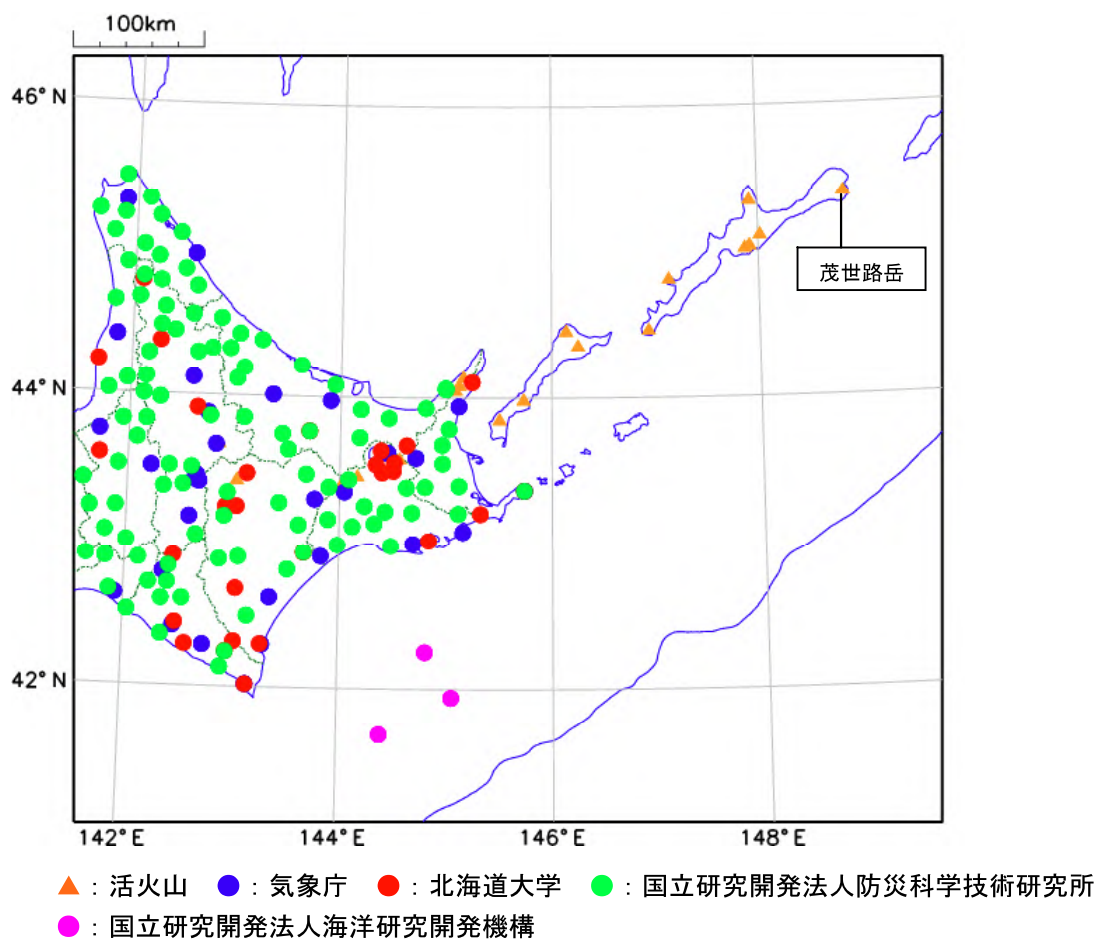


図 2 茂世路岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

散布山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

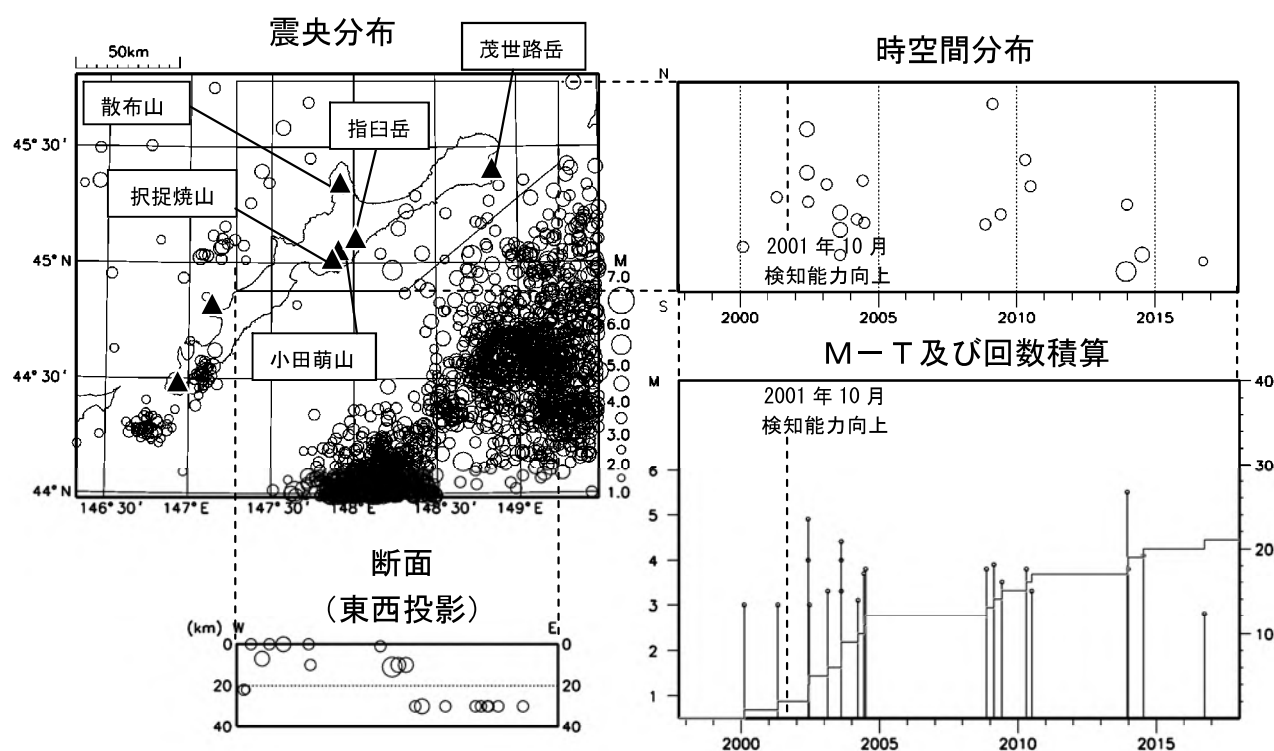


図 1 散布山 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

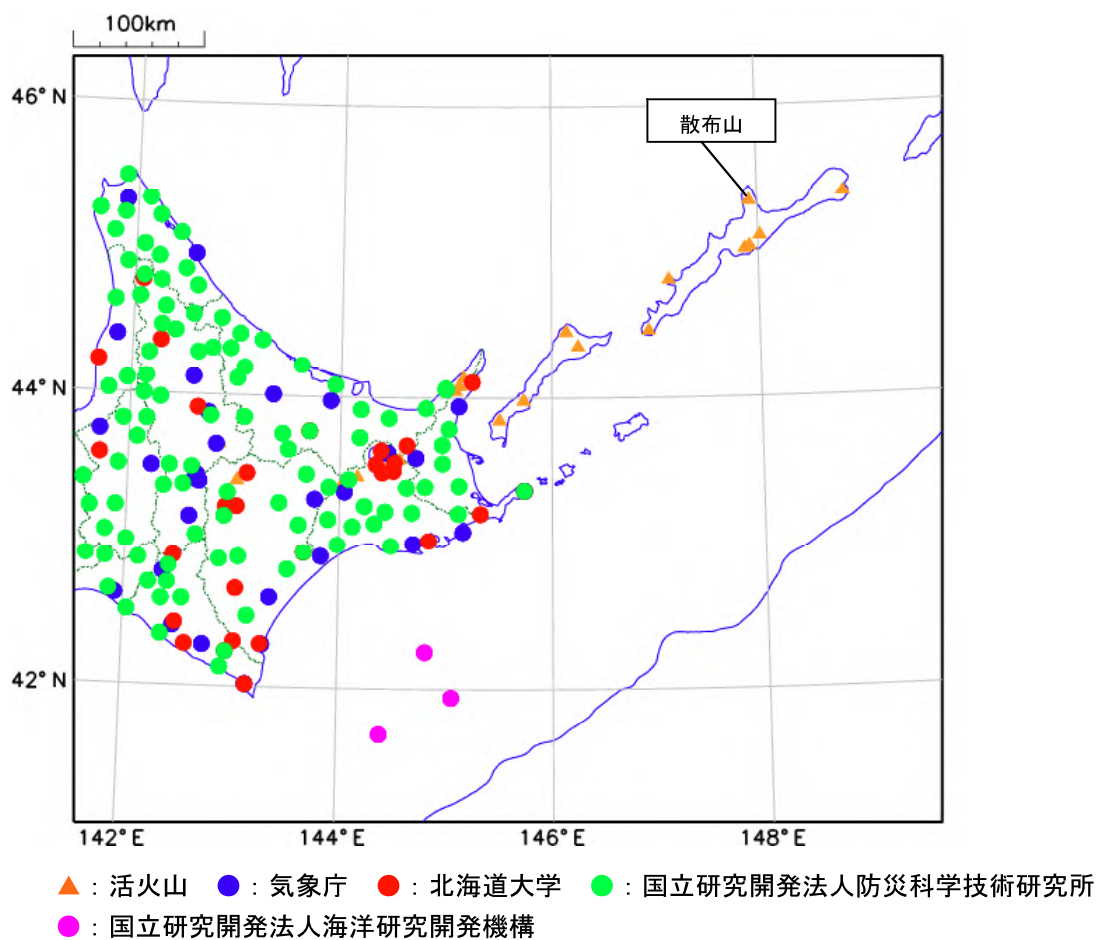


図 2 散布山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

指 臼 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

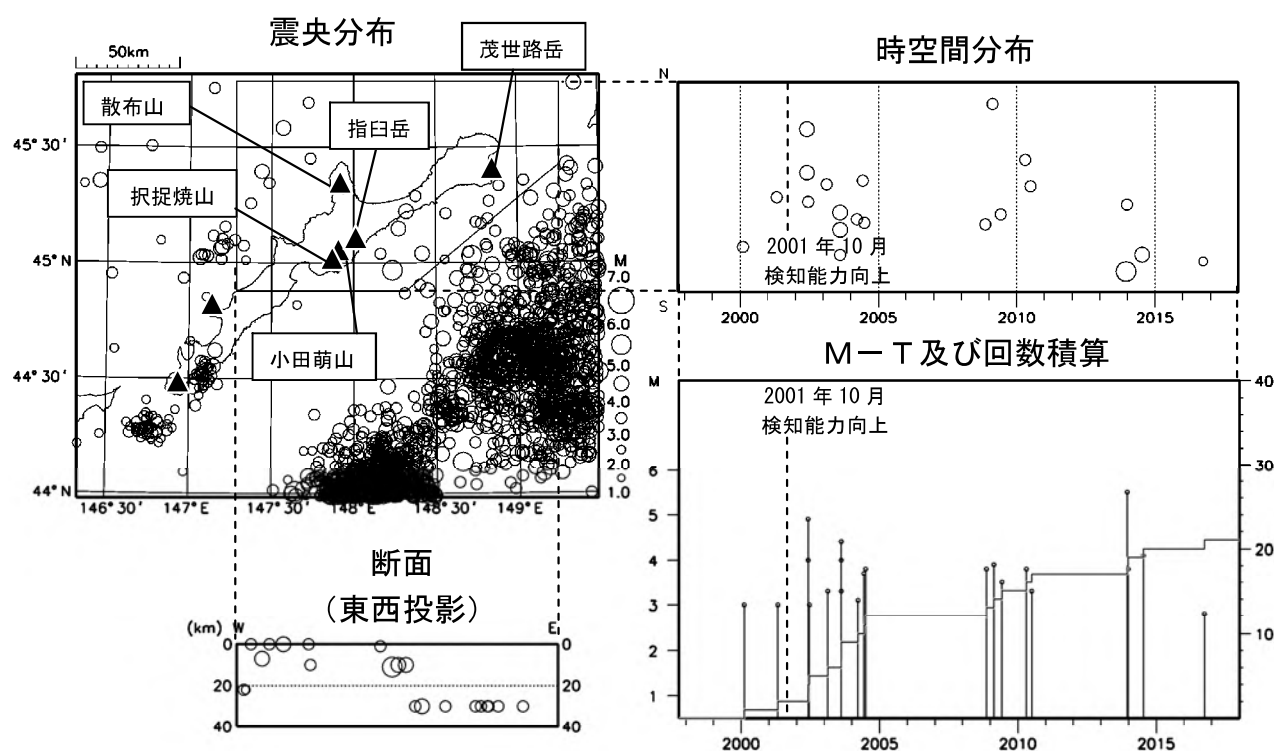


図 1 指臼岳 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

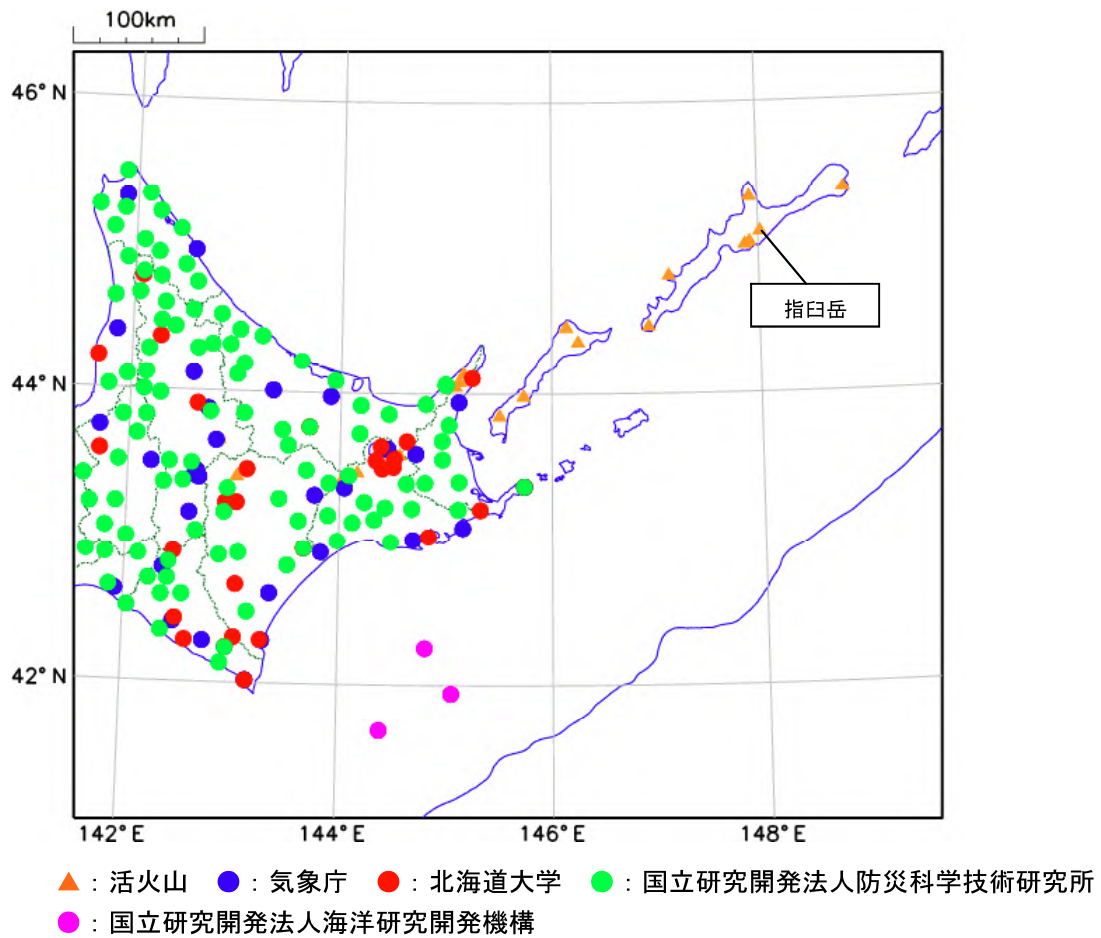


図 2 指臼岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

小 田 萌 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星(MTSAT-2 及び Himawari-8)で検知できるような噴煙は観測されていない。

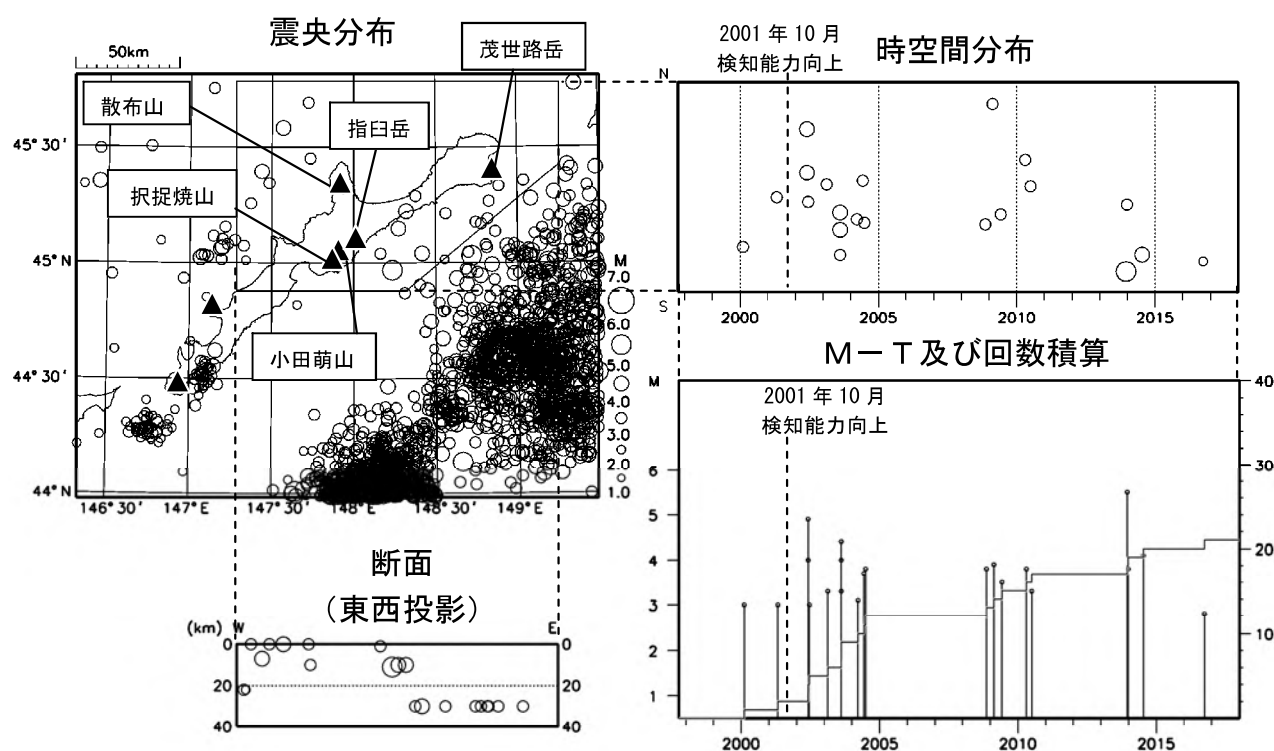


図 1 小田萌山 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

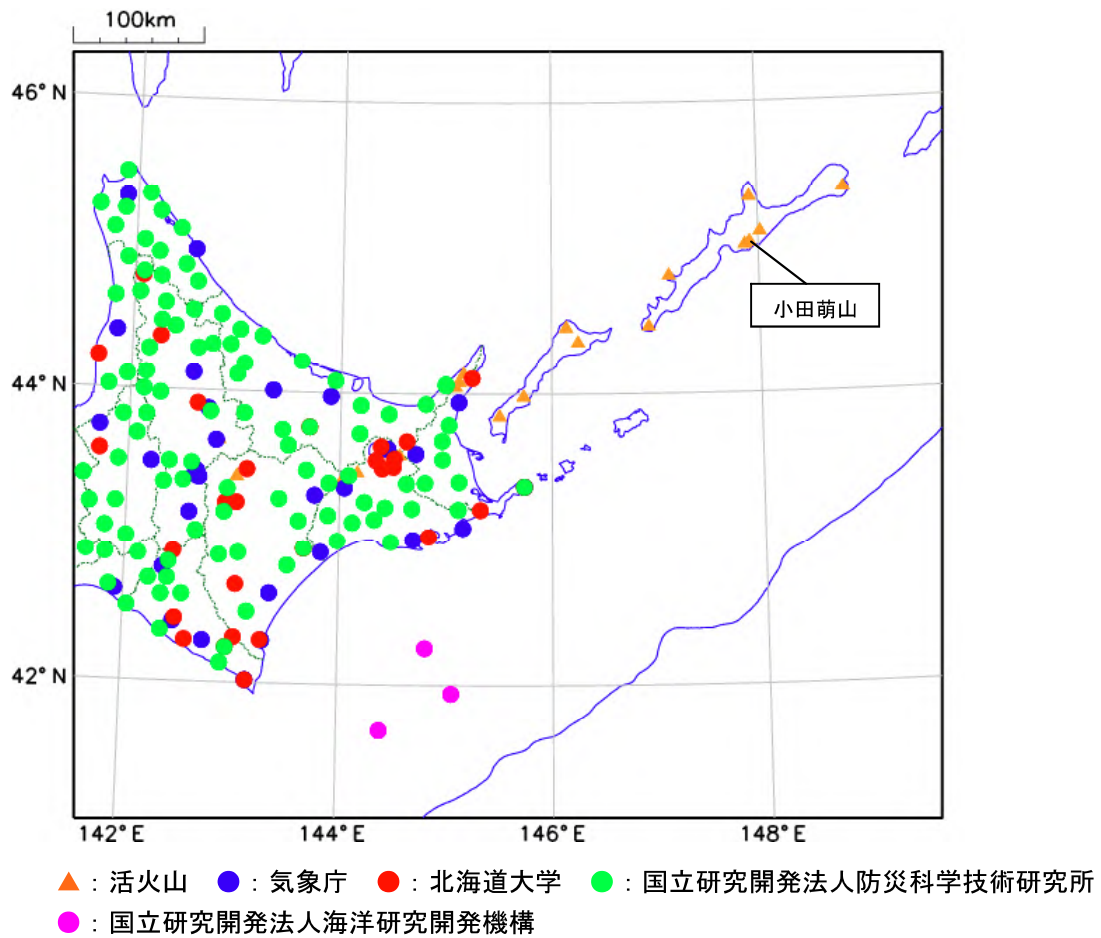


図 2 小田萌山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

択捉焼山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

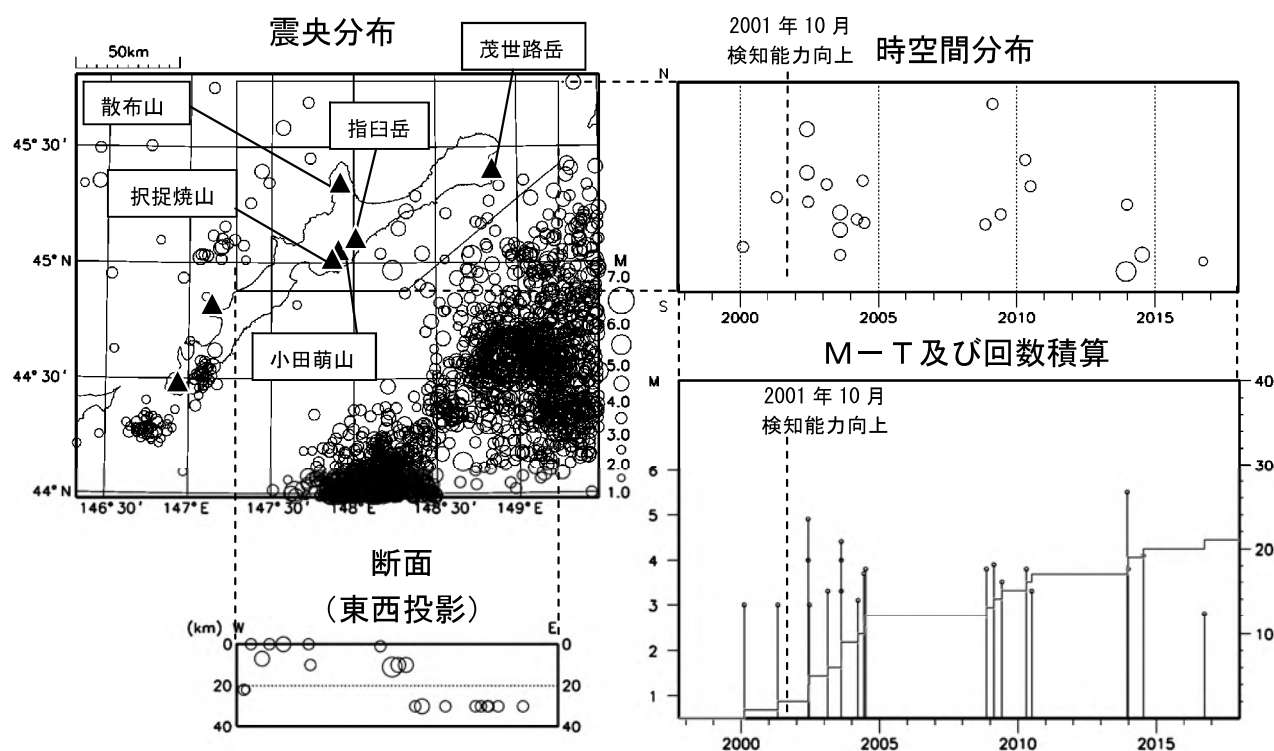


図 1 択捉焼山 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

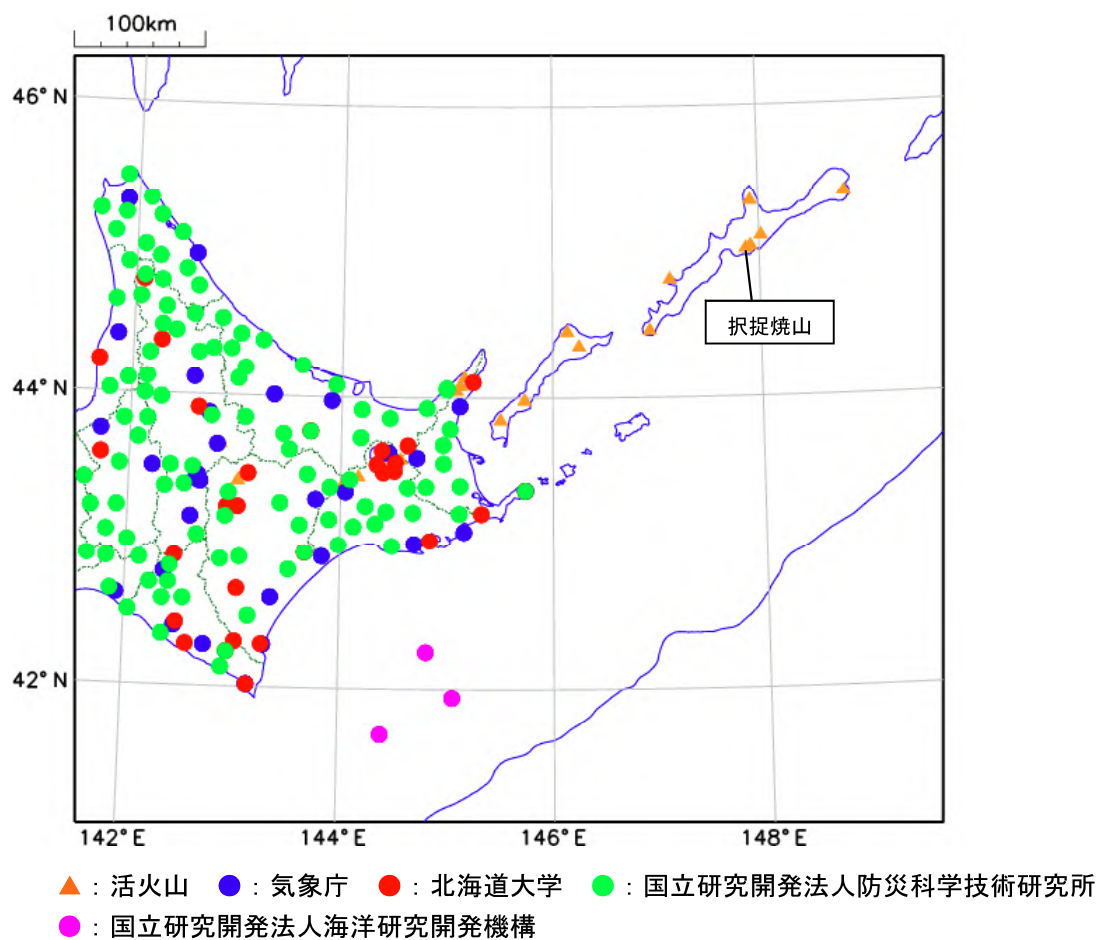


図 2 択捉焼山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

択捉阿登佐岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

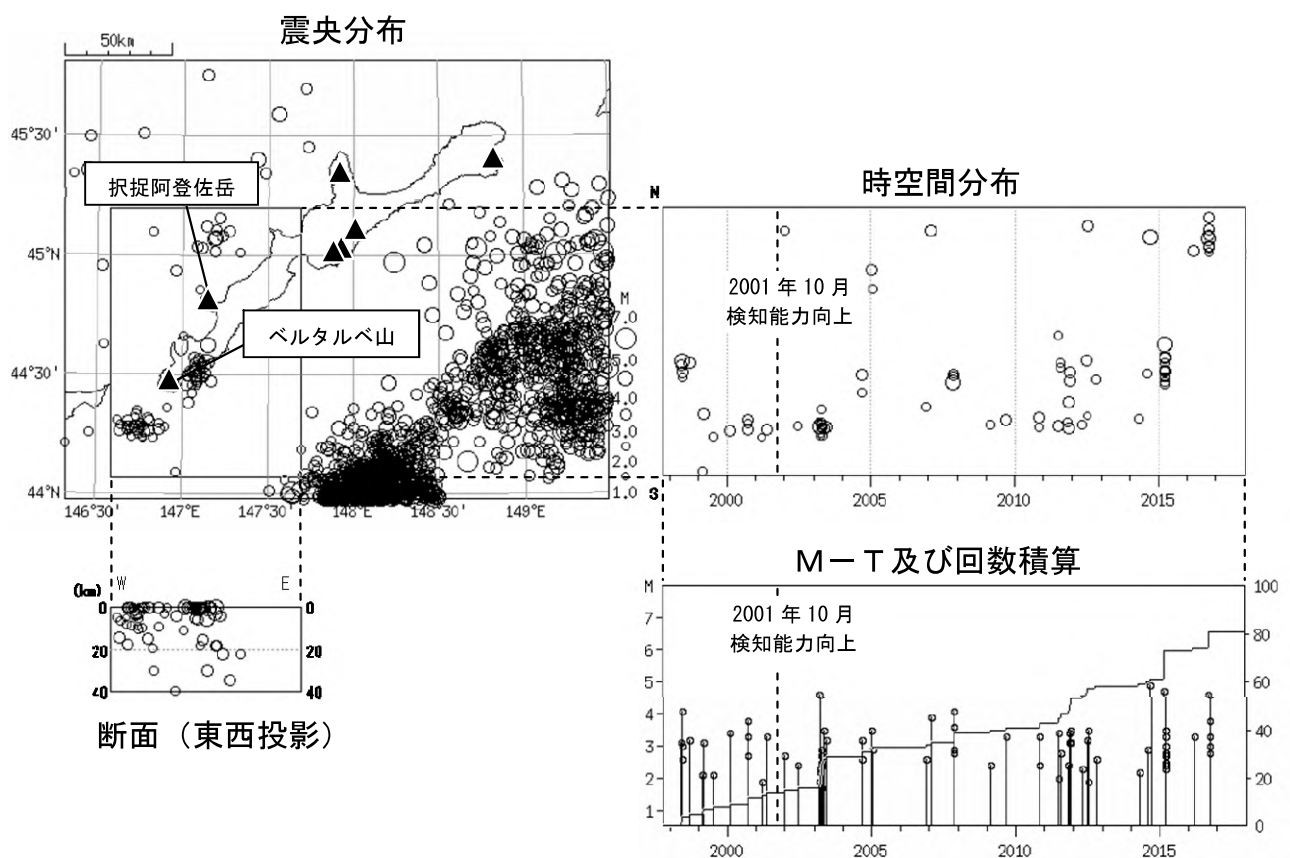


図 1 択捉阿登佐岳 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

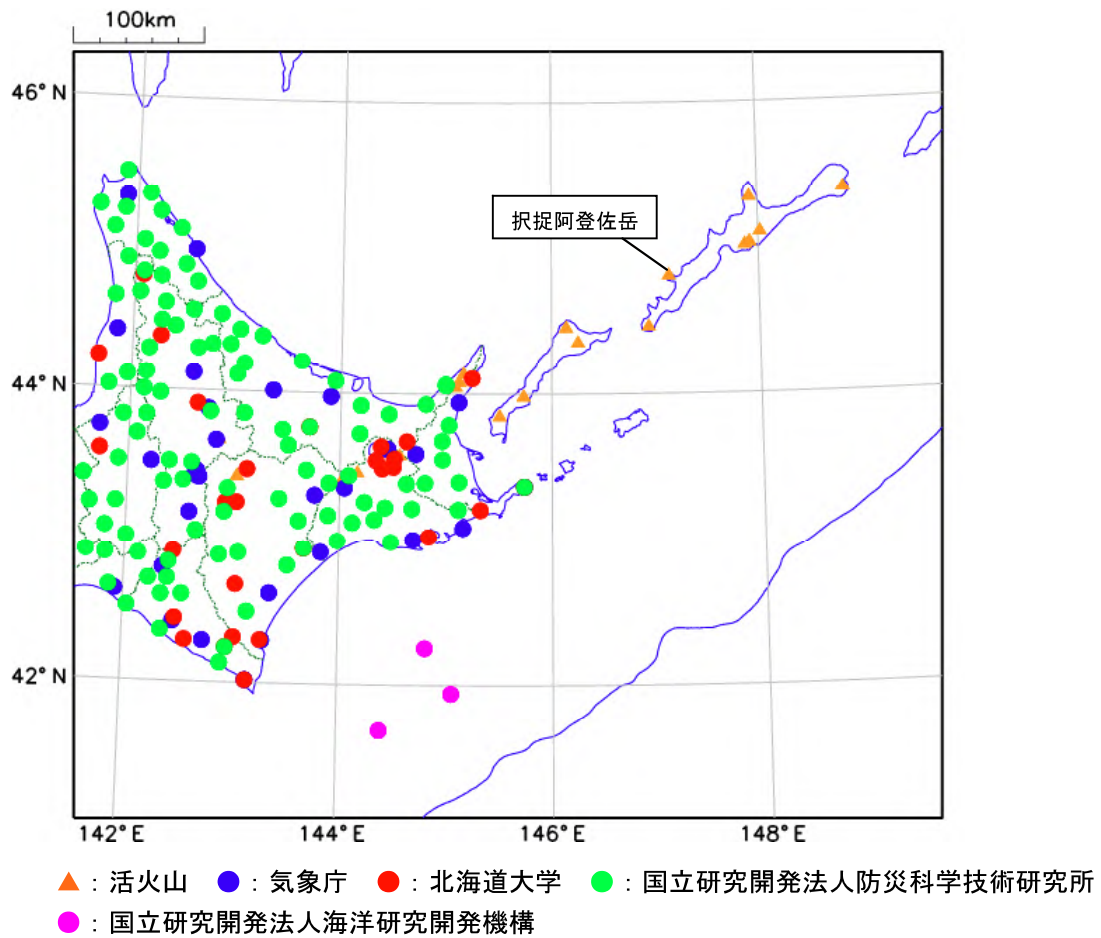


図 2 択捉阿登佐岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

ベルタルベ山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

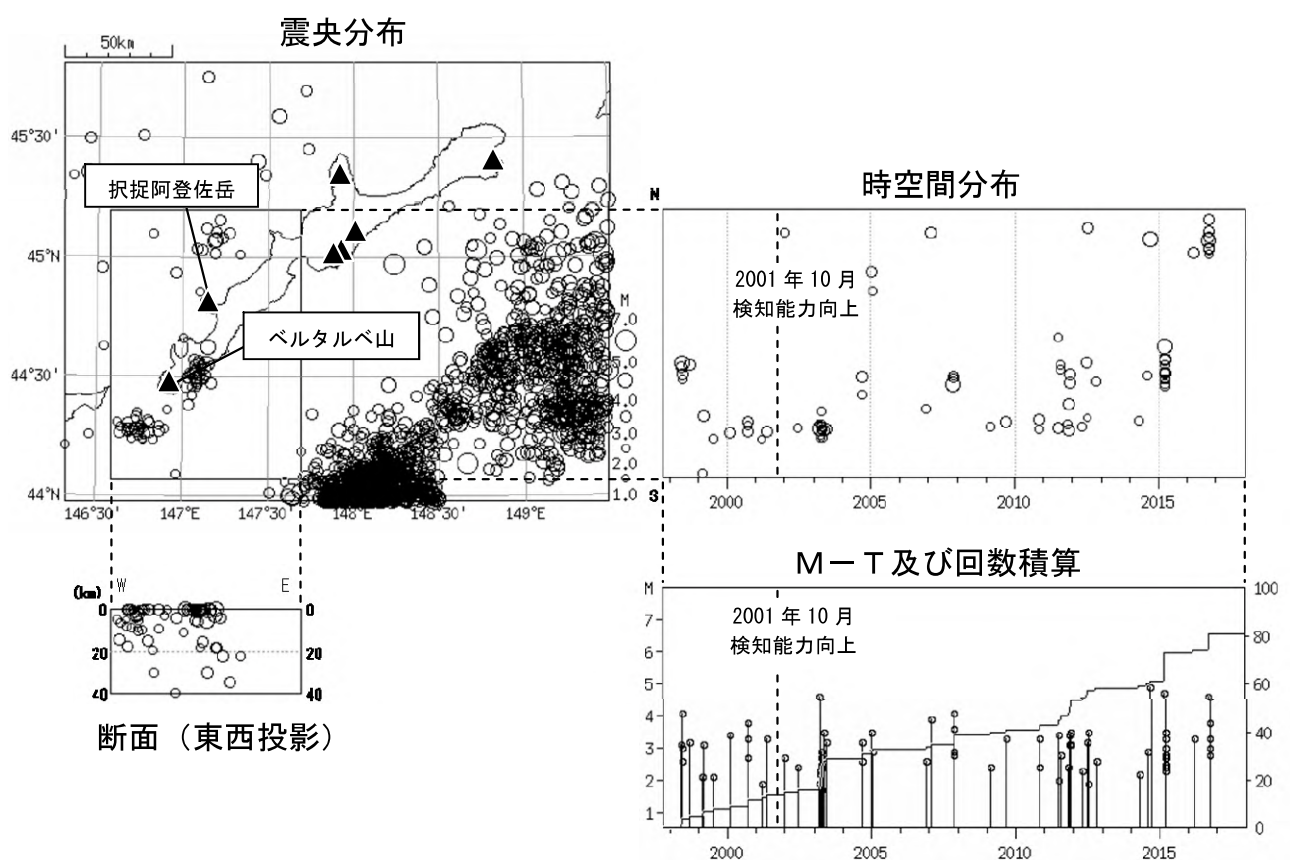


図 1 ベルタルベ山 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

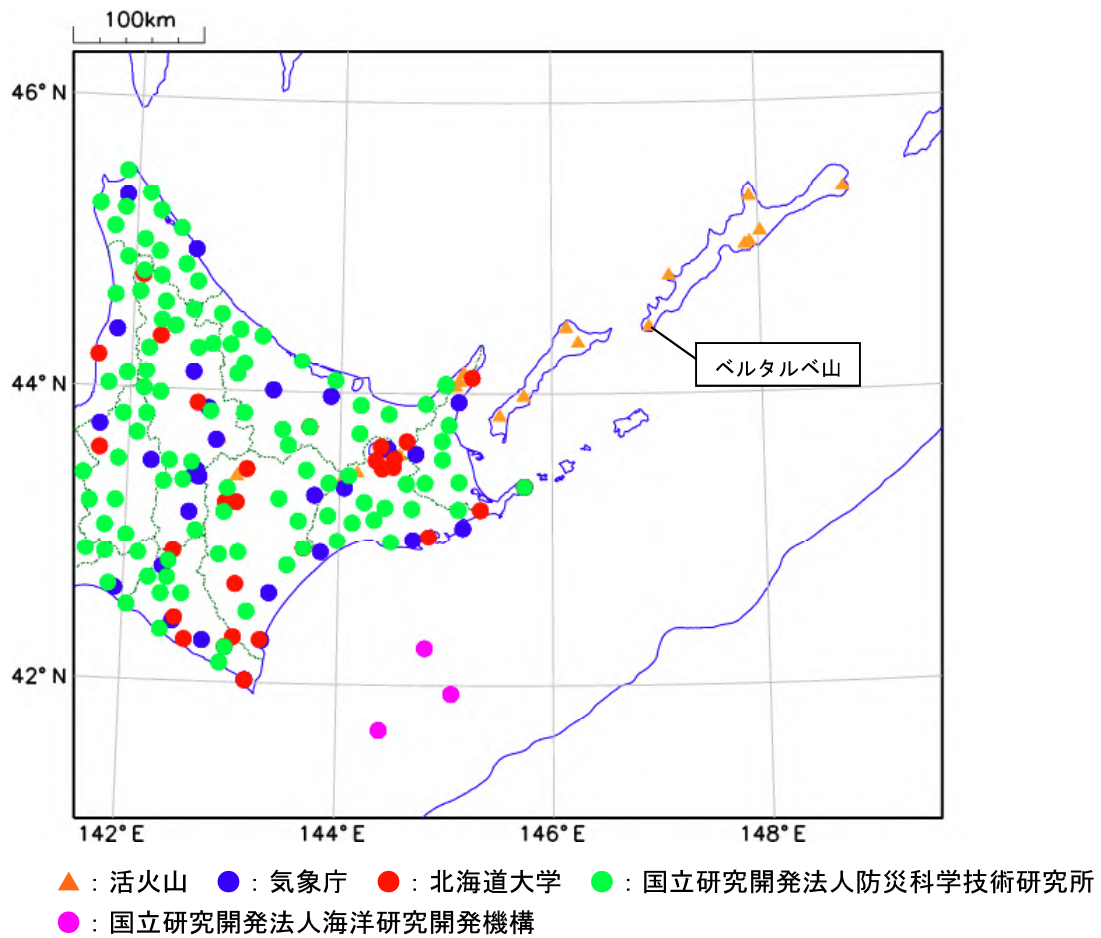


図 2 ベルタルペ山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

ル ル イ 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星(MTSAT-2 及び Himawari-8)で検知できるような噴煙は観測されていない。

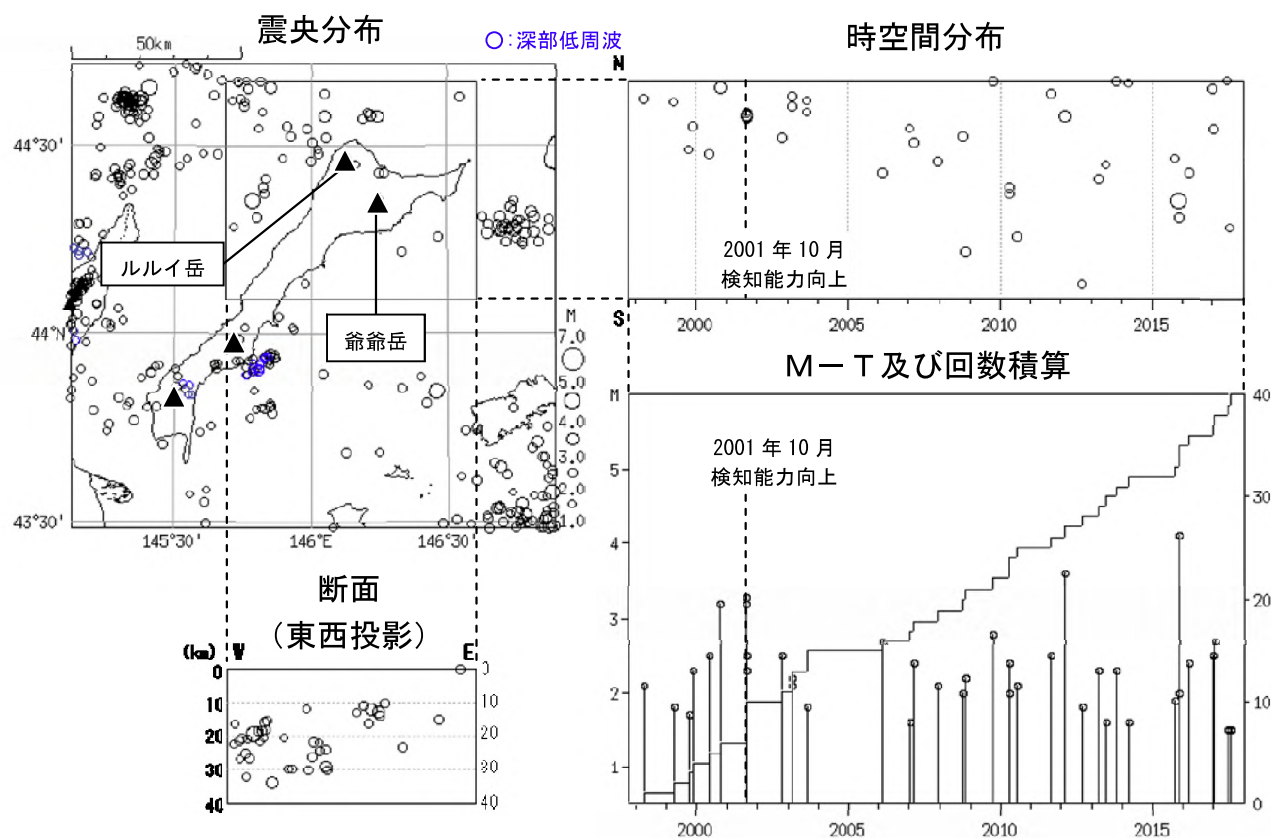


図 1 ルルイ岳 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000 (行政界・海岸線)」を使用した。

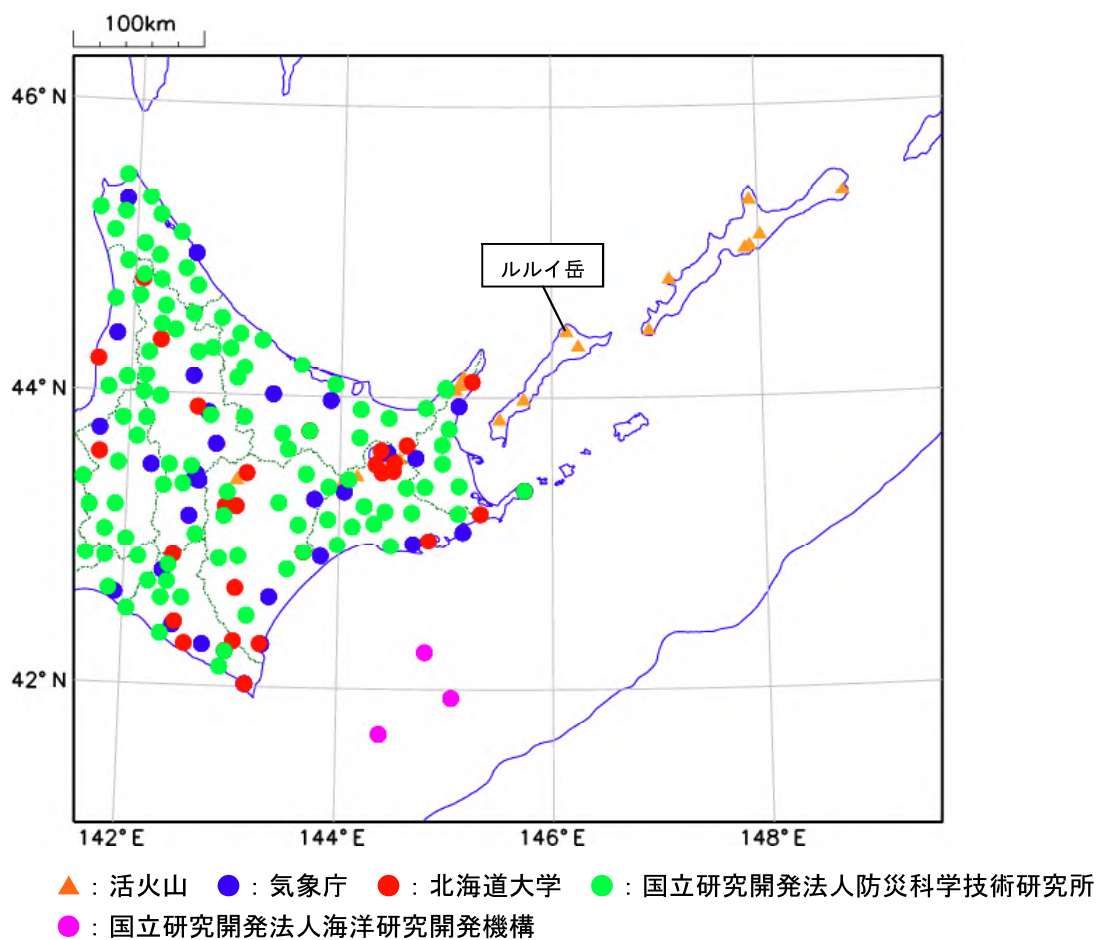


図 2 ルルイ岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

爺 爺 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星(MTSAT-2 及び Himawari-8)で検知できるような噴煙は観測されていない。

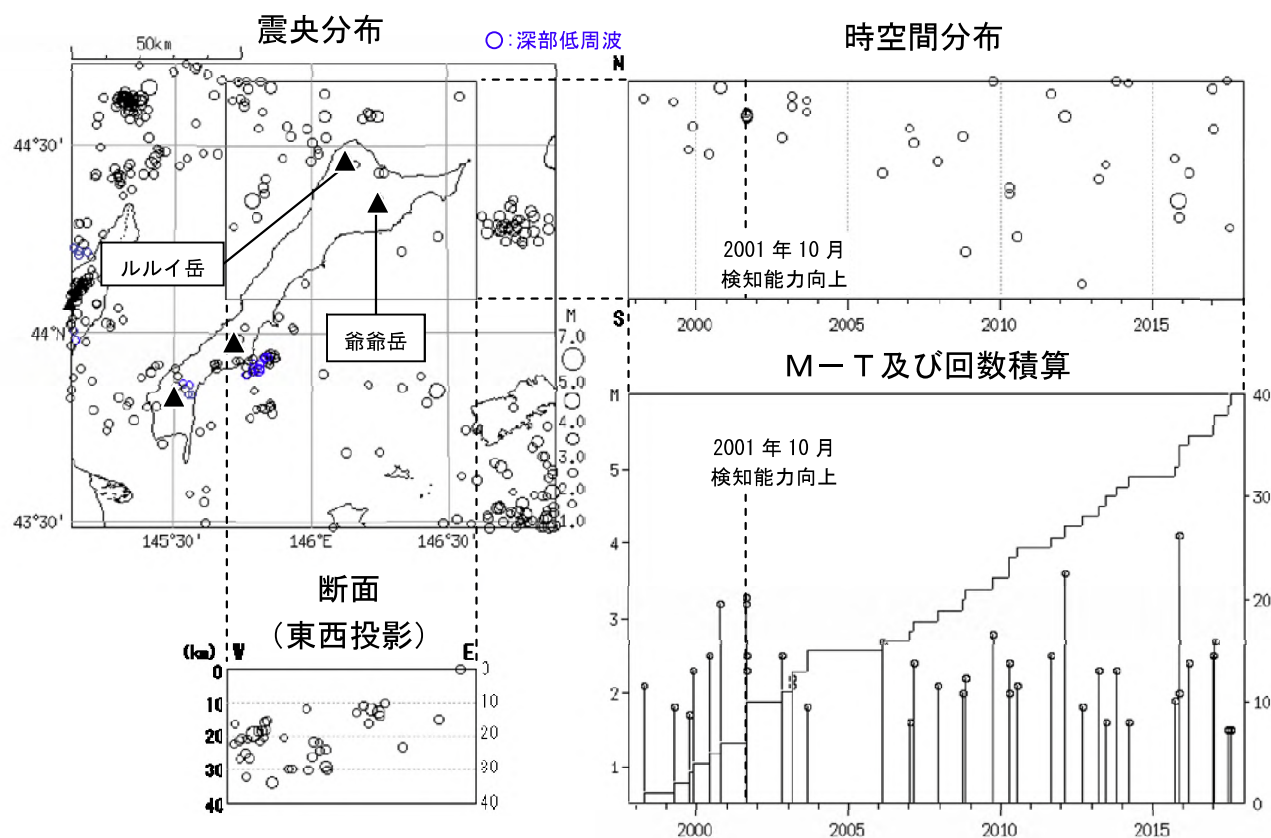


図 1 爺爺岳 一元化震源による周辺の地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

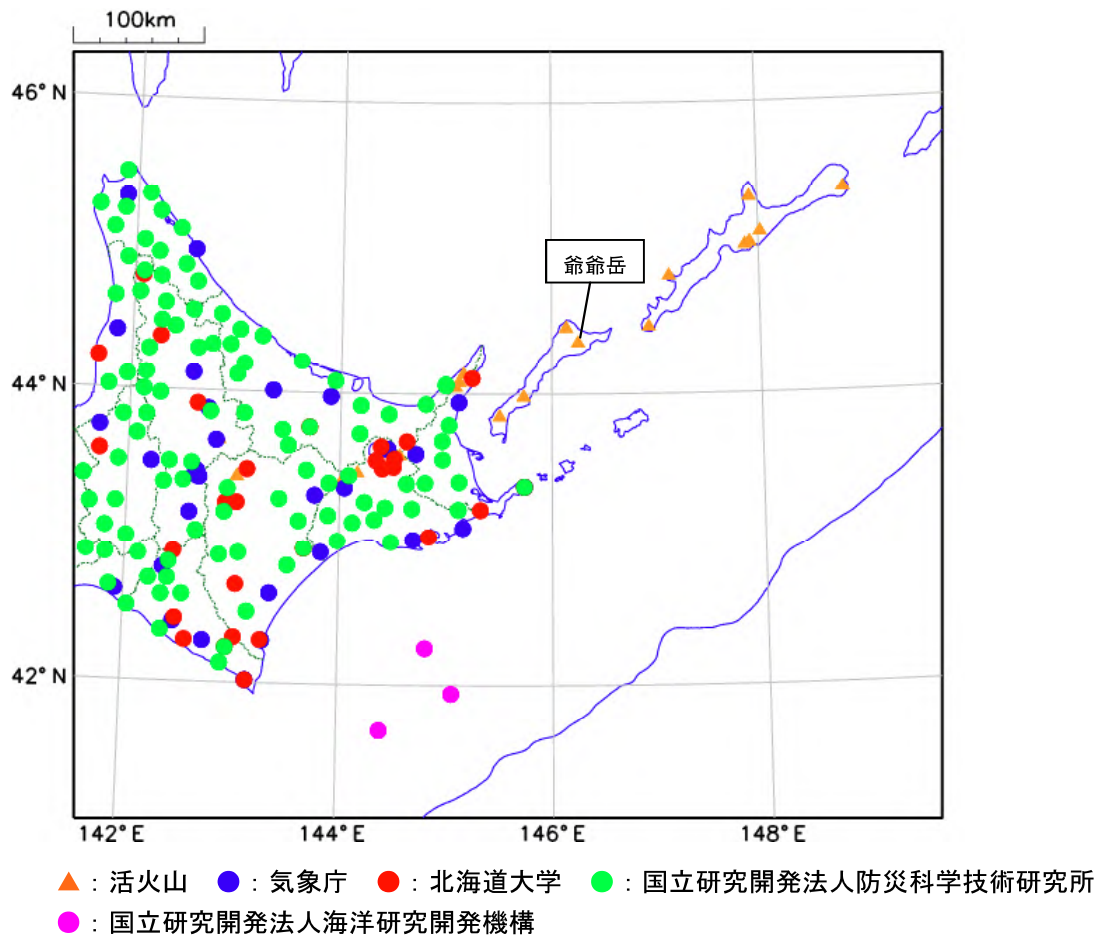


図 2 爺爺岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

羅 臼 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

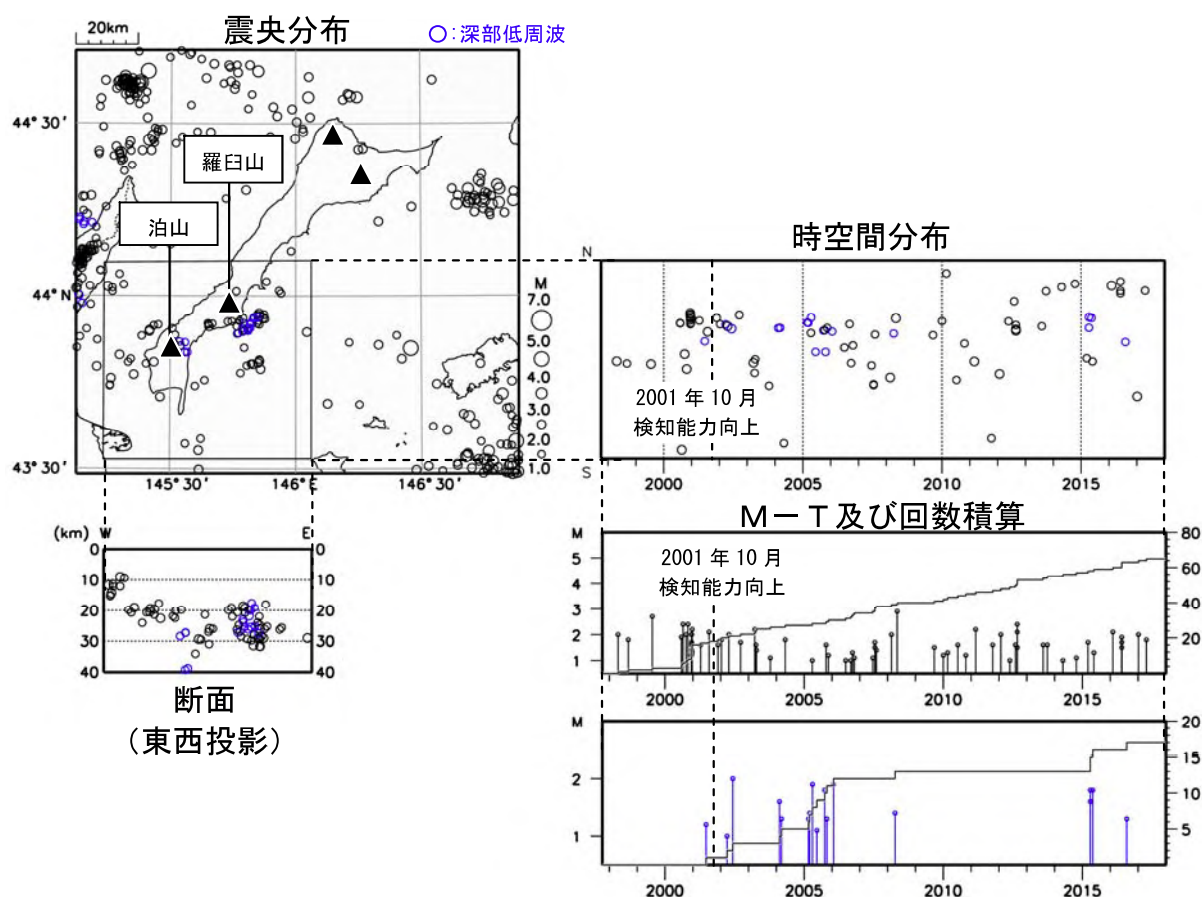


図 1 羅臼山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動

(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

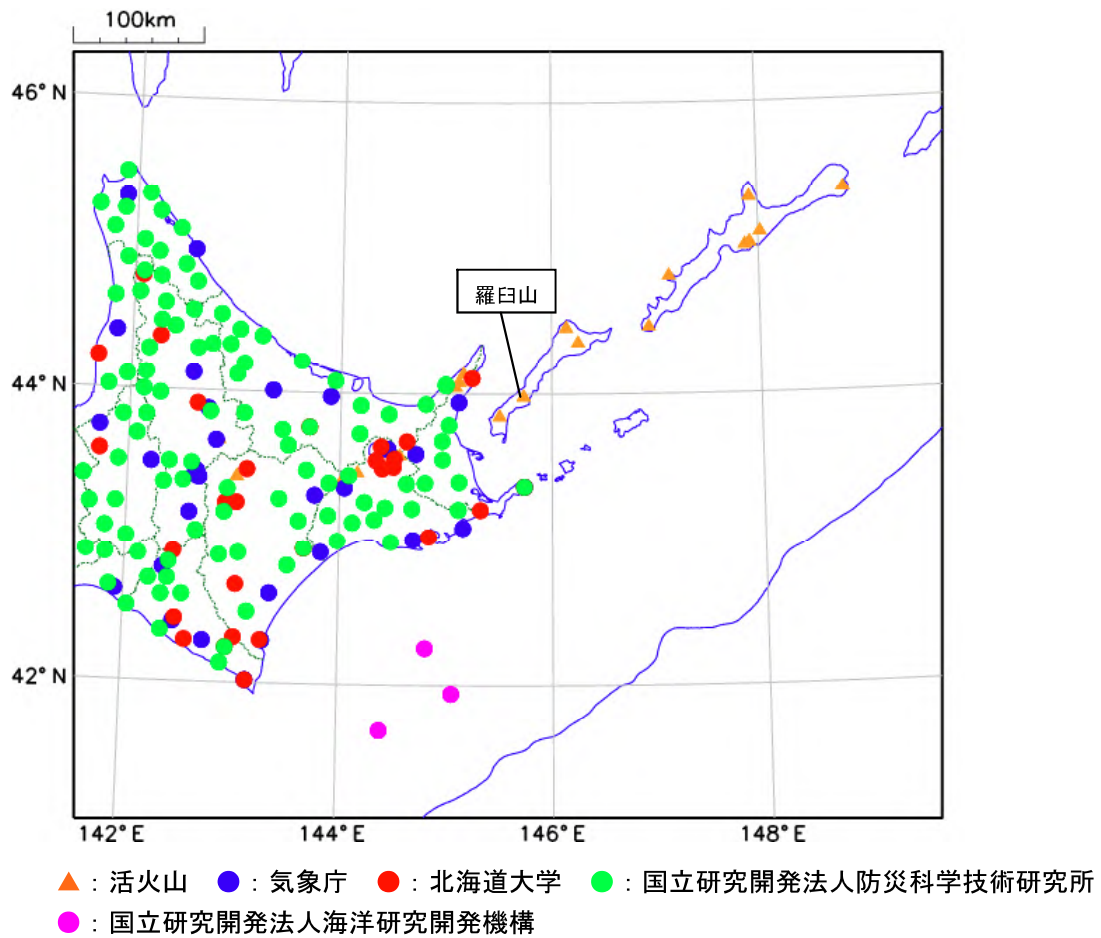


図 2 羅臼山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

泊 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

山体周辺で目立った地震活動はみられない。

気象衛星 (MTSAT-2 及び Himawari-8) で検知できるような噴煙は観測されていない。

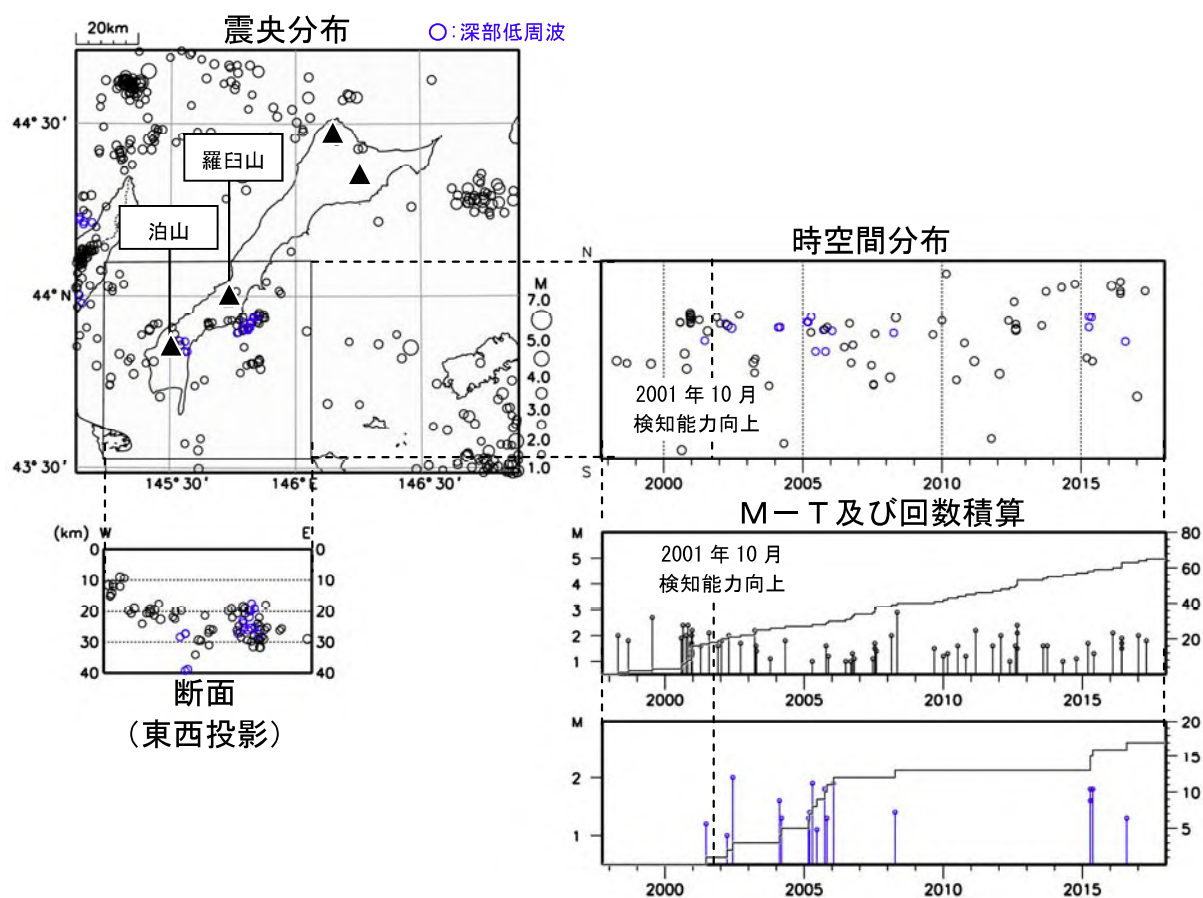


図 1 泊山 一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震活動
(1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日、 $M \geq 1.0$ 、深さ 40 km 以浅)

青色のシンボルは深部低周波地震。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

2001 年 10 月以降、Hi-net の追加に伴い検知力が向上している。

この図の作成には、国土地理院発行の「数値地図 25000（行政界・海岸線）」を使用した。

この資料は気象庁のほか、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを利用して作成した。

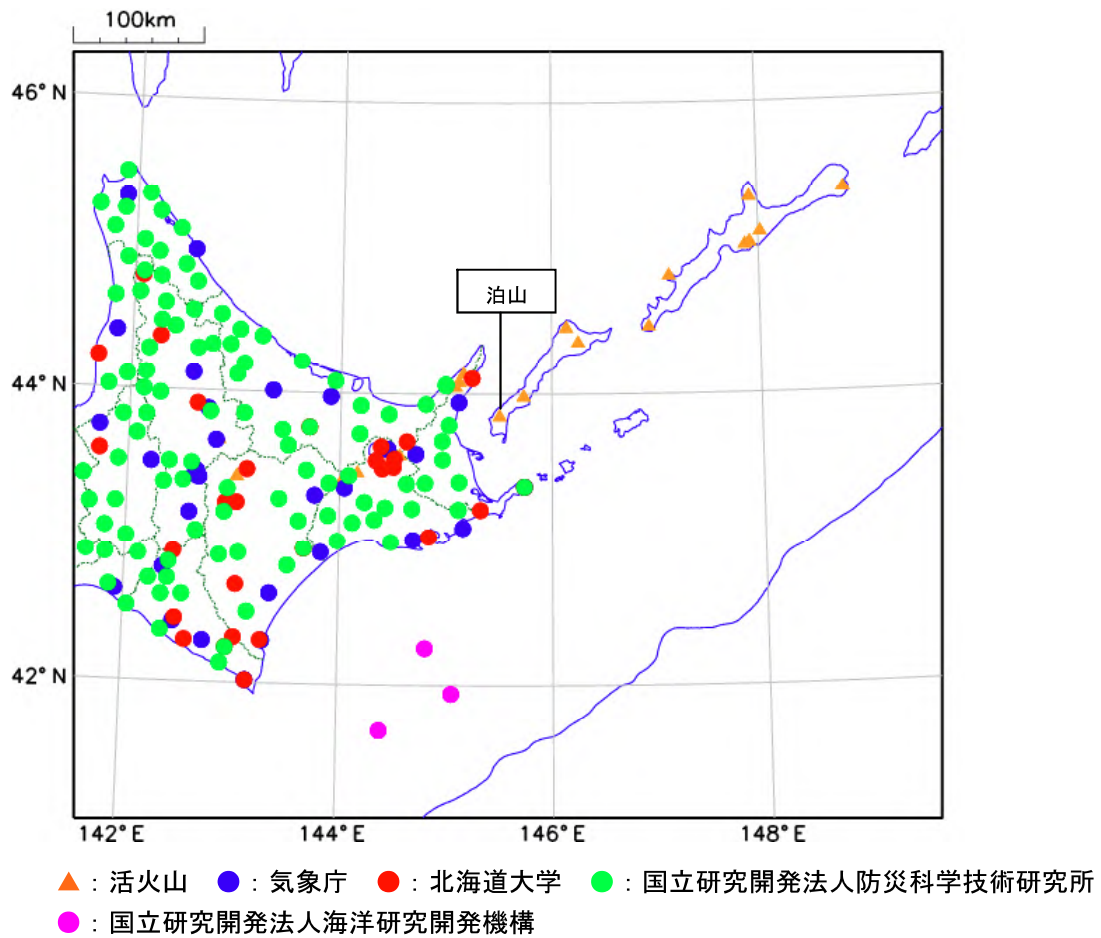


図 2 泊山 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 25000 (行政界・海岸線)』を使用した。

恐 山

(2017年12月31日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○概況(2017年1月～12月31日)

・噴気などの表面現象の状況（図1～6）

10月24日に青森県の協力により実施した上空からの観測では、前回（2009年10月26日）、前々回（2004年11月8日）と比較して宇曽利山湖北岸とその周辺の変質地帯や湖面の状況に特段の変化は認められなかった。

8月及び10月に実施した現地調査では、宇曽利山湖北岸で従来から見られる噴気や地熱域が確認された。1989年9月と比較して、噴気の様子や地熱域に特段の変化は認められなかった。

また、噴気など異常に関する通報はなかった。

・地震活動（図7、8）

一元化震源及び8月から10月にかけて現地調査で設置した地震計による観測では、恐山付近を震源とする地震は観測されなかった¹⁾。

1) 現地調査で設置の地震計による観測結果は未精査のものを含む。

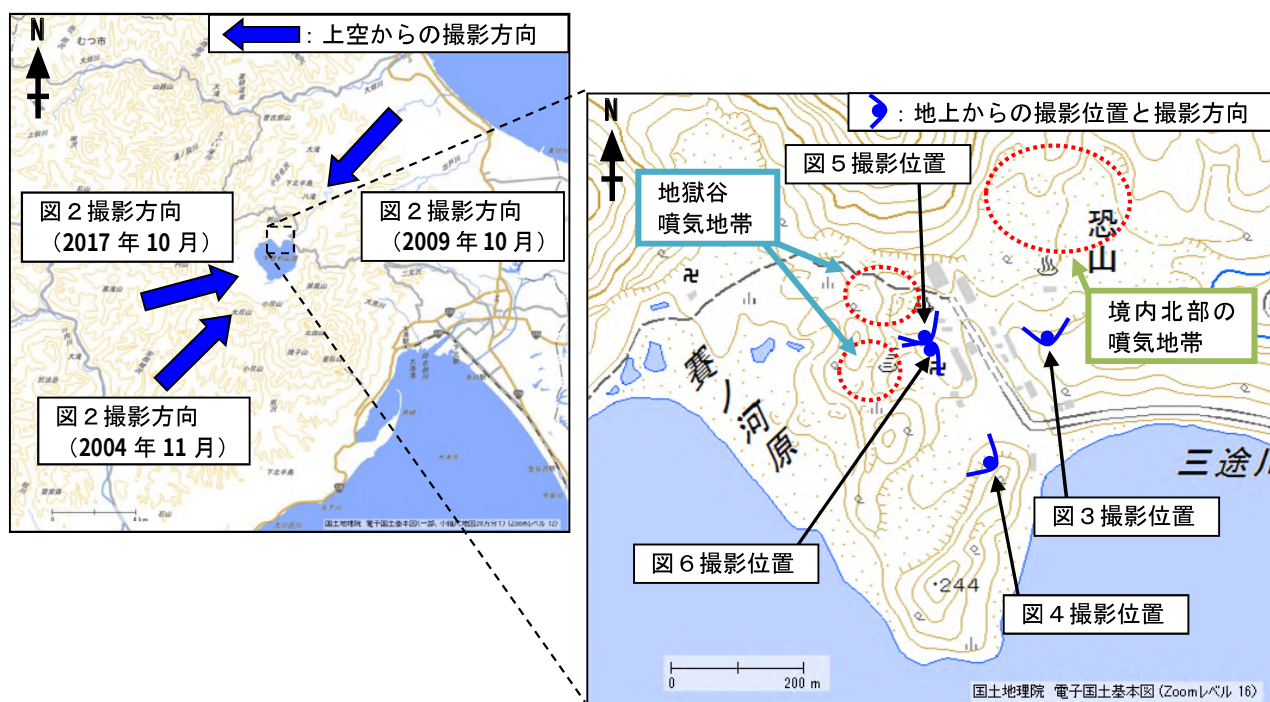


図1 恐山 宇曽利山湖北岸の写真と地表面温度分布²⁾ 撮影位置及び撮影方向

2) 赤外熱映像装置による。

この資料は気象庁の他、北海道大学、弘前大学、東北大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県のデータ等を利用して作成している。



図 2 恐山 上空から撮影した宇曽利山湖北岸の状況

- ・変質地帯や湖面の状況に特段の変化は認められなかった。
- ・青森県の協力により撮影。

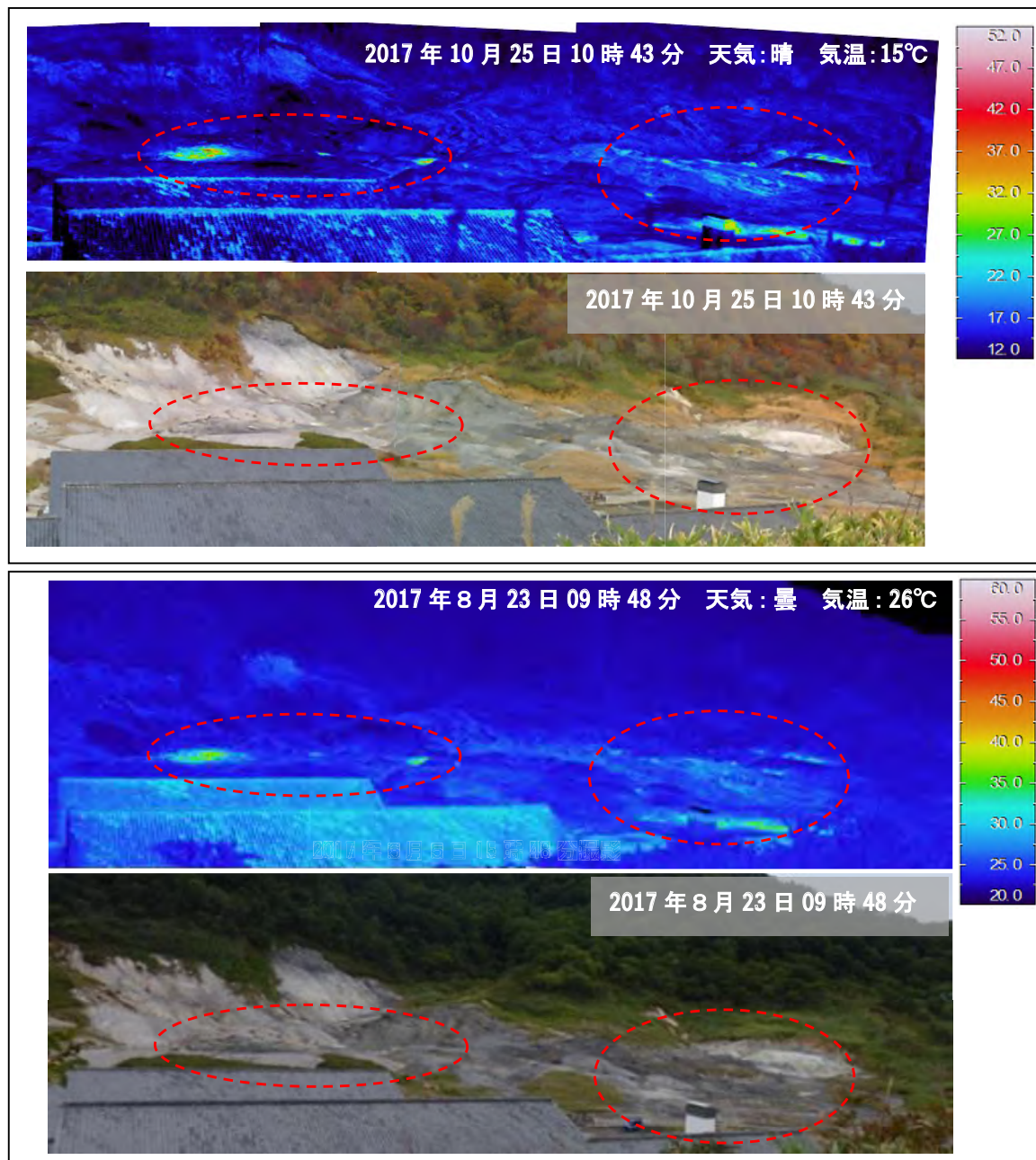


図 3 恐山 南から撮影した境内北部の噴気地帯の状況と地表面温度分布

・地熱域（赤丸破線）や噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

※地熱域以外で温度の高い部分は、岩等が日射により温められたことによるものと推定される。

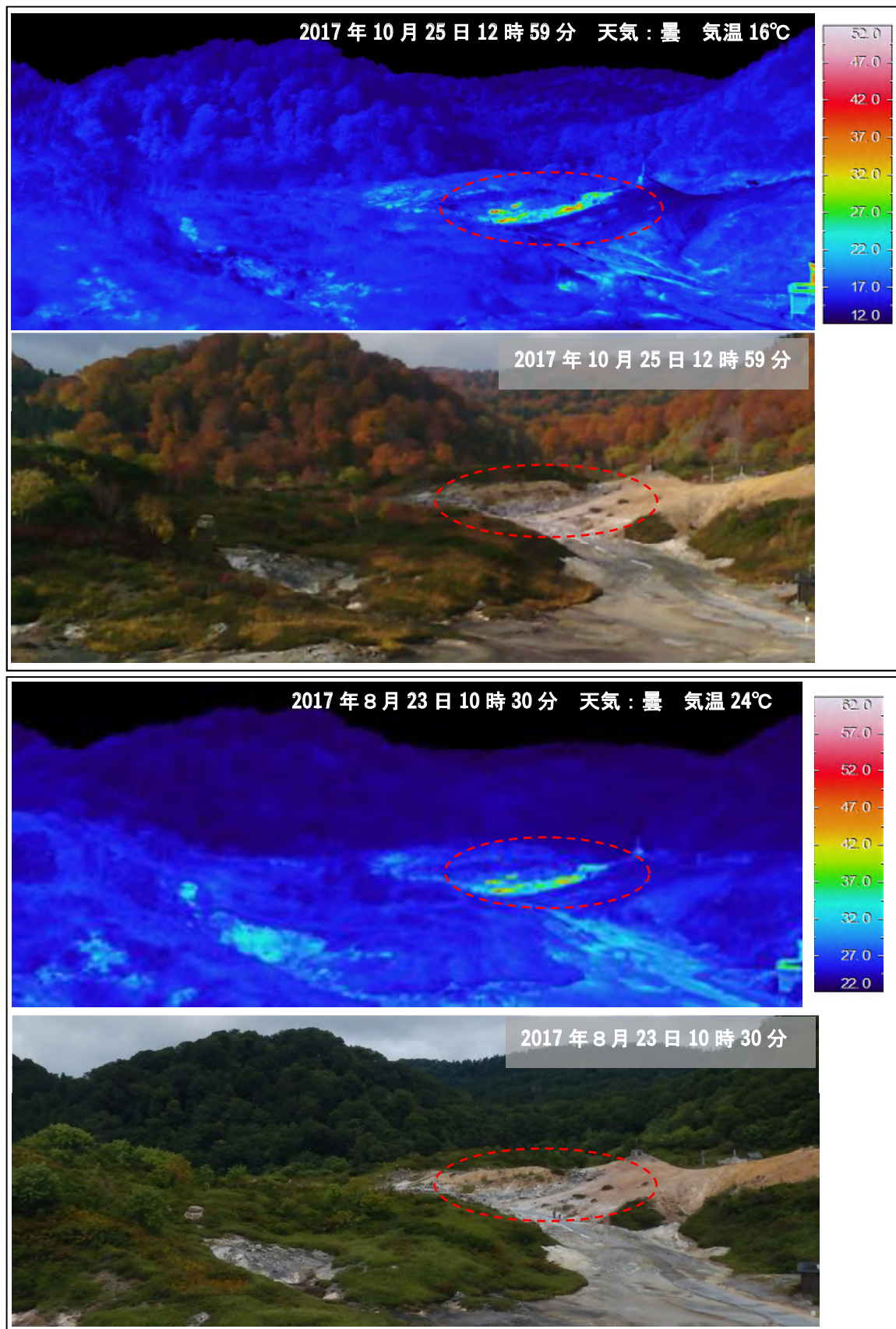


図 4 恐山 南東から撮影した地獄谷噴気地帯の状況と地表面温度分布
 ・地熱域（赤丸破線）や噴気の状況に特段の変化は認められなかった。
 ※地熱域以外で温度の高い部分は、岩等が日射により温められたことによるものと推定される。

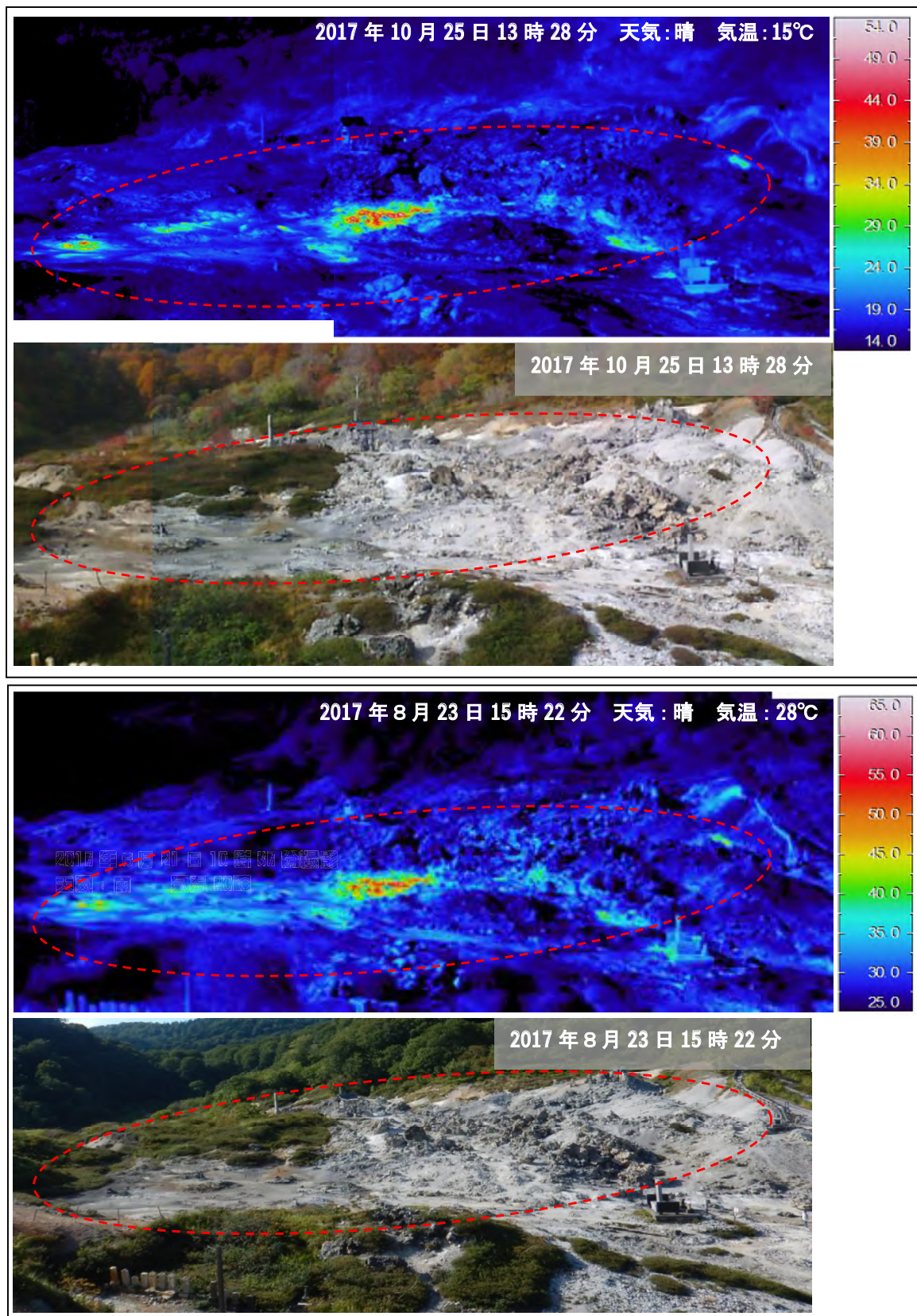


図 5 恐山 南東から撮影した地獄谷噴気地帯の状況と地表面温度分布

・地熱域（赤丸破線）や噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

※地熱域以外で温度の高い部分は、岩等が日射により温められたことによるものと推定される。

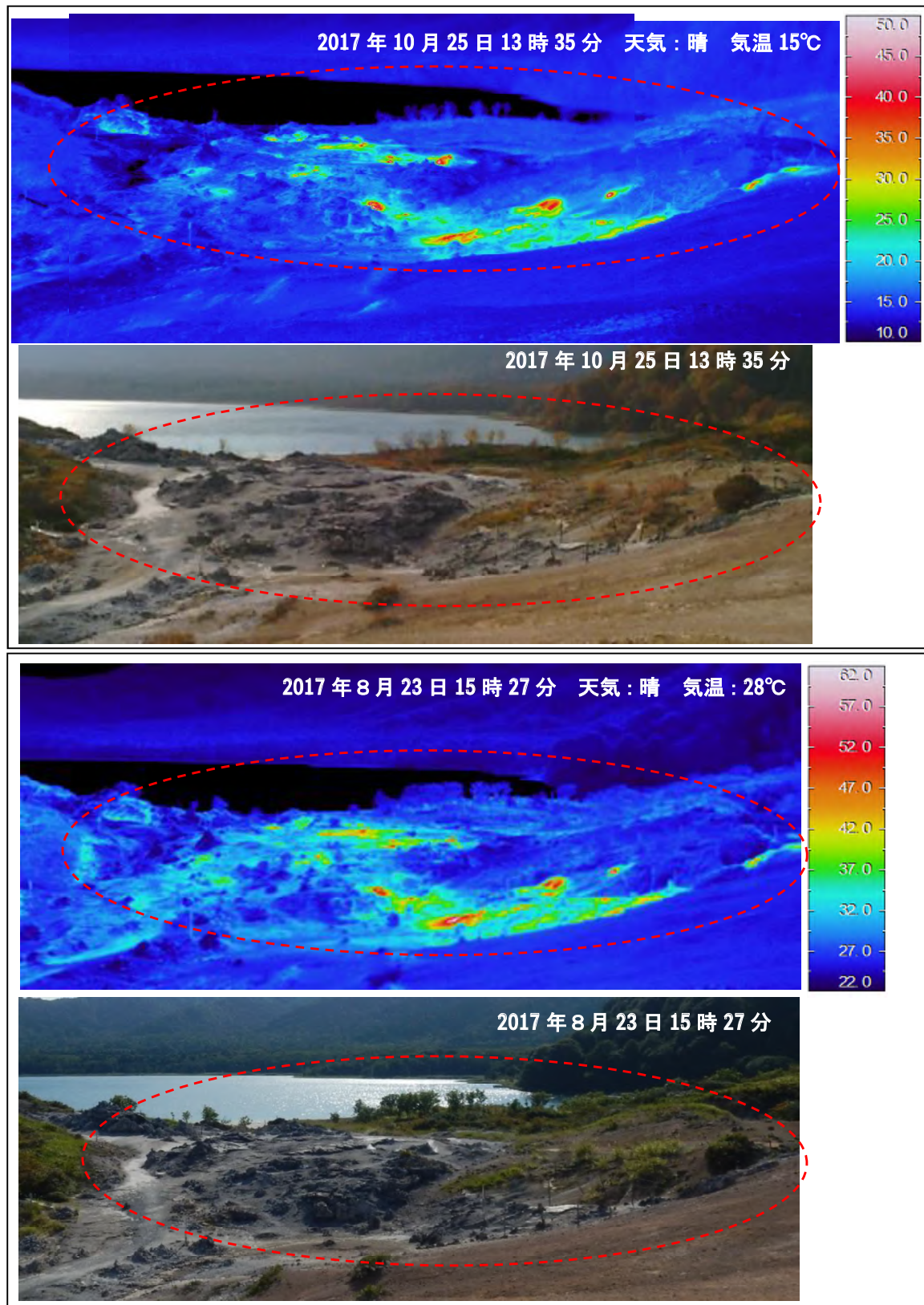


図 6 恐山 東北東から撮影した地獄谷噴気地帯の状況と地表面温度分布

・地熱域（赤丸破線）や噴気の状況に特段の変化は認められなかった。

※地熱域以外で温度の高い部分は、岩等が日射により温められたことによるものと推定される。

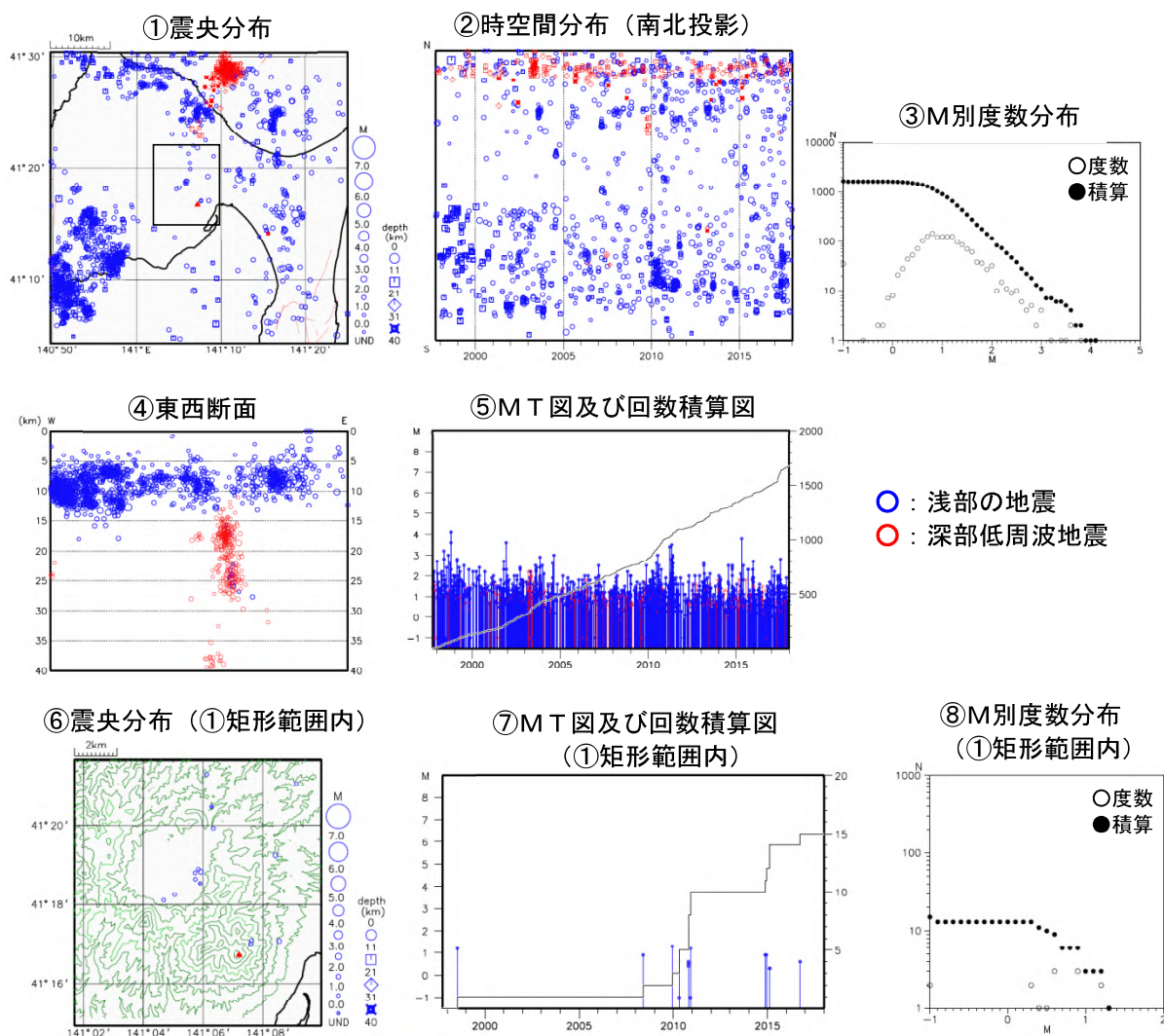


図 7 恐山 一元化震源による恐山周辺の地震活動 (1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日)

注) 2001 年 10 月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」、「数値地図 50mメッシュ (標高)」を使用した。

・表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。



図 8 恐山 現地調査で設置した地震計配置図と設置状況 (北方向から撮影)

- ・ 2017 年 8 月 22 日～10 月 26 日の期間で、データ収録型地震計 (短周期速度) により観測を実施した。
- ・ 恐山付近を震源とする火山性地震は観測されなかった。

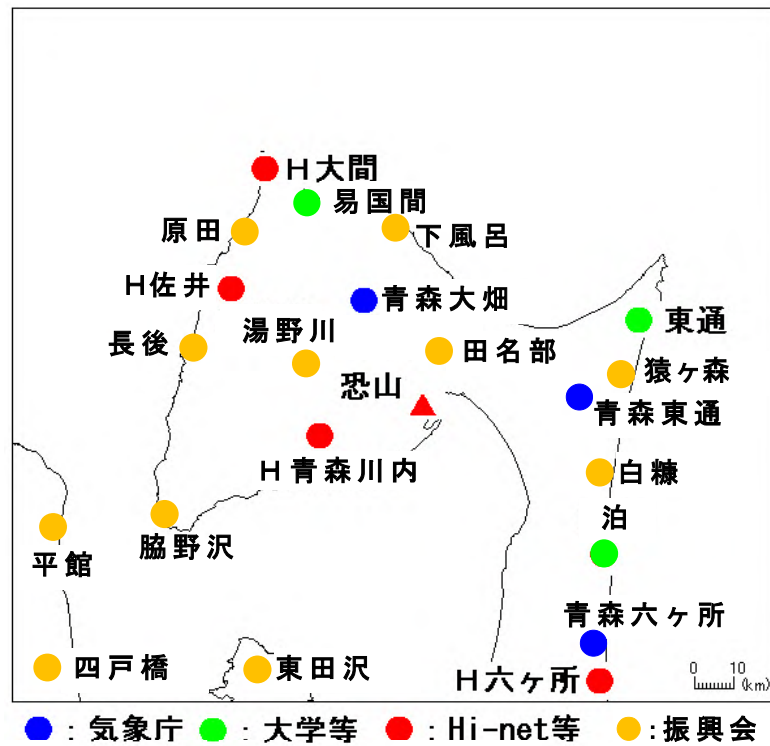


図 9 恐山周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」を使用した。

(2017 年 12 月 31 日現在)

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

噴気など異常に関する通報はなかった。



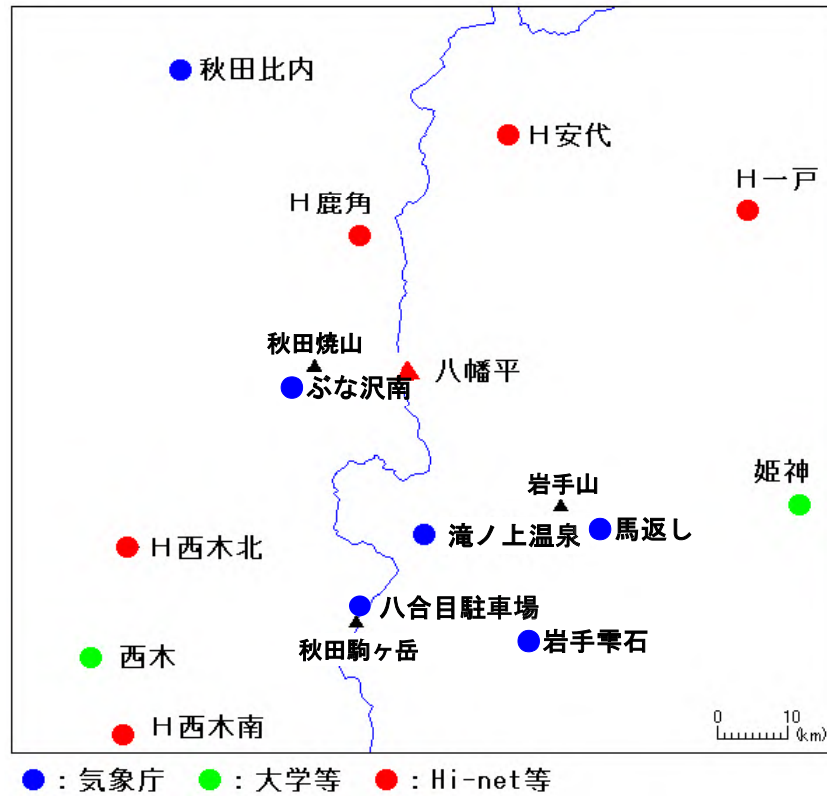


図 2 八幡平周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」を使用した。

鳴 子

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○概況(2017 年 1 月～12 月 31 日)

・噴気などの表面現象の状況（図1～5）

6月及び11月に実施した現地調査では、2012年3月と比較して潟沼周辺の状況に特段の変化は認められなかった。

また、噴気など異常に関する通報はなかった。

・地震活動（図6、7）

一元化震源及び6月から11月にかけて現地調査で設置した地震計による観測では、鳴子付近を震源とする地震は観測されなかった¹⁾。

1) 現地調査で設置した地震計による観測結果は未精査のものを含む。

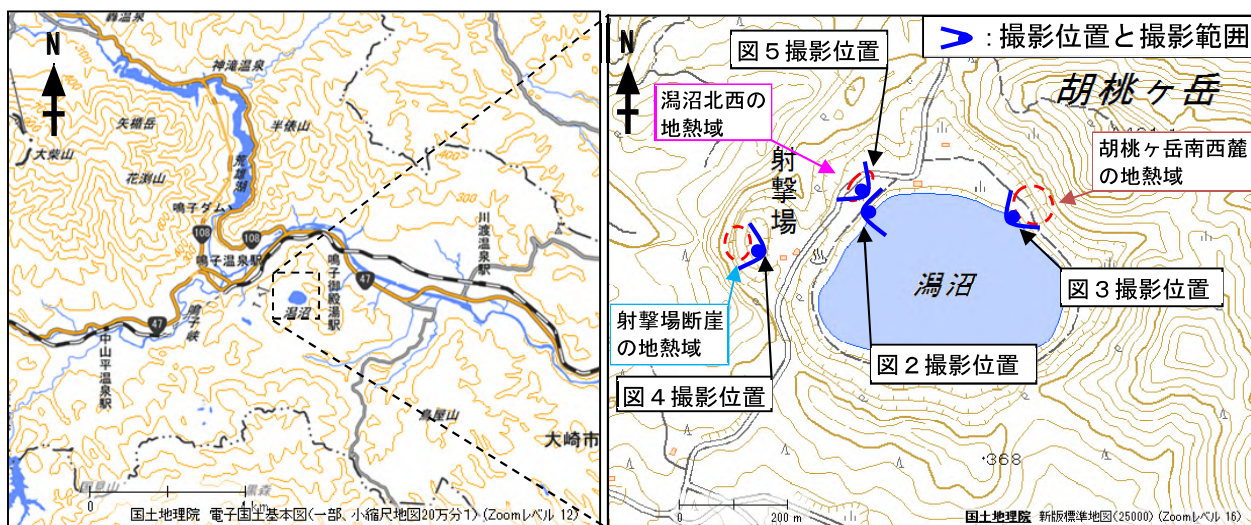


図1 鳴子 潟沼周辺の地熱域の撮影位置と撮影範囲

この資料は気象庁の他、東北大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを基に作成している。

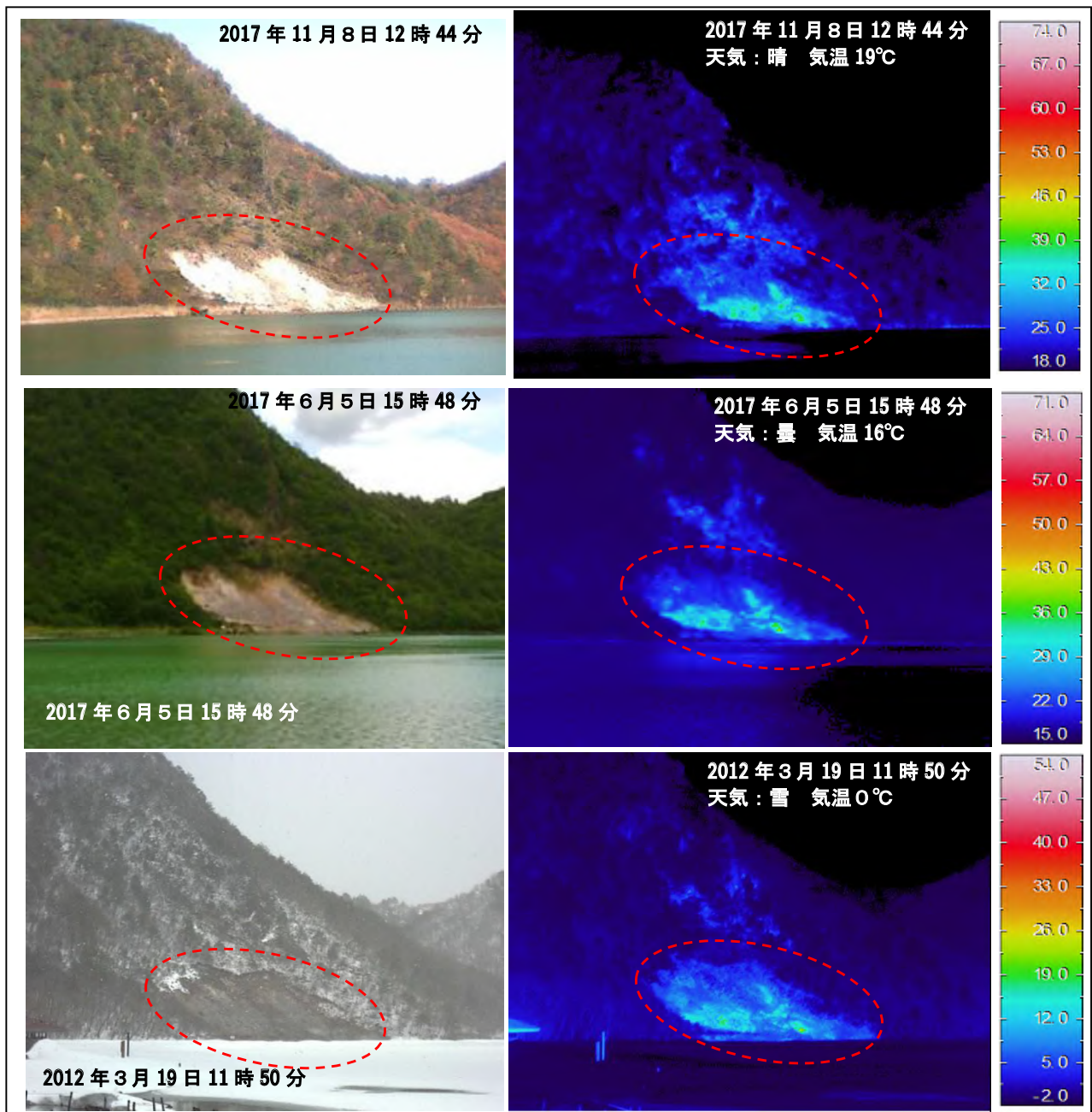


図2 鳴子 西から撮影した胡桃ヶ岳南西麓の地熱域の状況と地表面温度分布²⁾

・2012年3月19日と比較して、日射の影響の違いはあるものの、地熱域（赤破線内）の状況に特段の変化は認められなかった。

2) 赤外熱映像装置による。

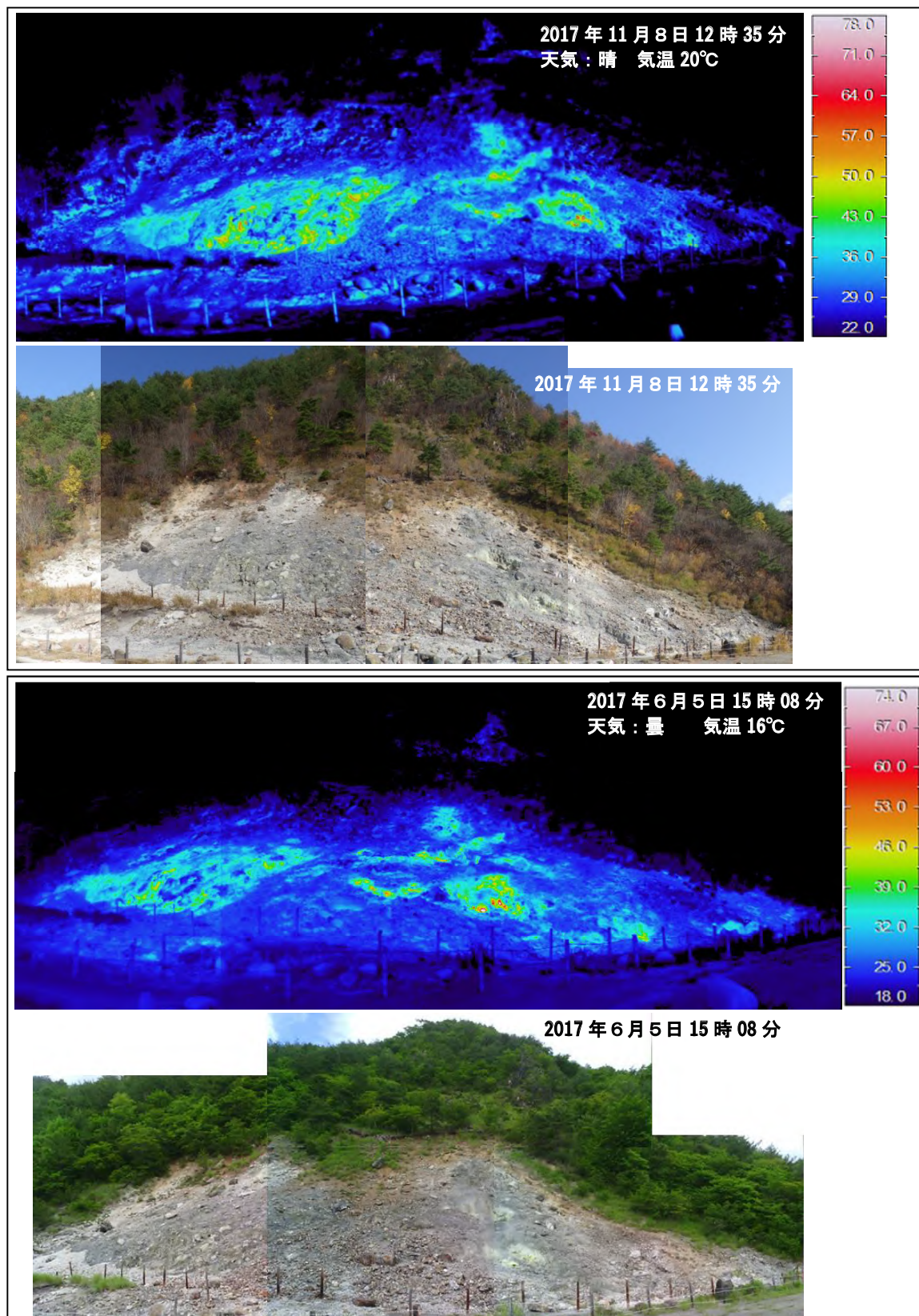


図 3 鳴子 南西から撮影した胡桃ヶ岳南西麓の地熱域の状況と地表面温度分布
・噴気及び地熱域が認められた。

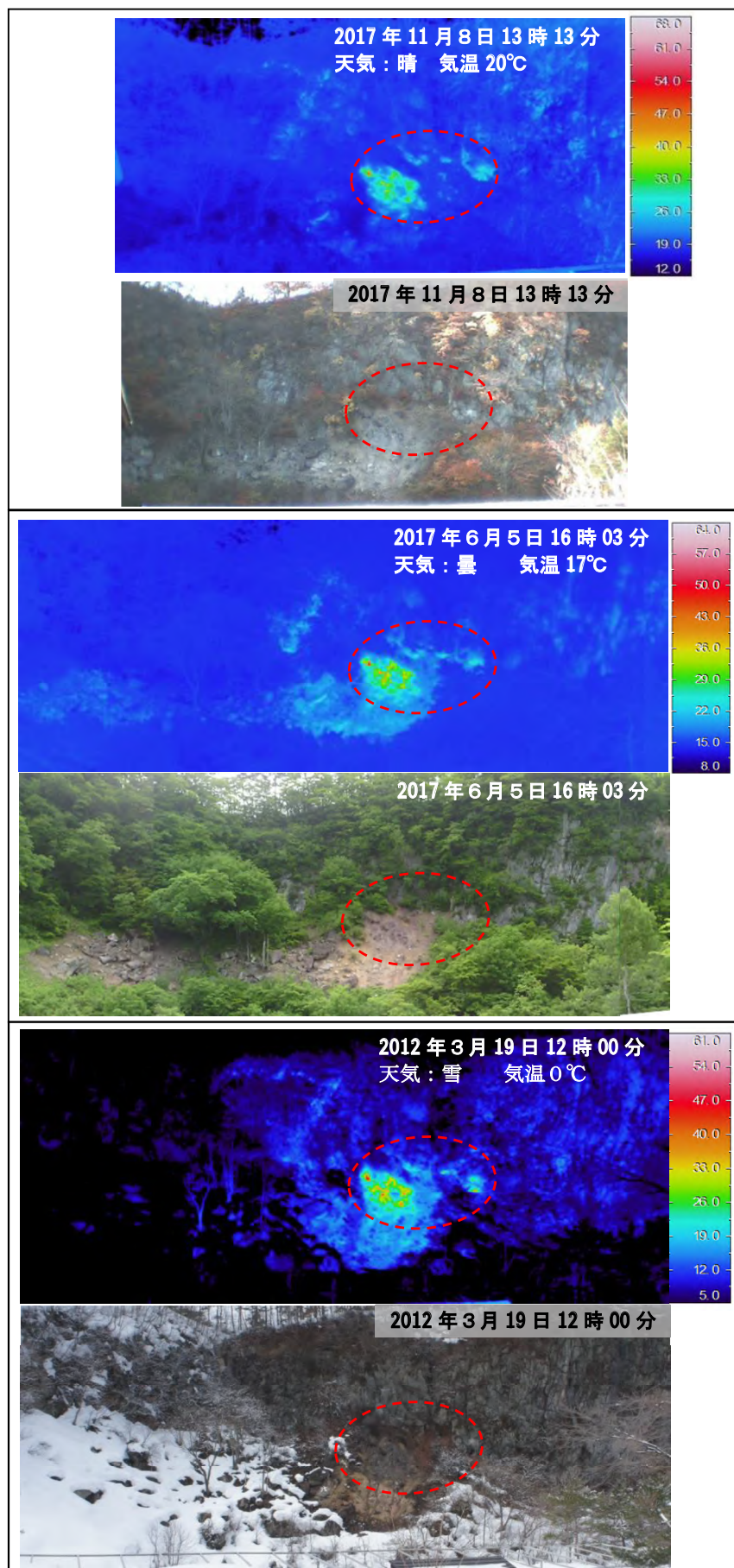


図 4 鳴子 東から撮影した射撃場断崖の地熱域の状況と地表面温度分布
 ・2012 年 3 月 19 日と比較して、日射の影響の違いはあるものの、噴気及び地熱域（赤破線内）の状況に特段の変化は認められなかった。

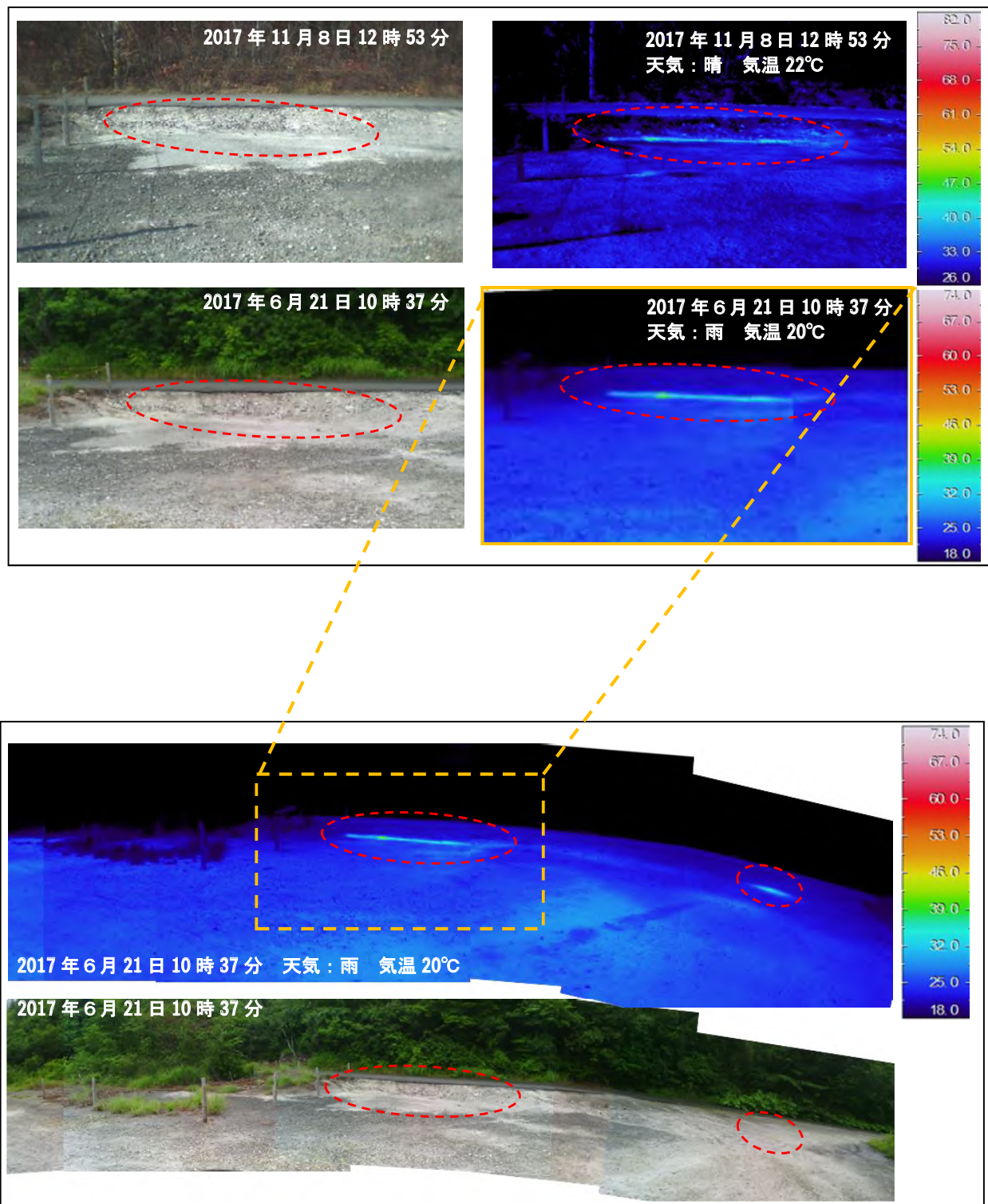


図 5 鳴子 南東から撮影した潟沼北西の地熱域の状況と地表面温度分布
・赤破線内で地熱域が認められた。

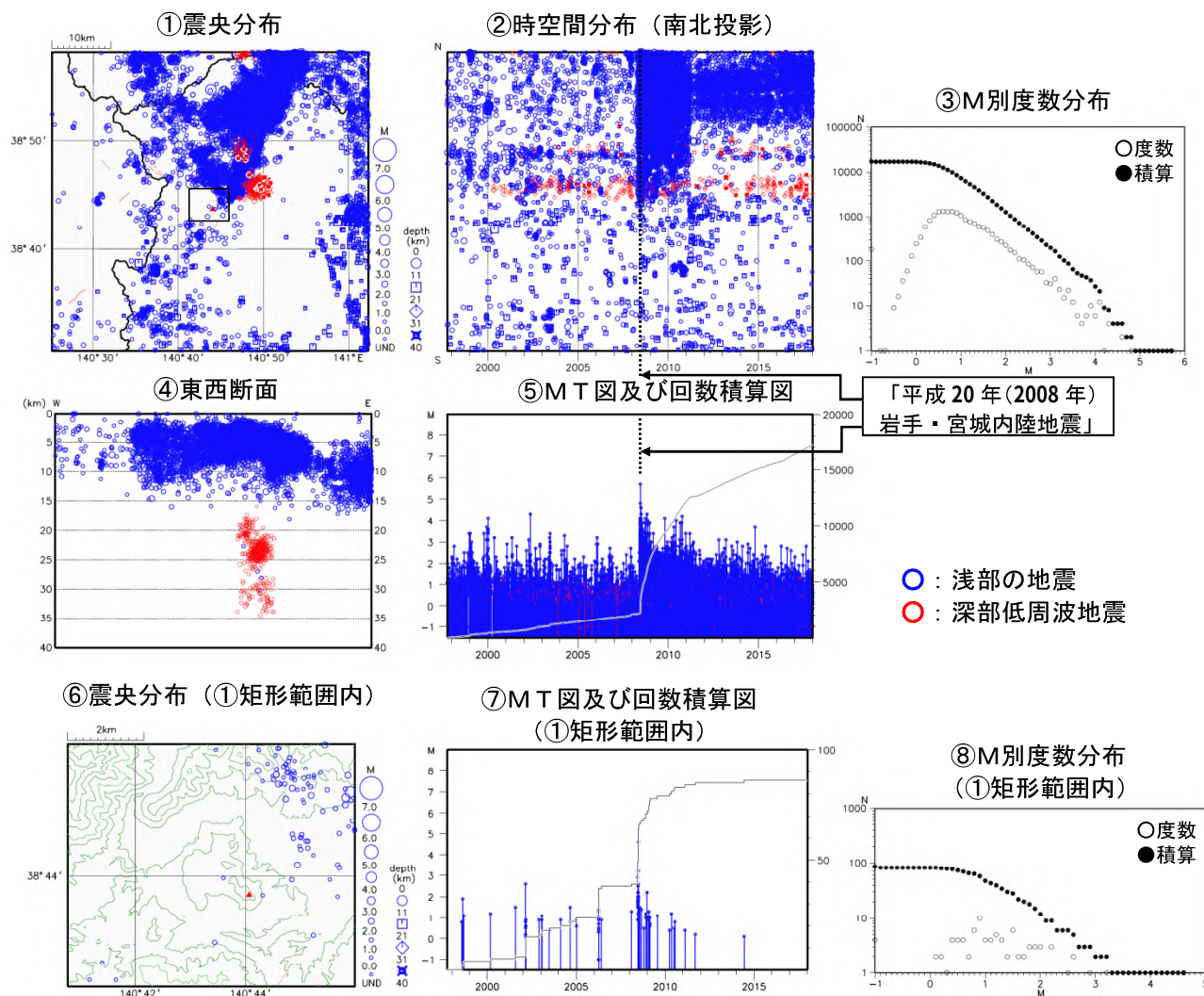


図6 鳴子 一元化震源による鳴子周辺の地震活動 (1997年10月～2017年12月31日)

注) 2001年10月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図25000 (地図画像)」、「数値地図50mメッシュ (標高)」を使用した。

・表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。



図7 鳴子 現地調査で設置した地震計配置図と設置状況 (南西方向から撮影)

- ・2017年6月5日～11月8日の期間で、データ収録型地震計 (短周期速度) により観測を実施した。
- ・鳴子付近を震源とする火山性地震は観測されなかった。

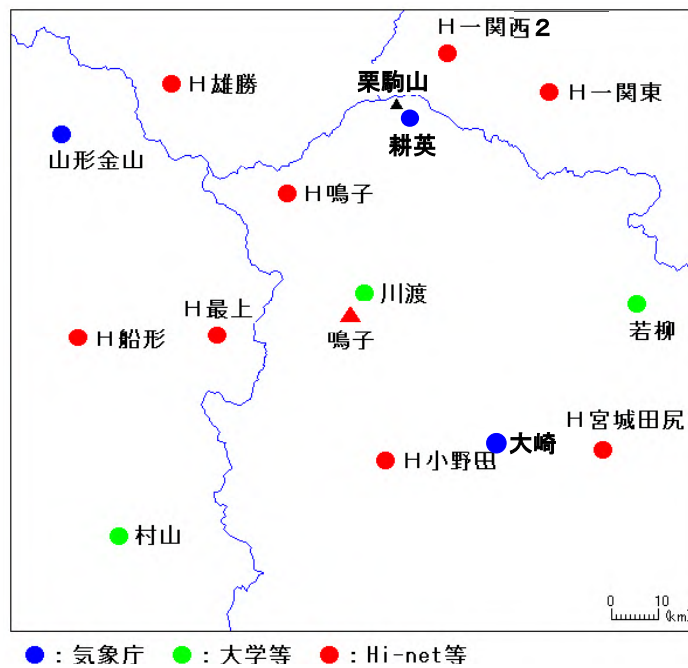


図 8 鳴子周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」を使用した。

肘 折

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○概況(2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動（図 1、図 2）

肘折付近を震源とする地震は観測されなかった。また、2014 年 5 月頃から深部低周波地震がやや増加した状態が続いている。

・噴気の状態

噴気など異常に関する通報はなかった。

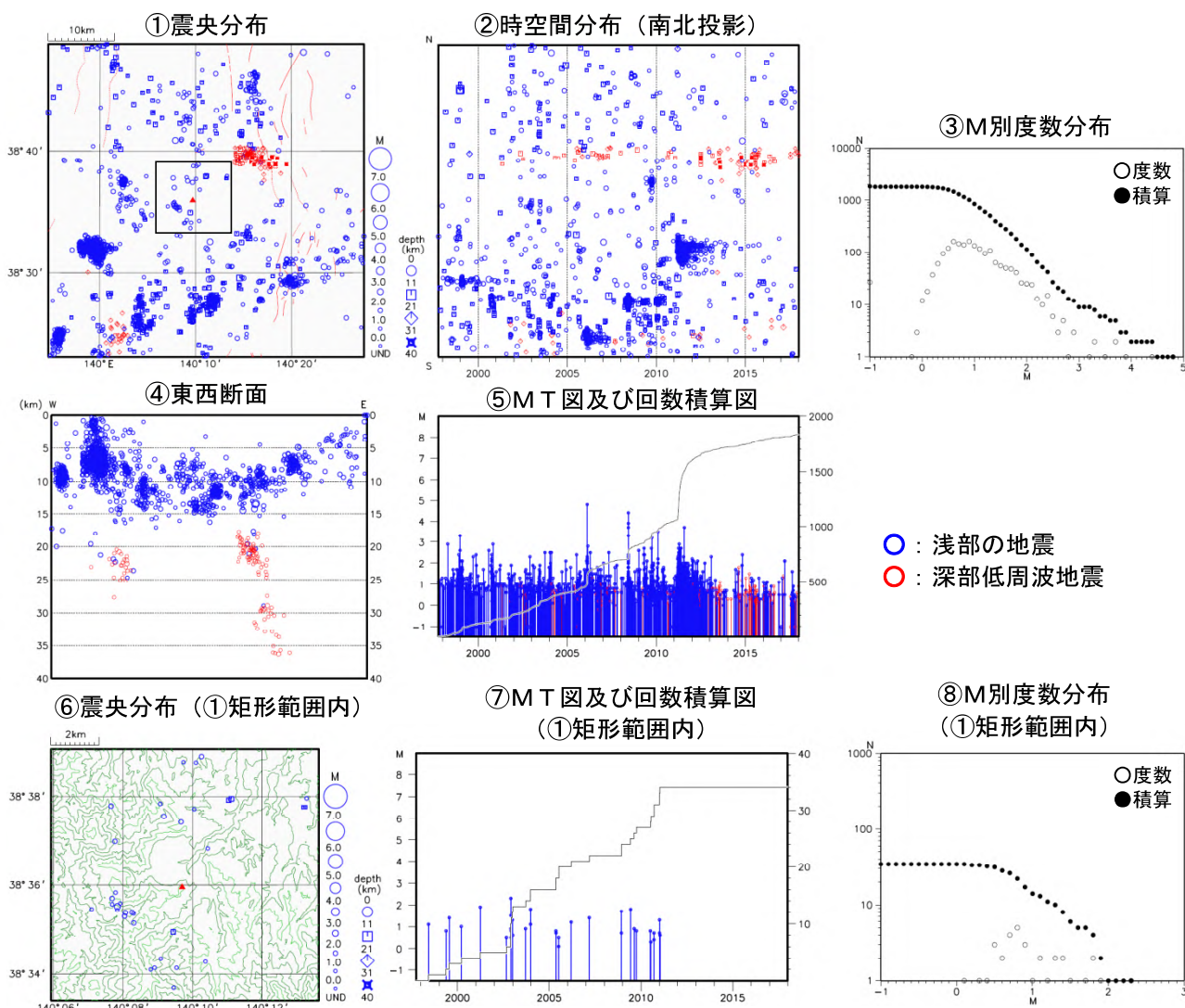


図 1 肘折 一元化震源による肘折周辺の地震活動（1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日）

注）2001 年 10 月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000（地図画像）」、「数値地図 50mメッシュ（標高）」を使用した。

・表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この資料は気象庁の他、東北大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを基に作成している。

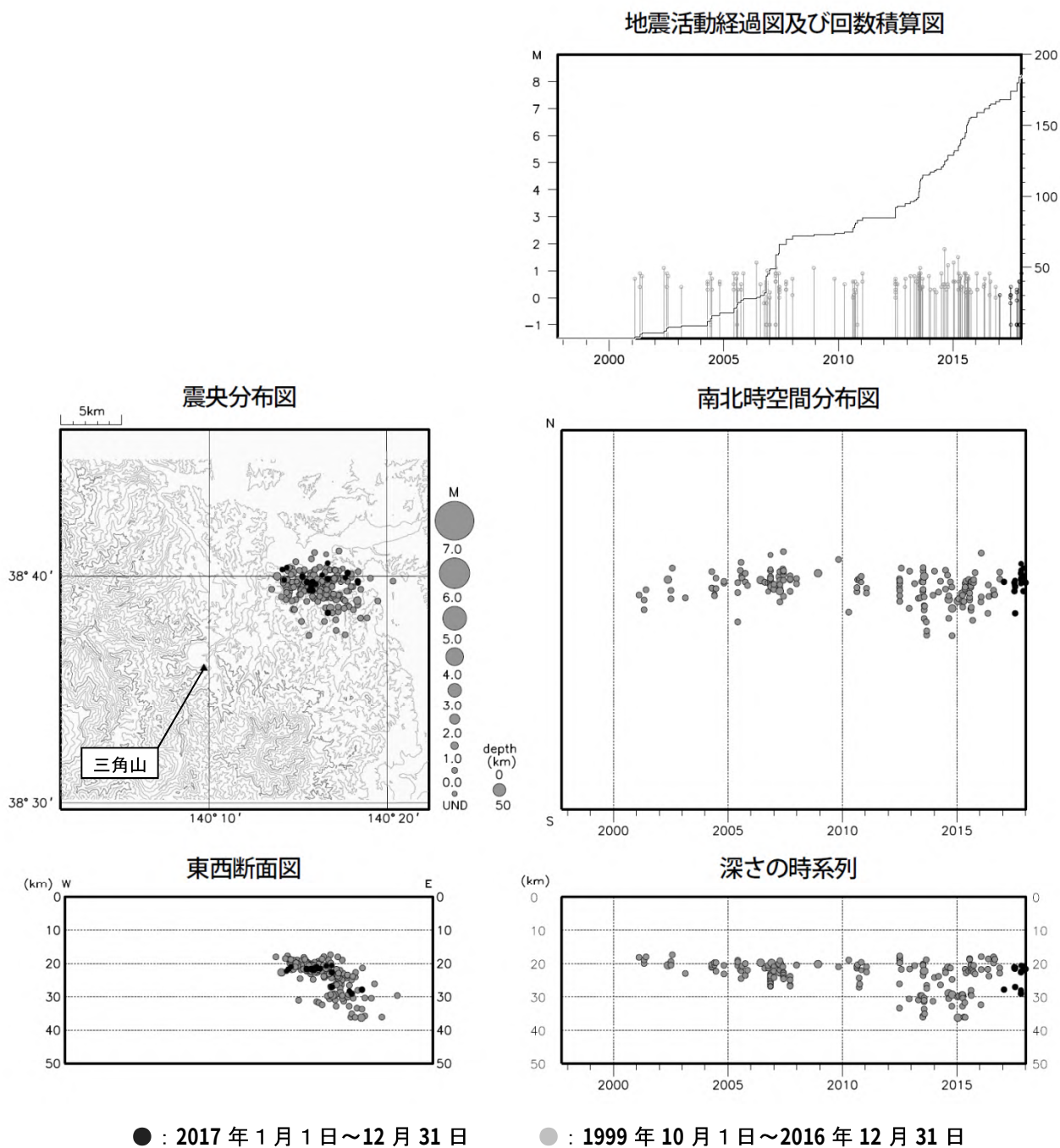


図 2 肘折 一元化震源による深部低周波地震活動（1999 年 10 月～2017 年 12 月 31 日）

注）2001 年 10 月以降、検知能力が向上している。

この地図の作成には国土地理院発行の「数値地図 50mメッシュ（標高）」を使用した。

- ・ 2014 年 5 月頃から深部低周波地震がやや増加している。
- ・ 表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

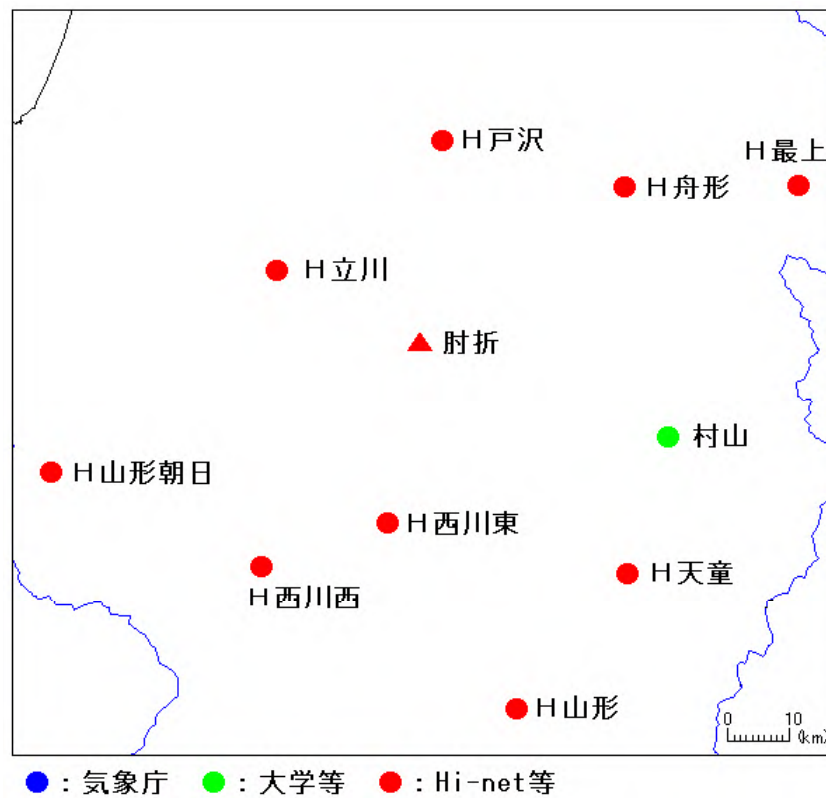


図 3 肘折周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」を使用した。

沼 沢

(2017 年 12 月 31 日現在)

沼沢湖の南東約 3 km 付近で地震が一時的に増加したが、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○概況(2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動（図 1、2）

4 月下旬から 5 月中旬にかけて、沼沢湖の南東約 3 km の深さ約 3～7 km で地震が一時的に増加した。最大規模の地震は 5 月 8 日の地震でマグニチュード 2.9（最大震度 1）であった。その他の期間は少ない状態で経過した。

・噴気の状況

噴気など異常に関する通報はなかった。

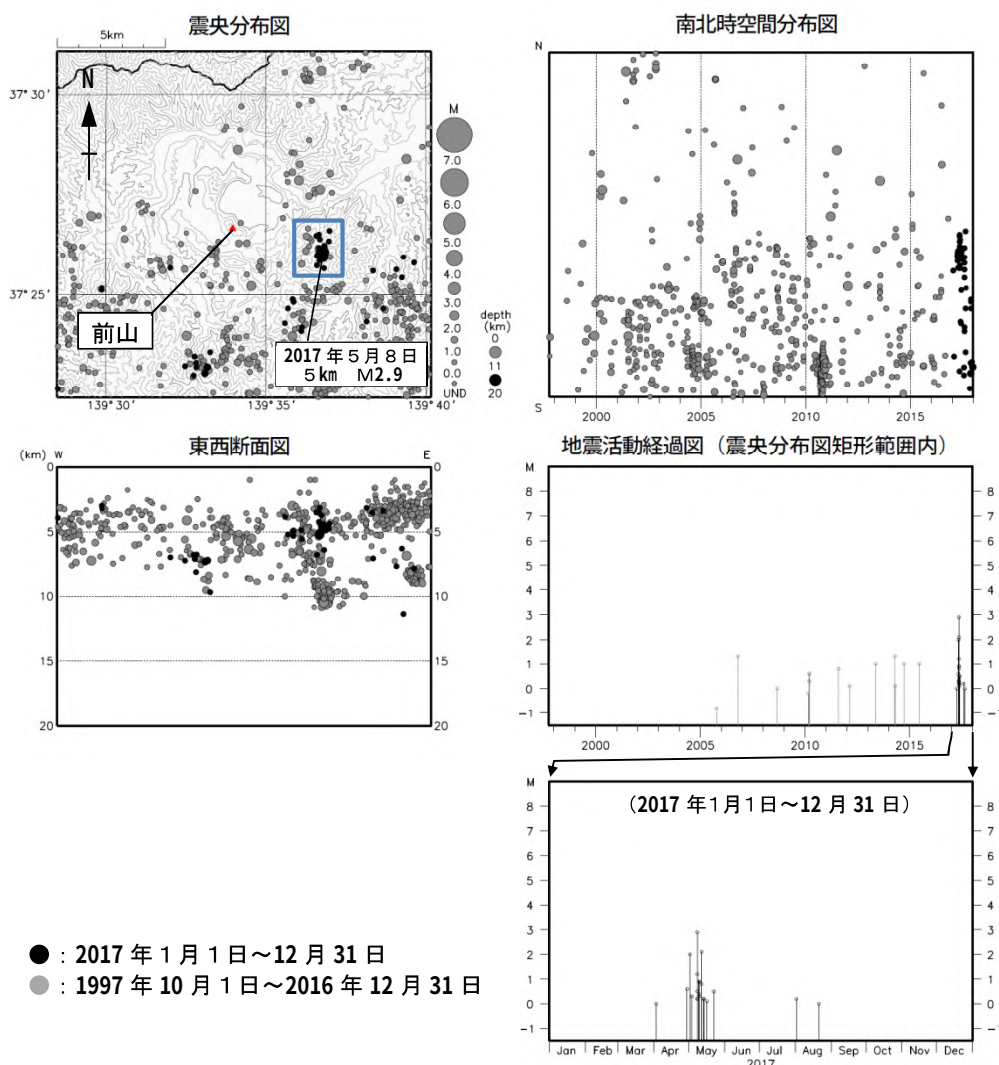


図 1 沼沢 一元化震源による沼沢周辺の地震活動（1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日）

注）2001 年 10 月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000（地図画像）」、「数値地図 50mメッシュ（標高）」を使用した。

- ・ 4 月下旬から 5 月中旬にかけて、沼沢湖の南東約 3 km の深さ約 3～7 km で地震が一時的に増加した。
- ・ 表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この資料は気象庁の他、東北大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを基に作成している。

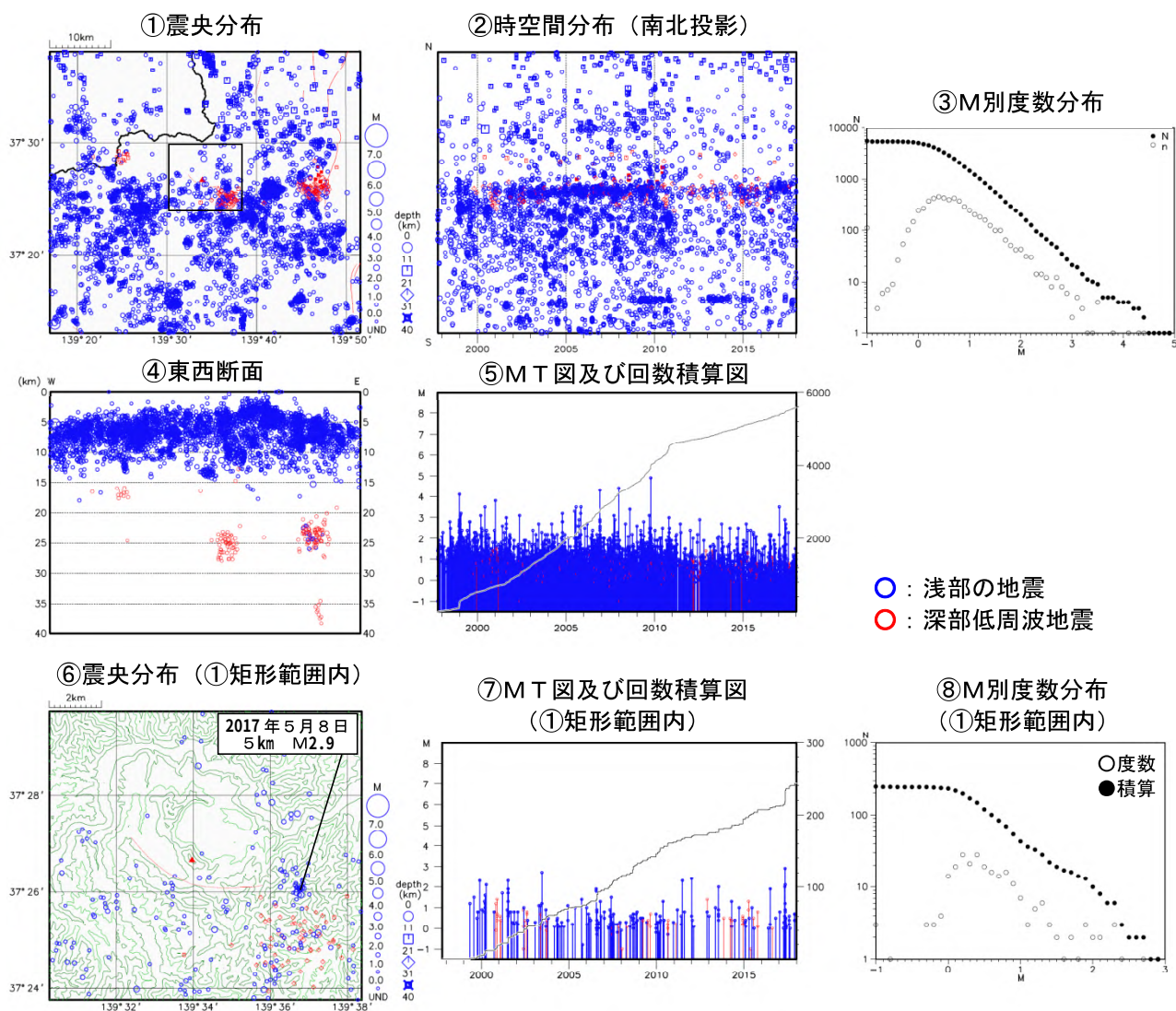


図 2 沼沢 一元化震源による沼沢周辺の地震活動 (1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日)

注) 2001 年 10 月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」、「数値地図 50mメッシュ (標高)」を使用した。

・表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

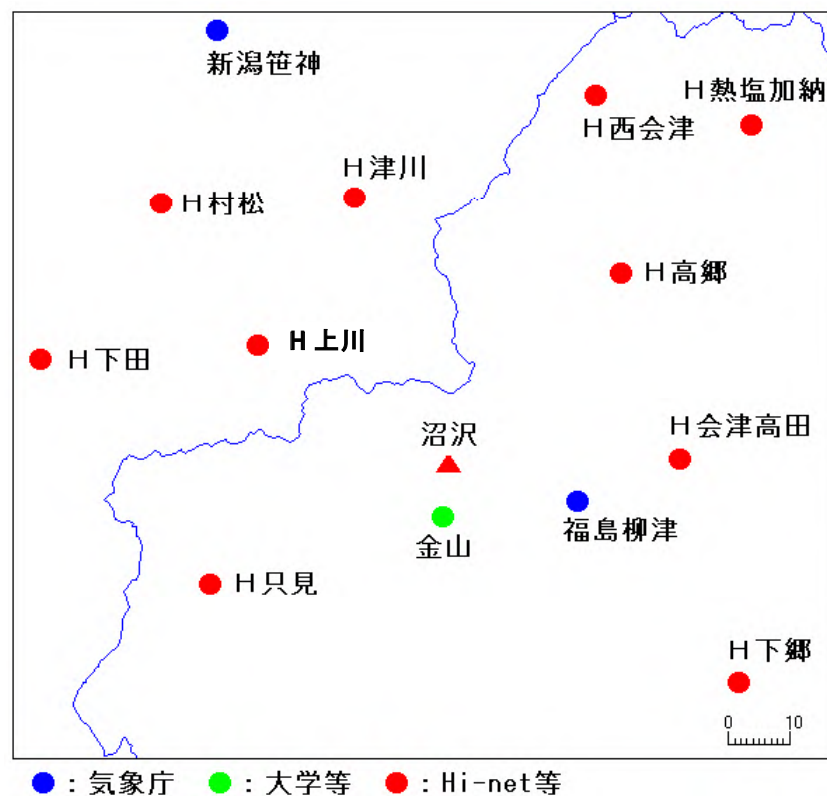


図 3 沼沢周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000 (地図画像)」を使用した。

燧ヶ岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○概況(2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動（図 1）

燧ヶ岳付近を震源とする地震は少ない状態で経過した。

・噴気の状況

噴気など異常に関する通報はなかった。

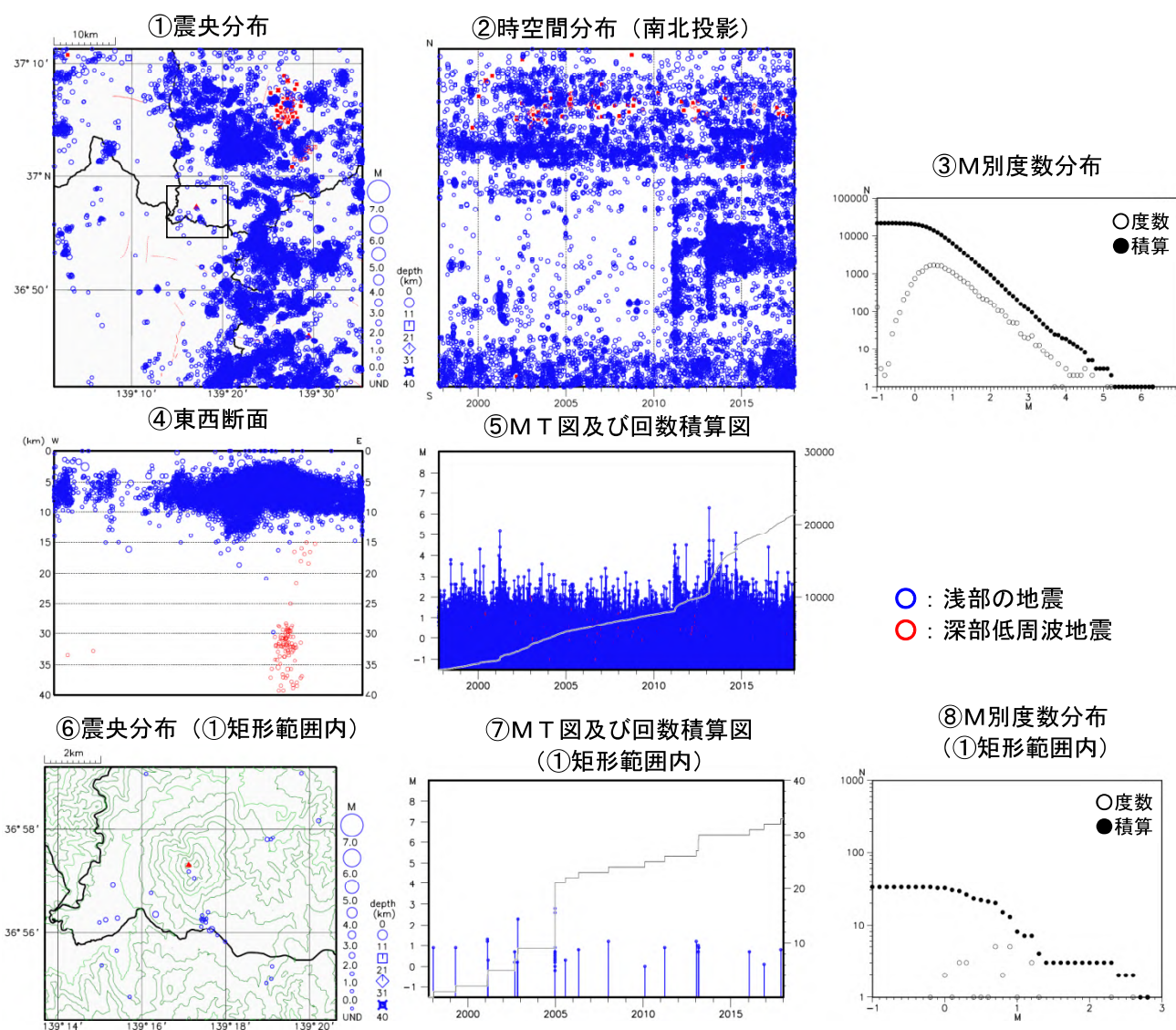


図 1 燧ヶ岳 一元化震源による燧ヶ岳周辺の地震活動（1997 年 10 月～2017 年 12 月 31 日）

注）2001 年 10 月以降、検知能力向上

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000（地図画像）」、「数値地図 50mメッシュ（標高）」を使用した。

・表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この資料は気象庁の他、東北大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、公益財団法人地震予知総合研究振興会のデータを基に作成している。

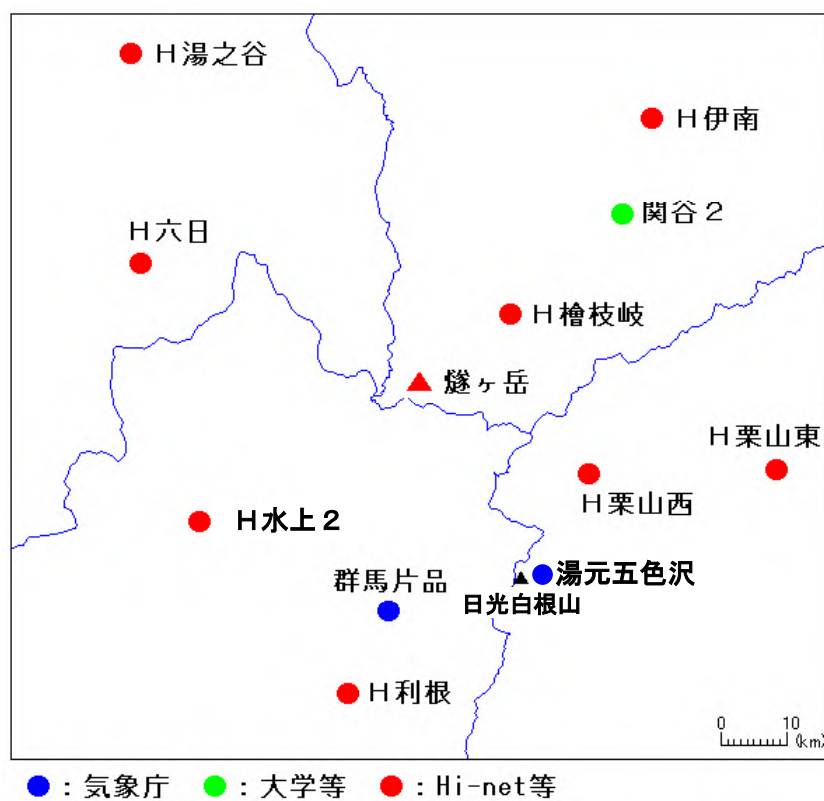


図2 燧ヶ岳周辺の地震観測点

この地図の作成にあたっては、国土地理院発行の「数値地図 25000（地図画像）」を使用した。

高原山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・地震活動（図3）

2008年12月～2009年1月にかけて、高原山山頂（釈迦ヶ岳）付近の浅いところを震源とする地震が一時的に増加したが、最近は特に顕著な地震活動は認められない。

- ・ 噴気等の状況

高原山北麓の富士山西側の新湯付近には従来から弱い噴気があるが、噴気異常等に関する通報はない。

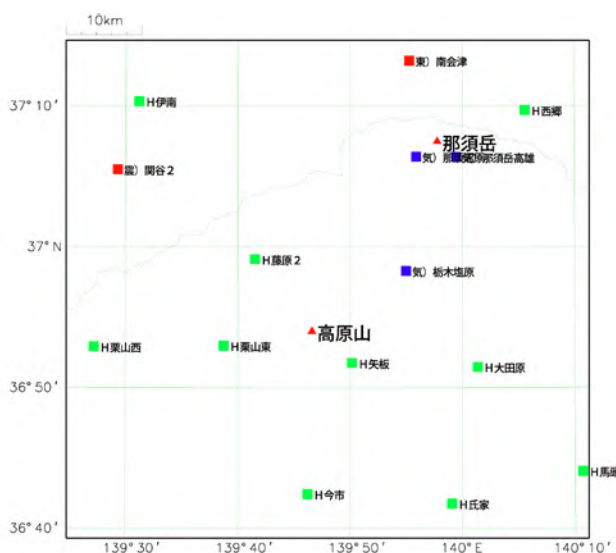


図1 高原山 周辺の地震観測点

■震)：東大震研観測点 ■東)：東北大学観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

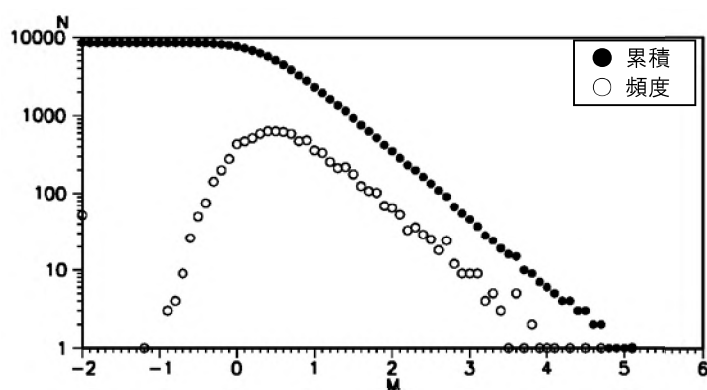


图2 高原山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図3-①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東北大学、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

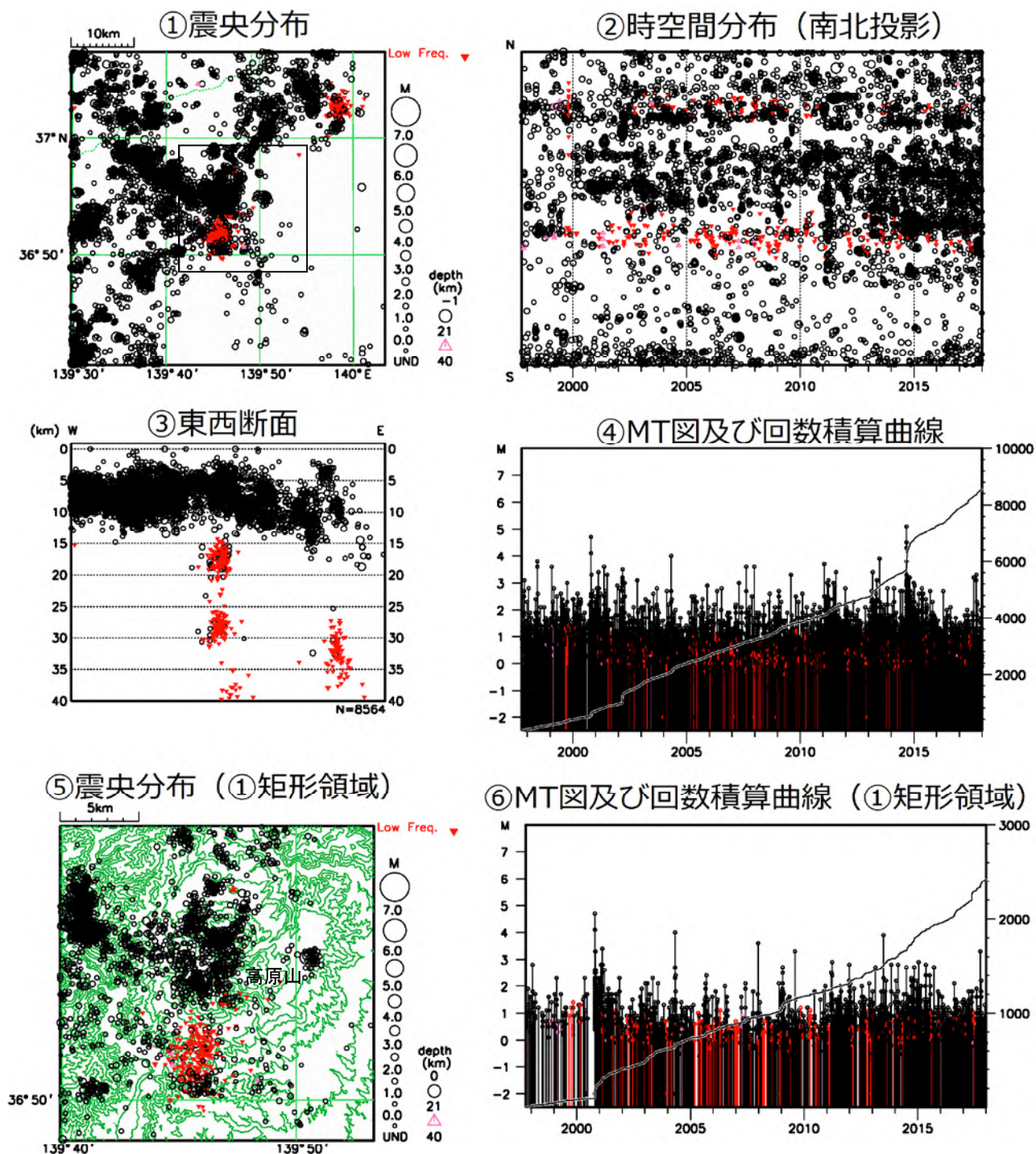


図3 高原山 一元化震源による周辺の地震活動 (1997年10月1日～2017年12月31日)

注) 2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)を使用した。

男体山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

山体付近に発生する地震は少なく、周辺の地震活動にも特に変化はない。

・ 噴気等の状況

山頂部の室の内火口には鳥地獄と呼ばれる噴気孔があるが、噴気異常等に関する通報はない。

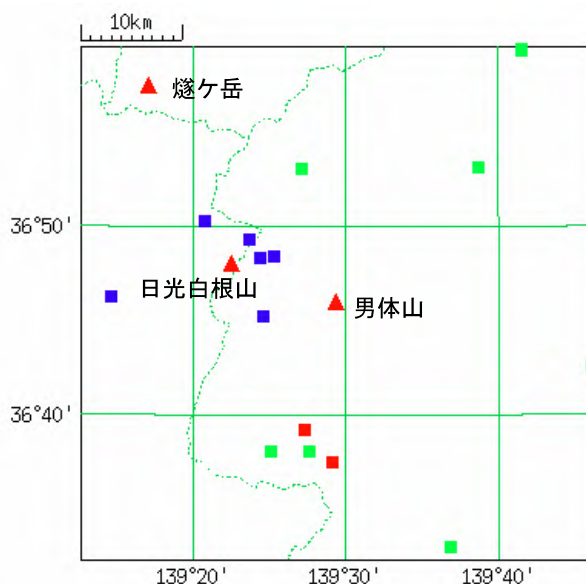


図 1 男体山 周辺の地震観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

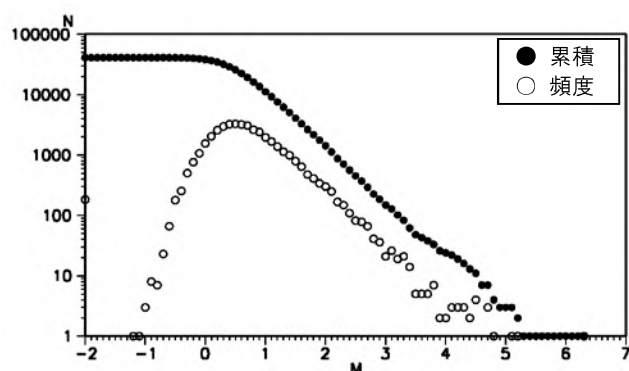


図 2 男体山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 - ①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

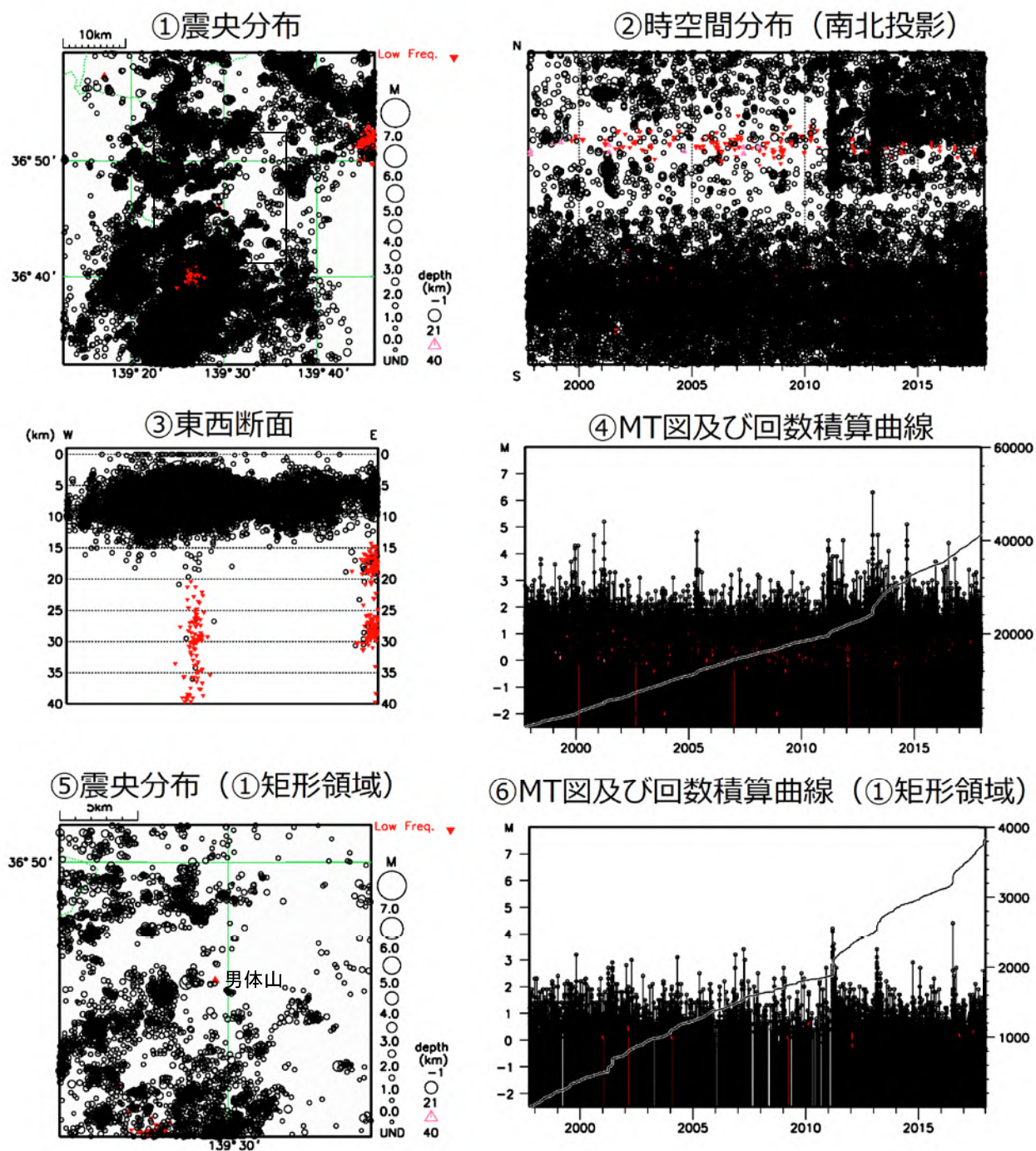


図3 男体山 周辺の地震活動（1997年10月1日～2017年12月31日）

注）2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は深部低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）を使用した。

赤 城 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

2016 年頃から赤城山の東から北東方向の地震活動がやや活発となっている。しかし、赤城山からは離れており、火山活動とは直接の関係性はないと考えられる。

・ 噴気等の状況

噴気はなく、異常等に関する通報もない。

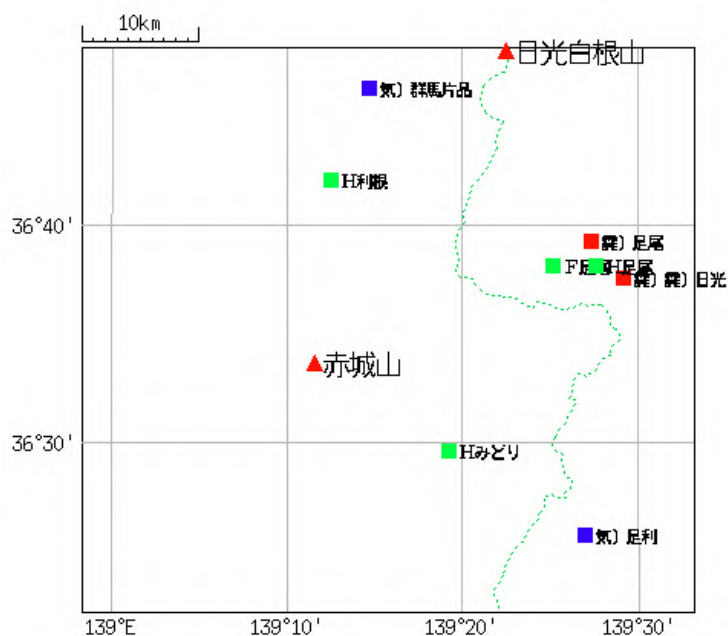


図 1 赤城山 周辺の地震観測点

■(震)：東大震研観測点 ■(H)：防災科研観測点 ■(気)：気象庁観測点
この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

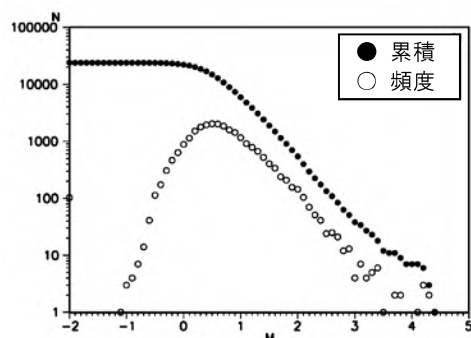


図 2 赤城山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 - ①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

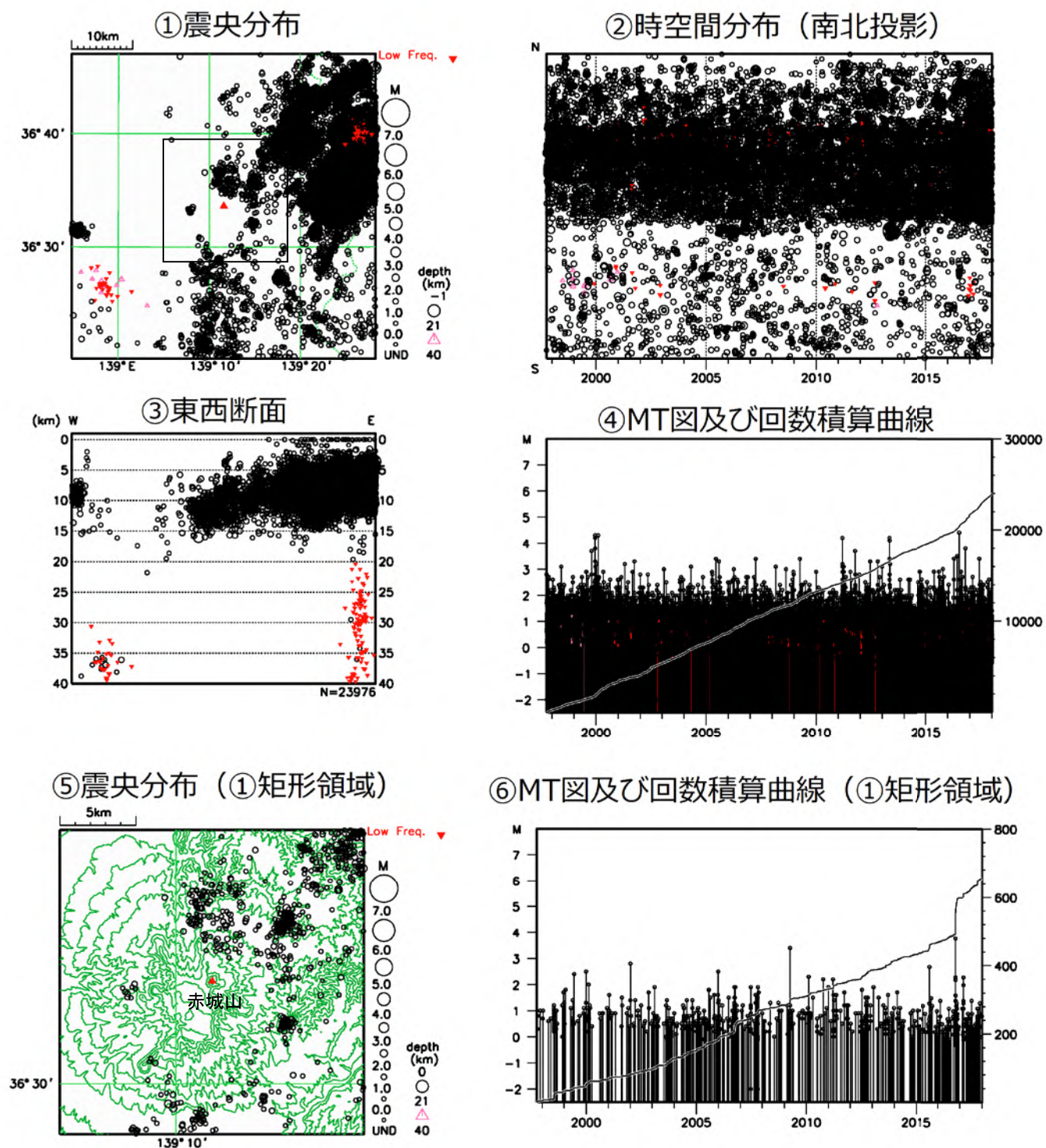


図 3 赤城山 一元化震源による周辺の地震活動（1997 年 10 月 1 日～2017 年 12 月 31 日）

注）2002 年 10 月以降、Hi-net 追加により検知力向上

赤は低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 50mメッシュ（標高）を使用した。

榛 名 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

2005 年頃から北東側 10km 付近で地震活動が見られたが、山体付近に発生する地震は少ない。

・ 噴気等の状況

噴気はなく、異常等に関する通報もない。

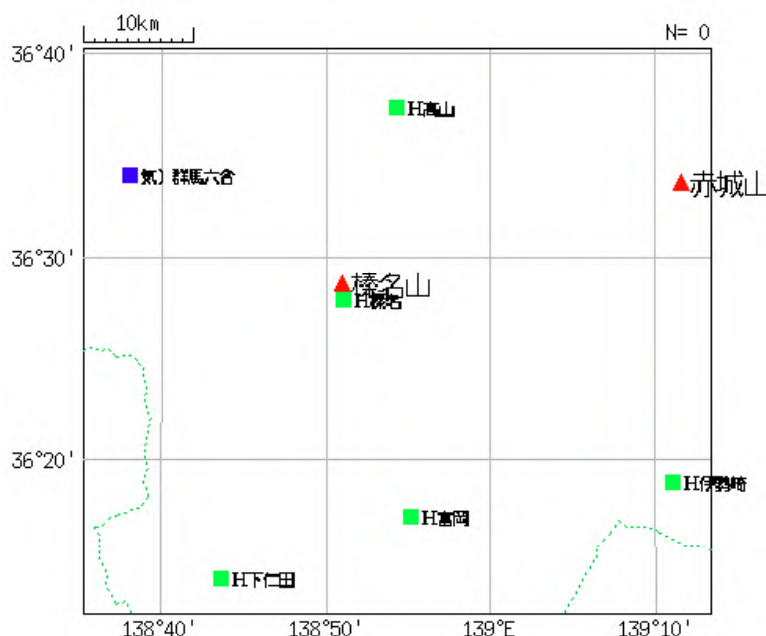


図 1 榛名山 周辺の地震観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ K) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

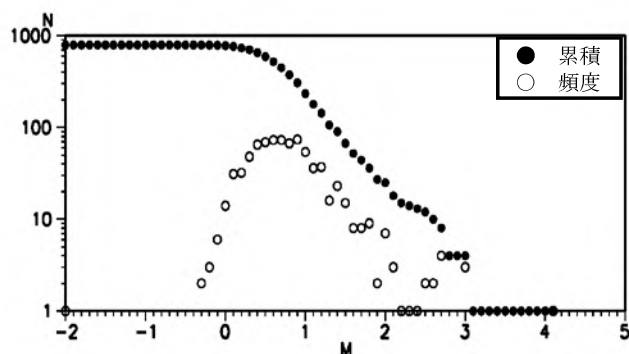


図 2 榛名山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 - ①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

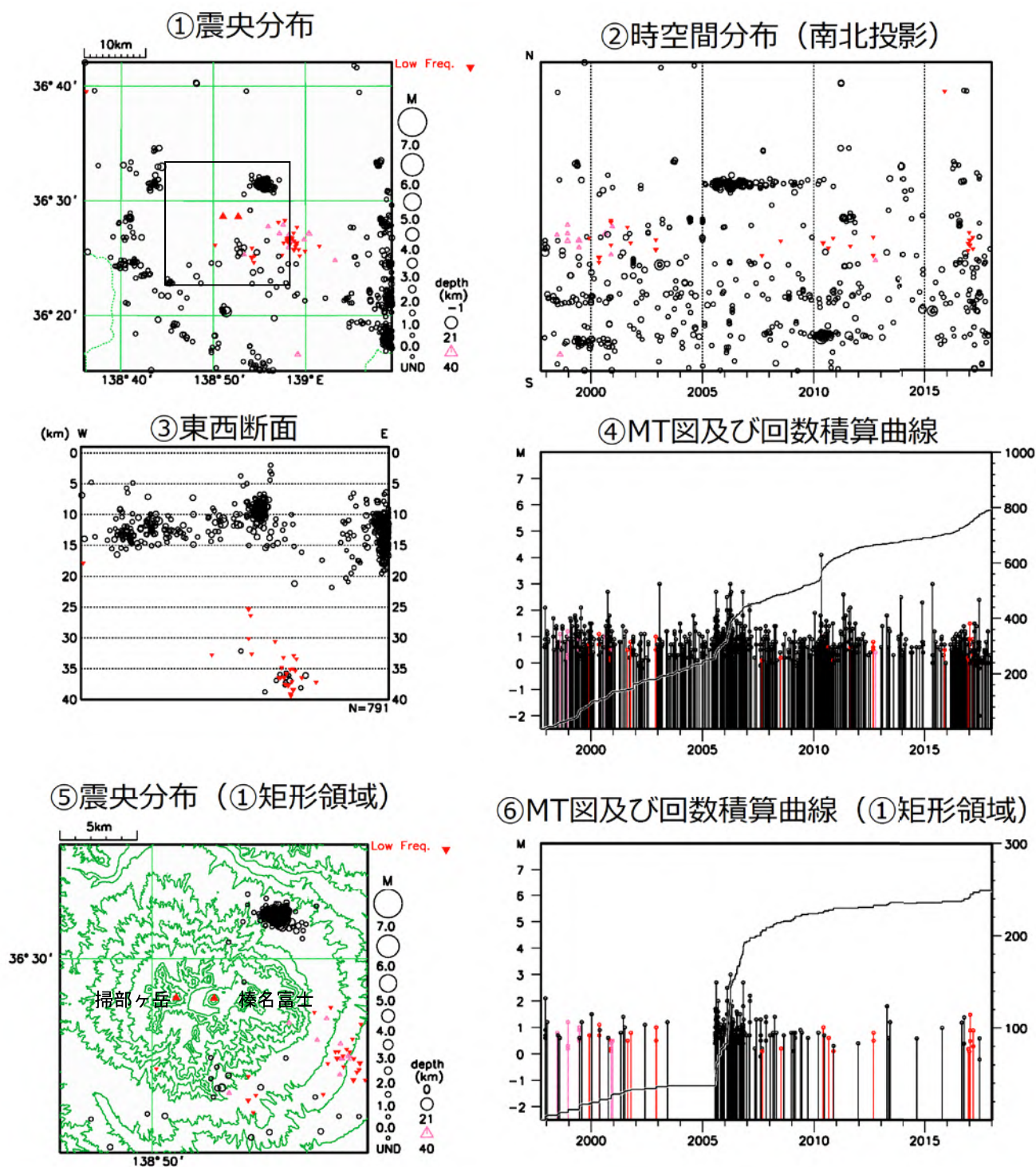


図3 榛名山 周辺の地震活動 (1997年10月1日～2017年12月31日)

注) 2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)を使用した。

横 岳

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・地震活動（図3）

山体付近に地震は発生していない。周辺の地震活動は東北地方太平洋沖地震（2011年3月11日）以降活発化したが、次第に低下している。

- ・ 噴気等の状況

嘔気はなく、異常等に関する通報もない。

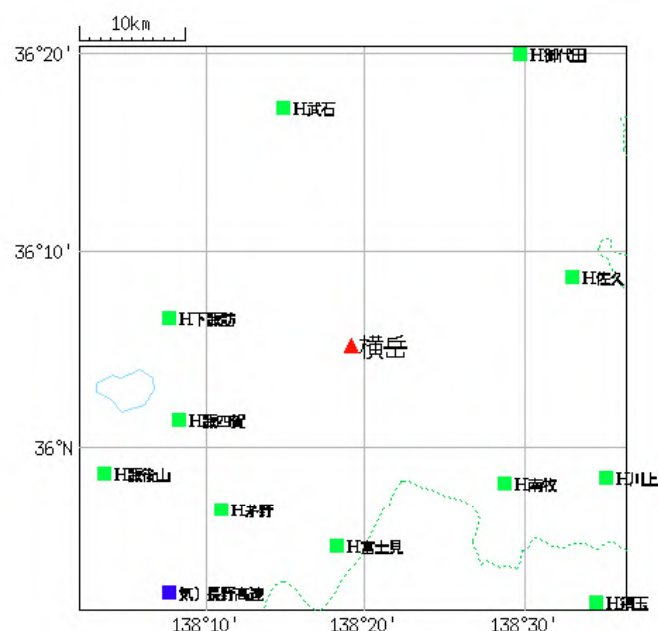


図1 横岳 周辺の地震観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

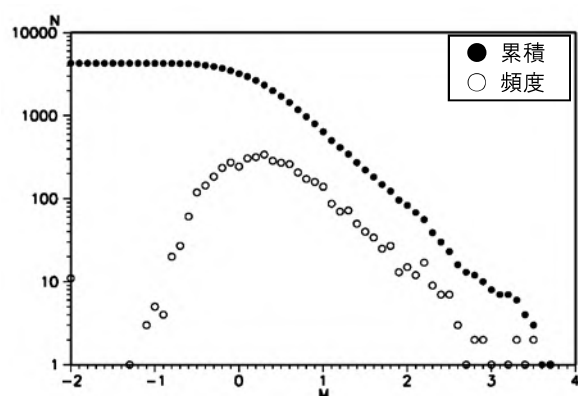


図2 横岳

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図3-①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

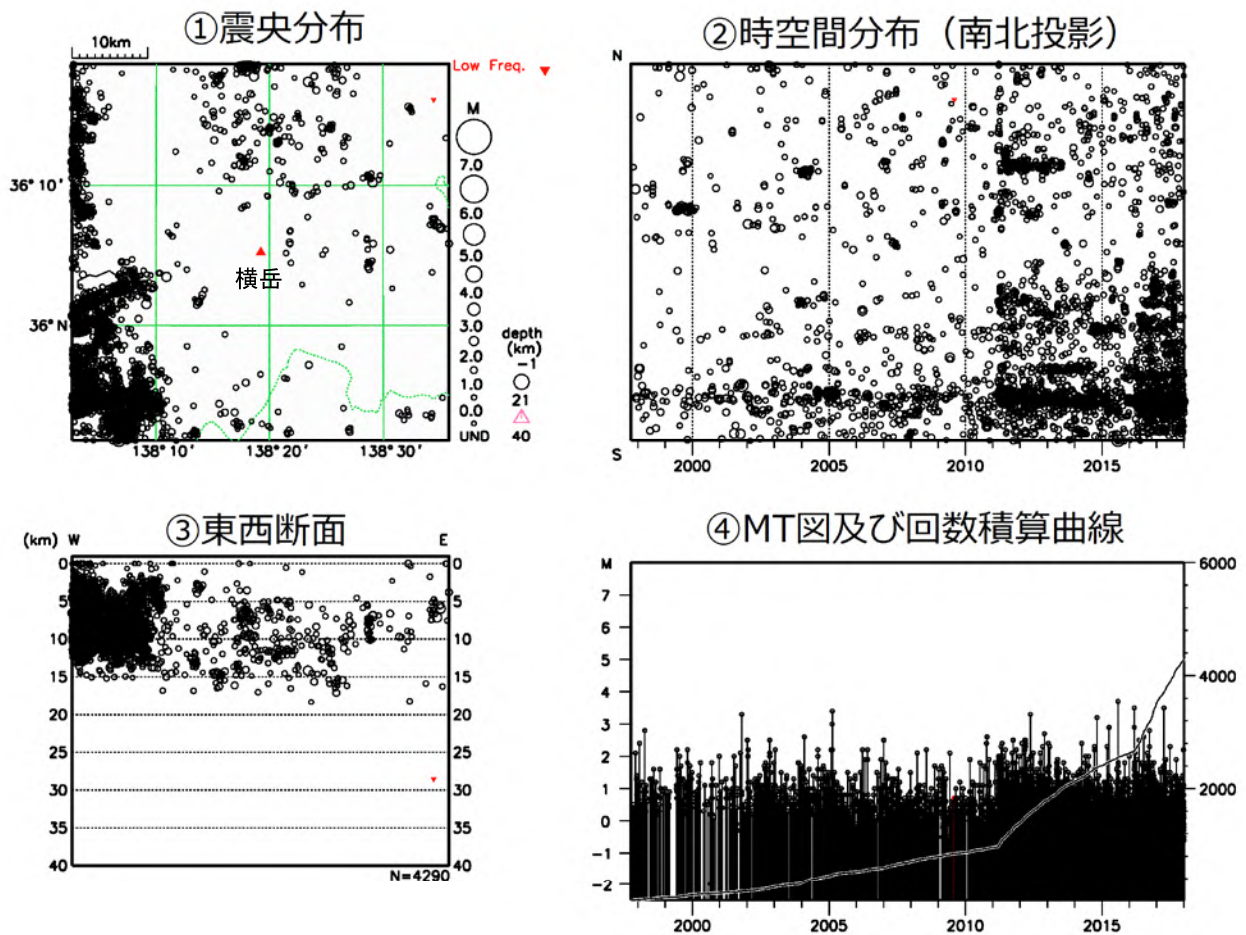


図3 横岳 一元化震源による周辺の地震活動(1997年10月1日～2017年12月31日)

注) 2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図25000を使用した。

妙高山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

山体付近に発生する地震はほとんどなく、周辺の地震活動にも特に変化は認められない。

・ 噴気等の状況

南側火口原の南地獄谷頭部には従来から噴気地帯があるが、噴気異常等に関する通報はない。

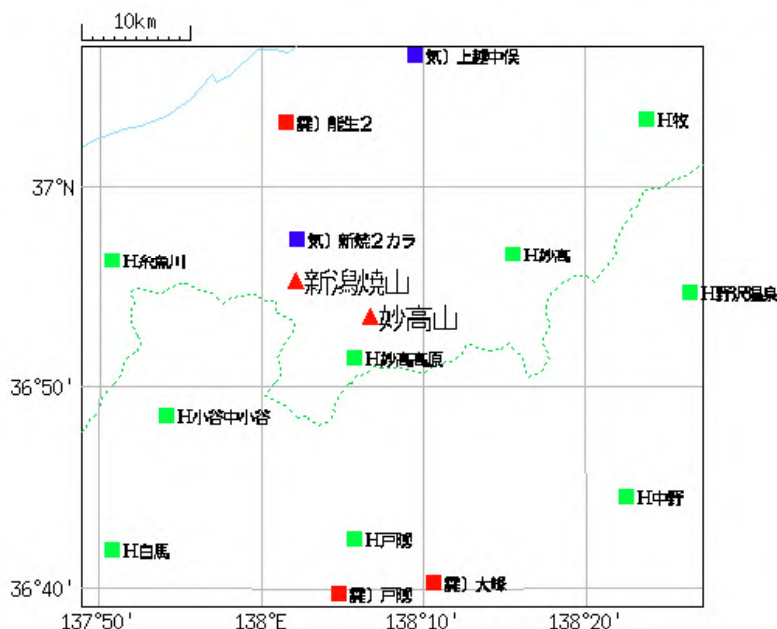


図 1 妙高山 周辺の地震観測点

■ 震) : 東大震研観測点 ■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

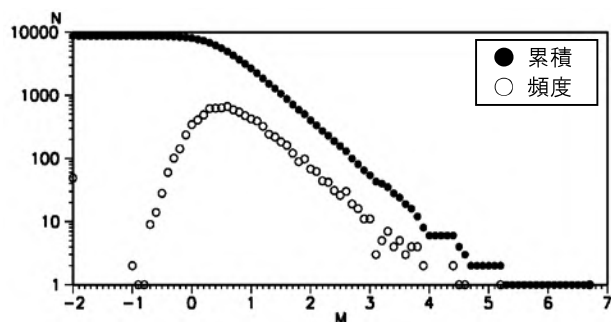


図 2 妙高山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 -①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東京大学、京都大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

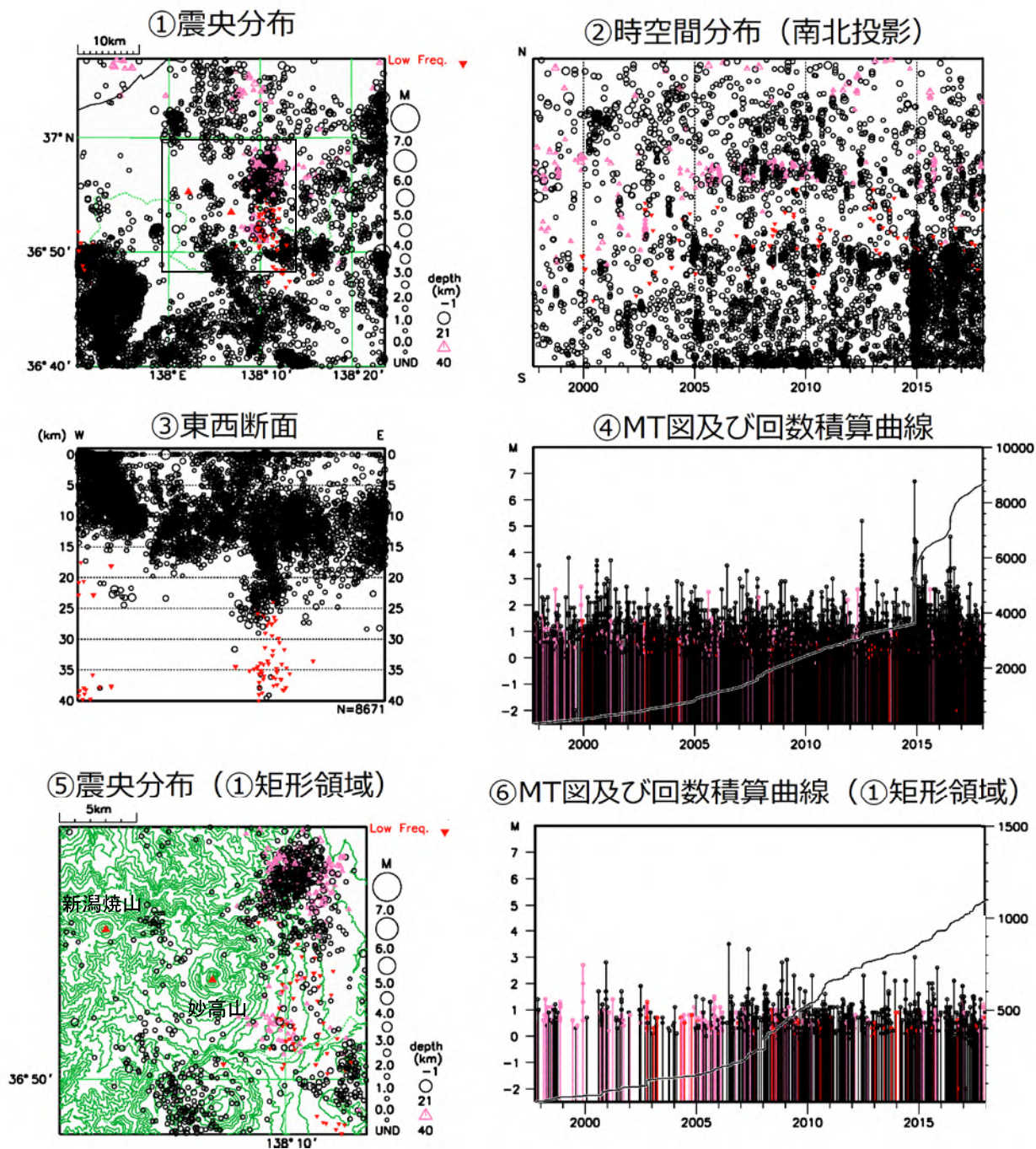


図3 妙高山 一元化震源による周辺の地震活動 (1997年10月1日～2017年12月31日)

注) 2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)を使用した。

アカンダナ山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

山体付近に発生する地震は少ない。周辺の地震活動は東北地方太平洋沖地震（2011 年 3 月 11 日）以降活発化したが、次第に低下している。

・ 噴気等の状況

噴気はなく、異常等に関する通報もない。

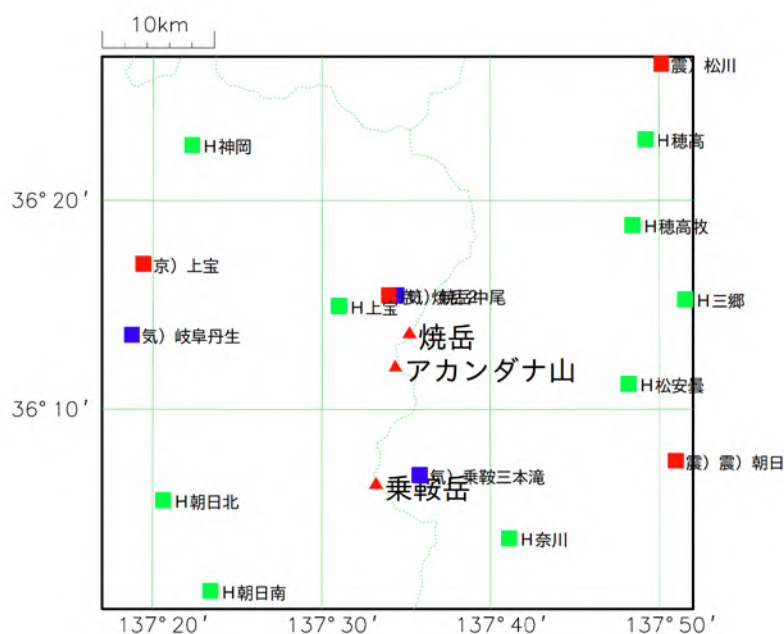


図 1 アカンダナ山 周辺の地震観測点

■ 京) : 京大観測点 ■ 震) : 東大震研観測点 ■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点
この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

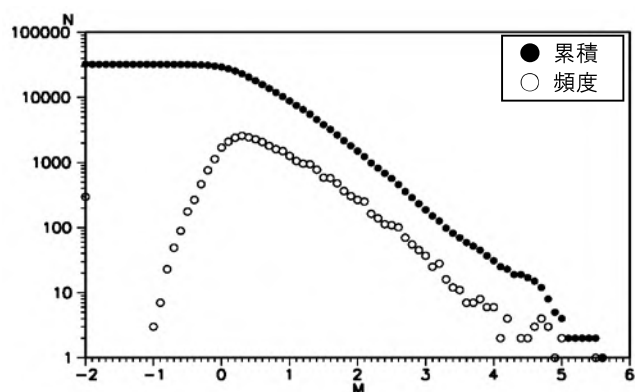


図 2 アカンダナ山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 -①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東京大学、名古屋大学、京都大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

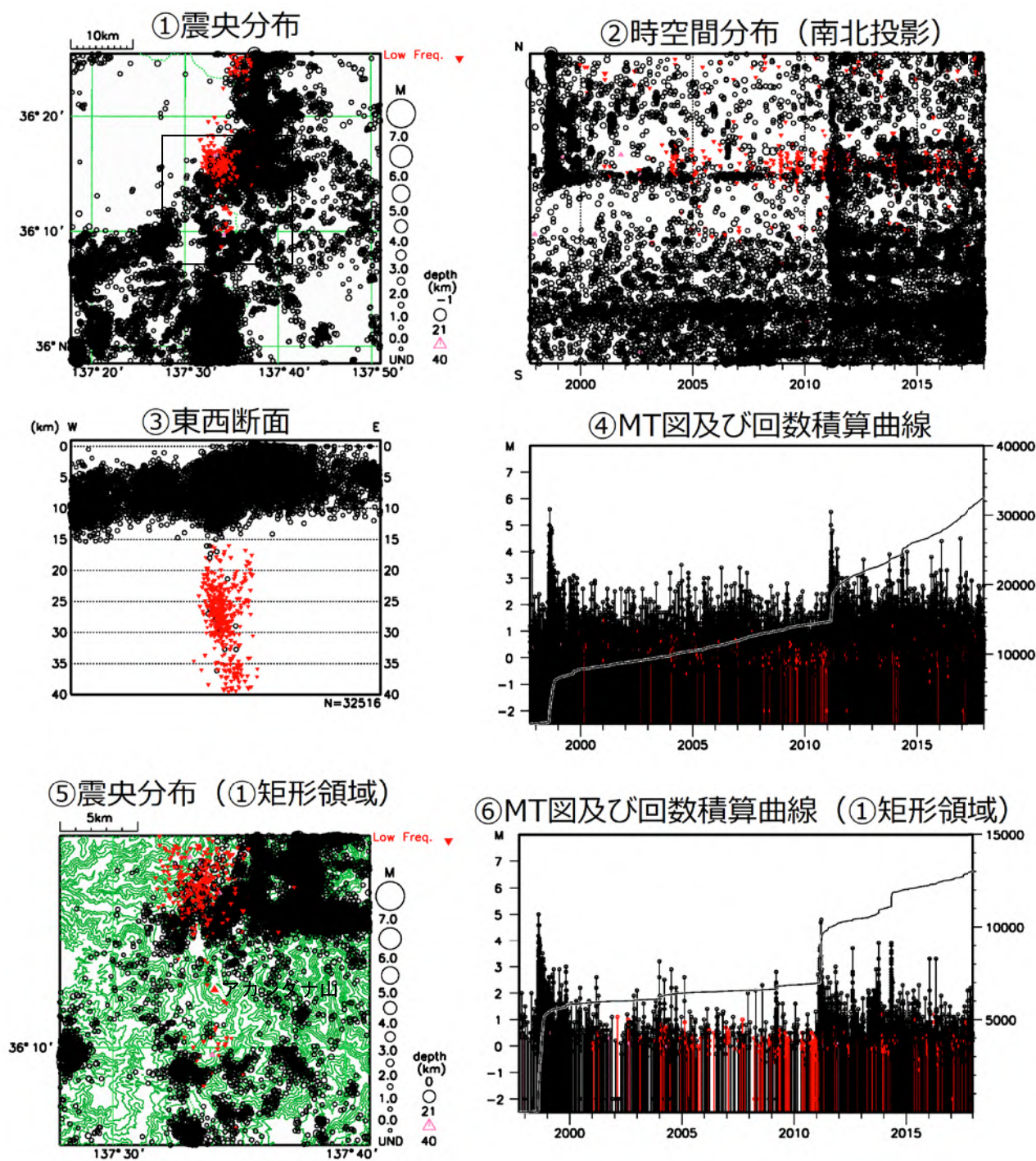


図3 アカンダナ山 一元化震源による周辺の地震活動（1997年10月1日～2017年12月31日）
 注）2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上
 赤は低周波地震を示す。
 表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。
 この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）を使用した。

利 島

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

島内に発生する地震は少ない。周辺の地震活動は東北地方太平洋沖地震（2011 年 3 月 11 日）以降やや活発化した、その後すぐに低下した。

・ 噴気等の状況

噴気はなく、異常等に関する通報もない。

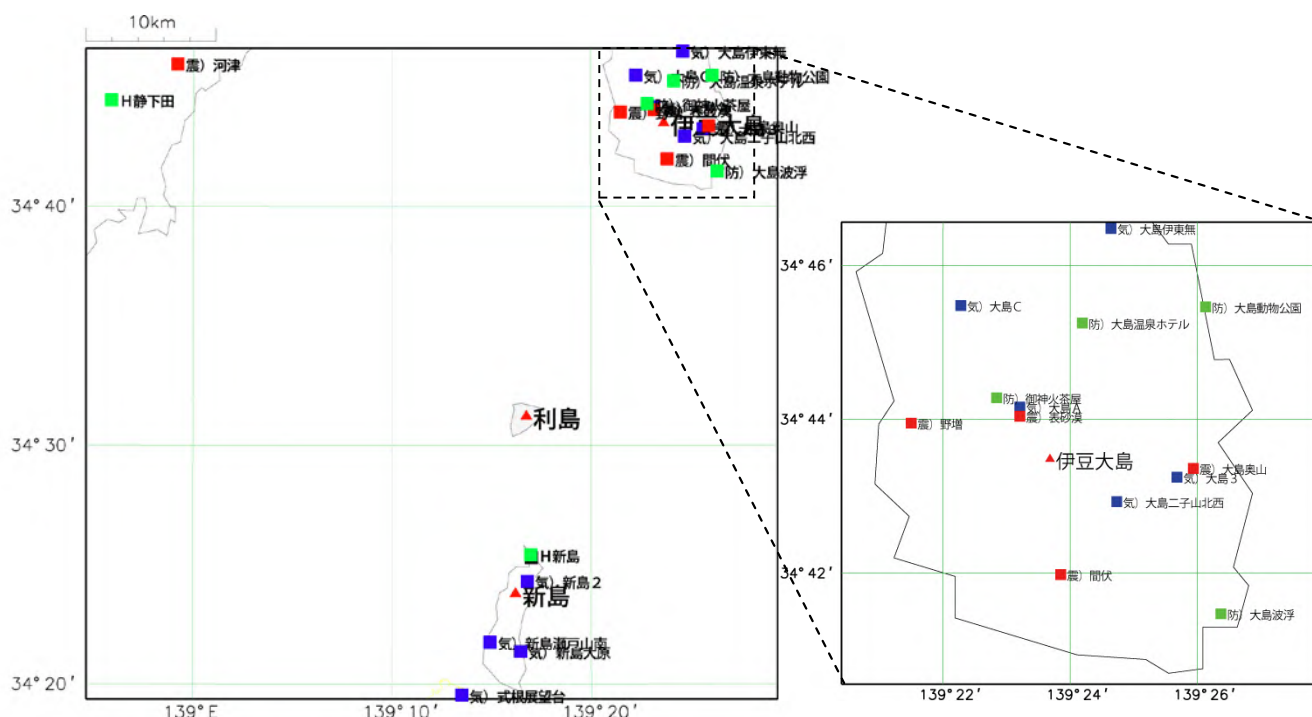


図 1 利島 周辺の地震観測点

■震：東大震研観測点 ■H：防災科研観測点 ■気：気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

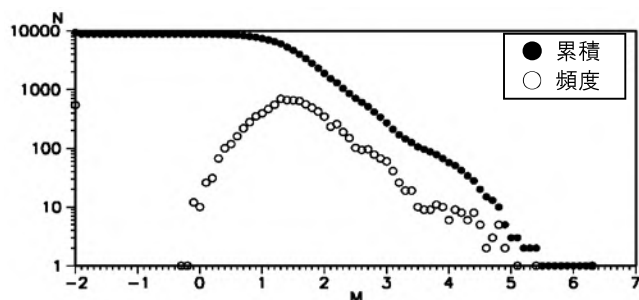


図 2 利島

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 -①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、東京大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

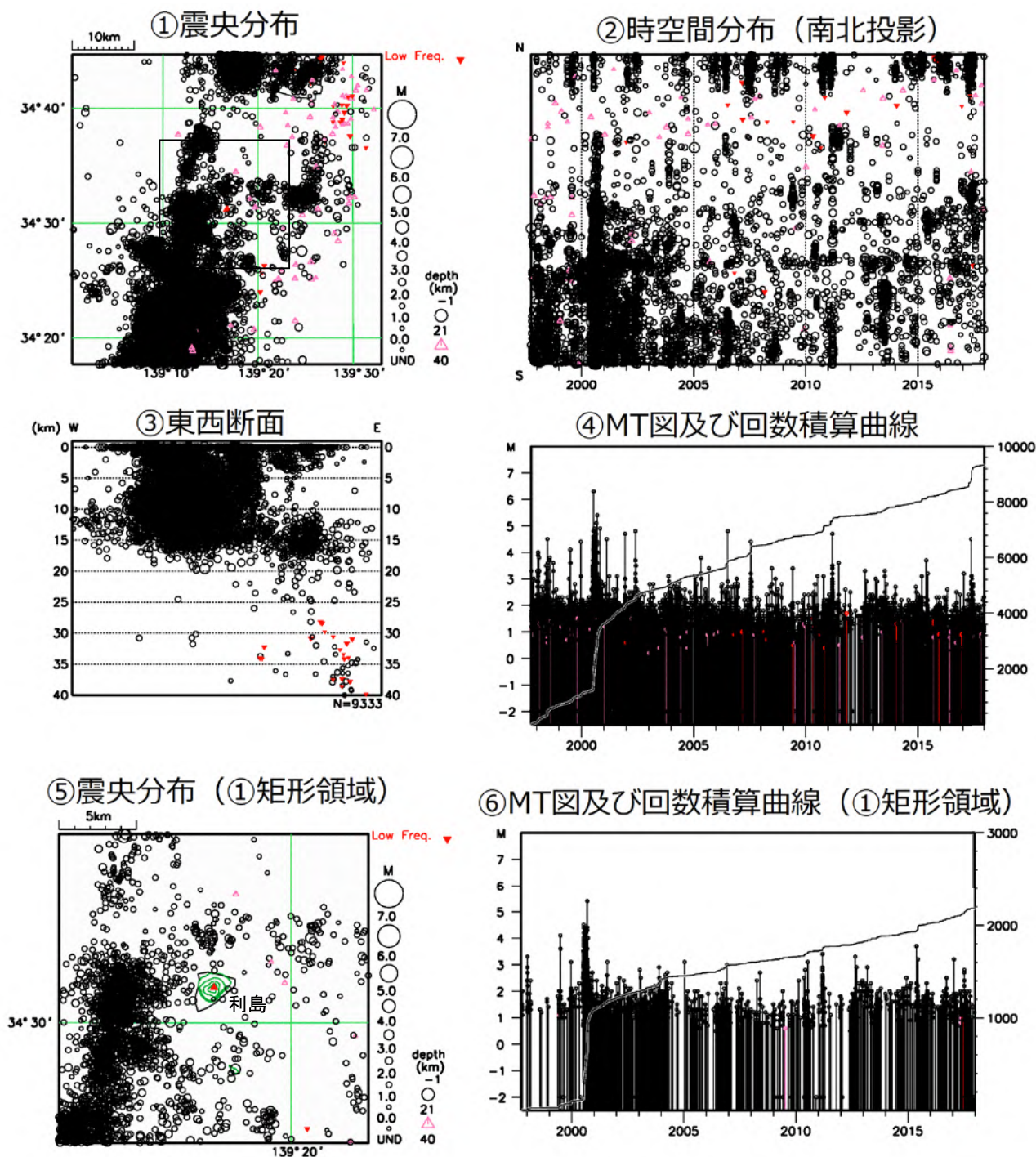


図3 利島 一元化震源による周辺の地震活動（1997年10月1日～2017年12月31日）

注）2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は深部低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）を使用した。

御 蔵 島

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

付近に発生する地震は少なく、周辺の地震活動にも特に変化は認められていない。

・ 噴気等の状況

噴気はなく、異常等に関する通報もない。

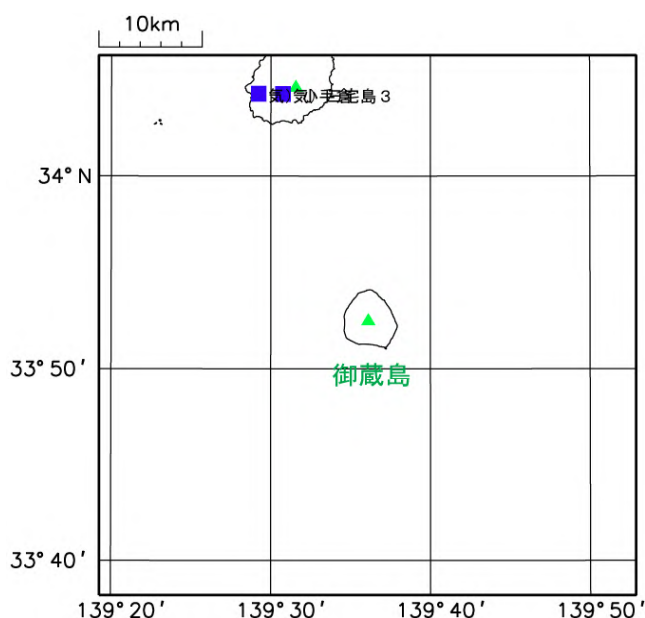


図 1 御蔵島 周辺の地震観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ Q) : 気象庁観測点

・ 三宅島 3（気象庁）は 2011 年 11 月で観測終了

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

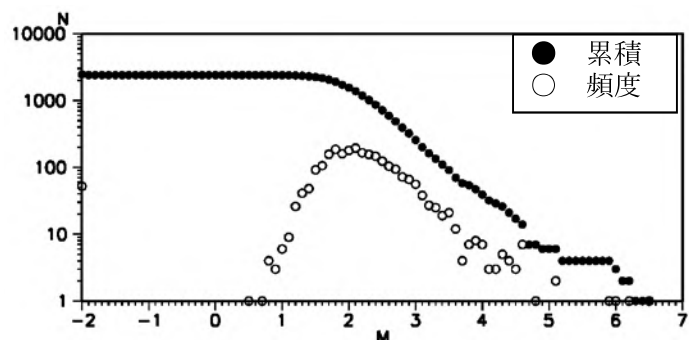


図 2 御蔵島

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 - ①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

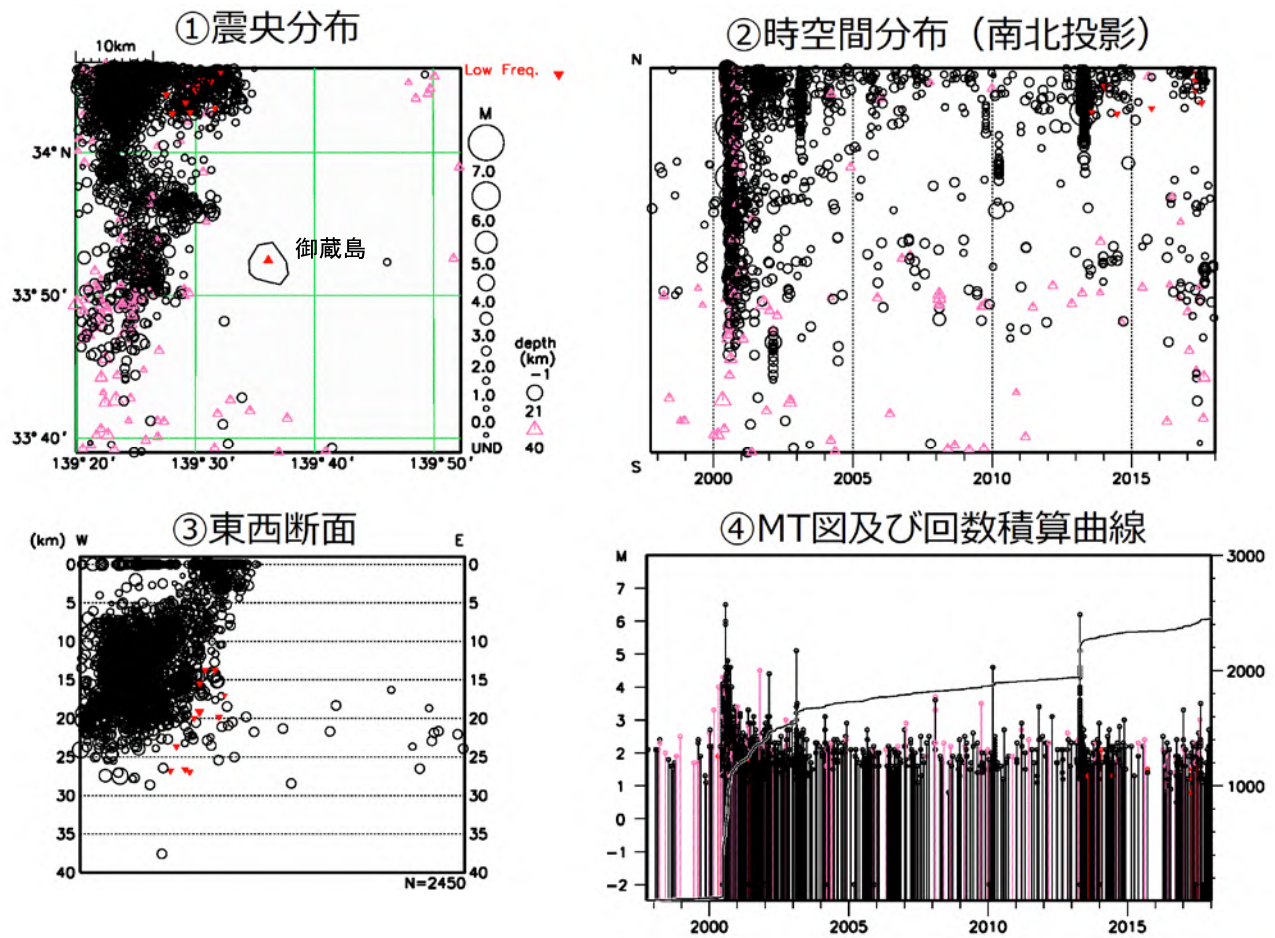


図3 御蔵島 一元化震源による周辺の地震活動（1997年10月1日～2017年12月31日）

注）2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は深部低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図25000を使用した。

三 瓶 山

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 地震活動（図 3）

山体付近に発生する地震は少なく、周辺の地震活動にも特に変化はない。

・ 噴気等の状況

山頂部の室の内火口には鳥地獄と呼ばれる噴気孔があるが、噴気異常等に関する通報はない。

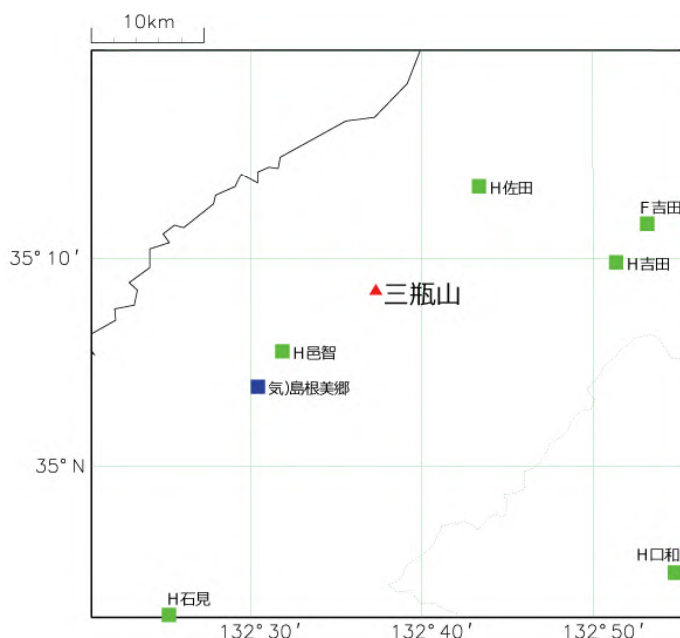


図 1 三瓶山 周辺の地震観測点

■ H) : 防災科研観測点 ■ 気) : 気象庁観測点

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。

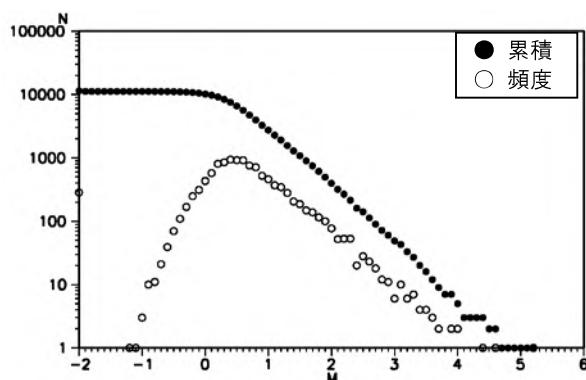


図 2 三瓶山

一元化震源によるマグニチュード別度数分布図
(図 3 - ①震央分布図の範囲内)

この資料は気象庁のほか、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成。

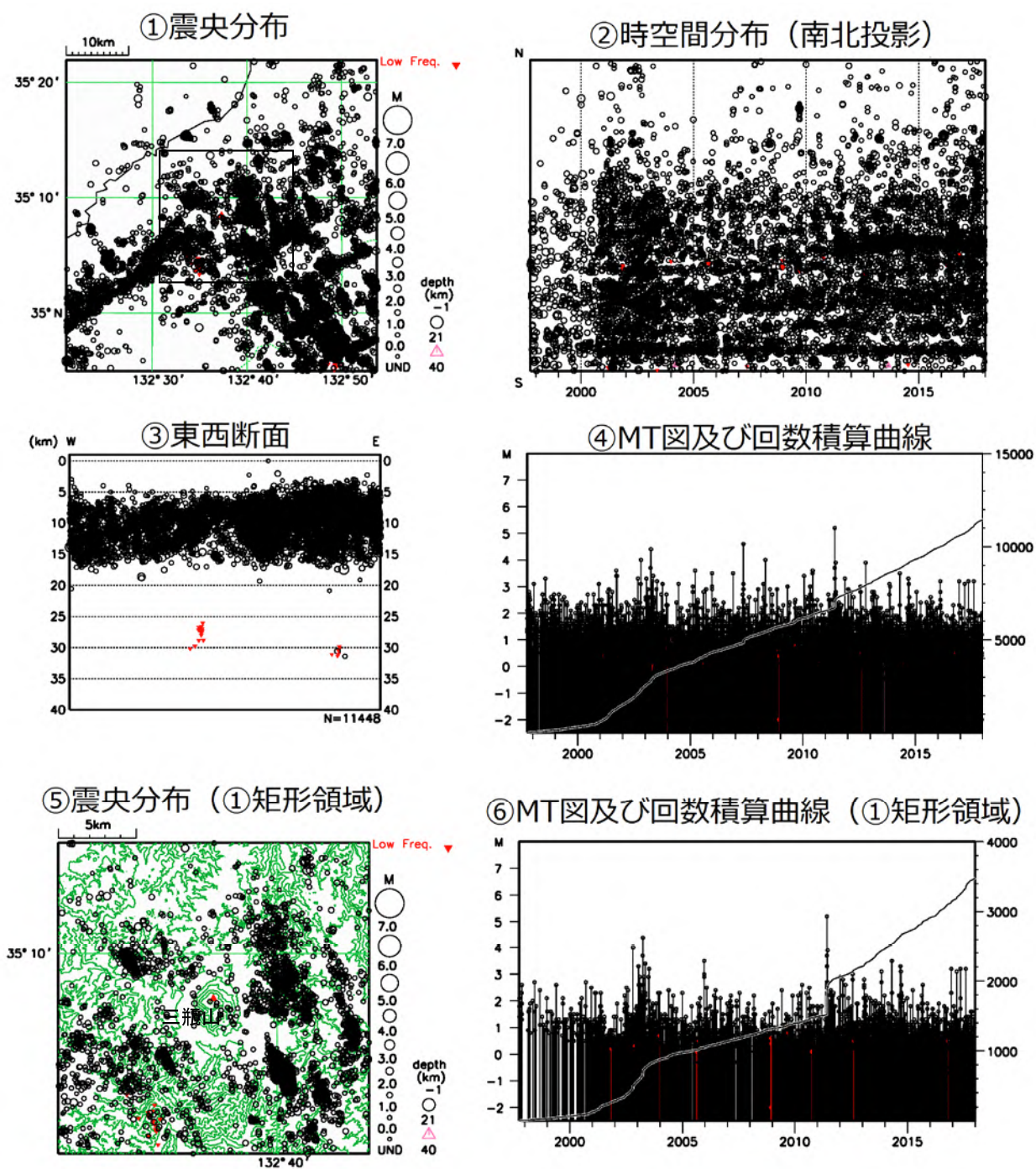


図3 三瓶山 周辺の地震活動 (1997年10月1日～2017年12月31日)

注) 2002年10月以降、Hi-net追加により検知力向上

赤は深部低周波地震を示す。

表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

この図の作成にあたっては、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ(標高)を使用した。

阿武火山群

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○ 概況 (2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動 (図 1)

地震活動は静穏な状態で経過した。

・噴気等の状況

阿武火山群に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

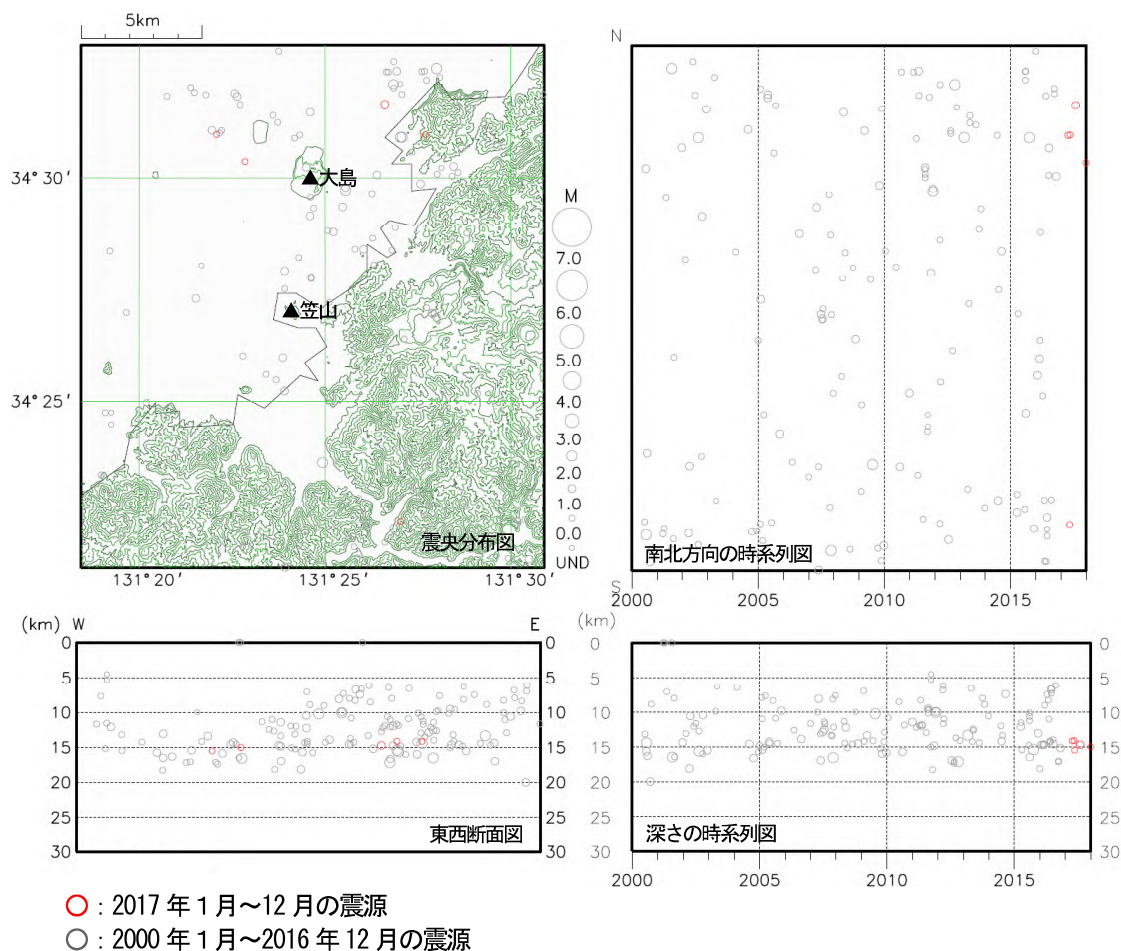


図 1 阿武火山群 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

＜2017 年 1 月～12 月 31 日の状況＞

地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

この資料は気象庁のほか、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成した。

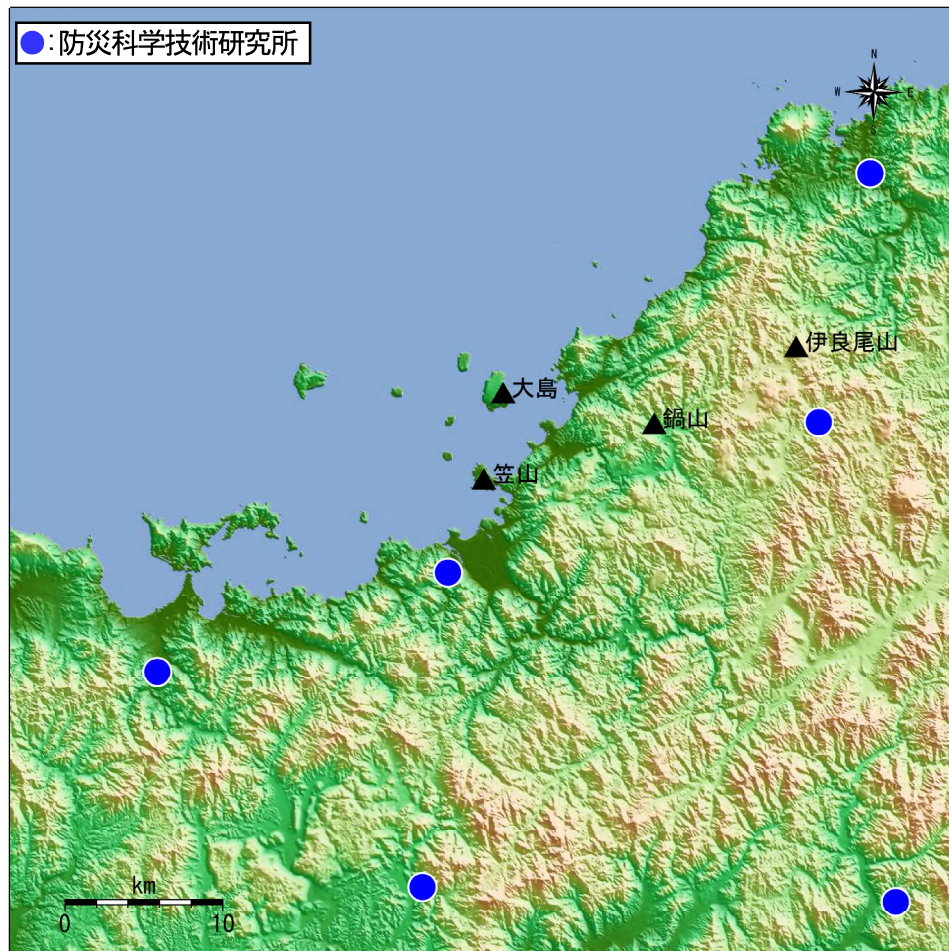


図2 阿武火山群 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

由布岳 (2017 年 12 月 31 日現在)

由布岳周辺では、「平成 28 年（2016 年）熊本地震」の一連の活動により地震活動が活発となっているが、山体で発生する地震は少ない状態で経過した。その他の火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・地震活動（図 1）

山体で発生する地震は少なく、地震活動は静穏な状態で経過した。

・噴気等の状況

由布岳に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

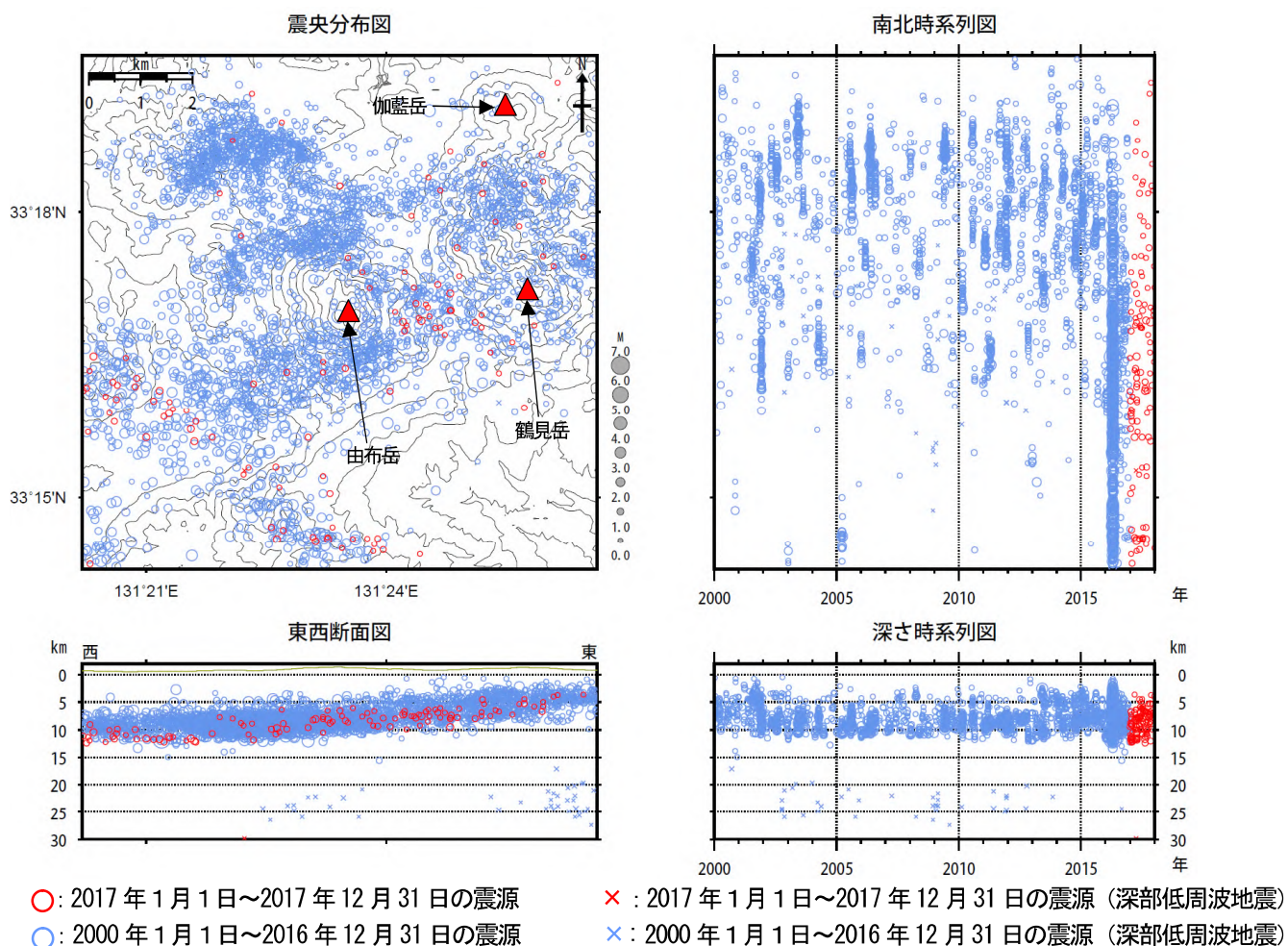


図 1 由布岳 一元化震源による地震活動経過図（2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日）

<2017 年 1 月～12 月の状況>

山体で発生する地震は少なく、地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用した。

この資料は気象庁のほか、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成した。

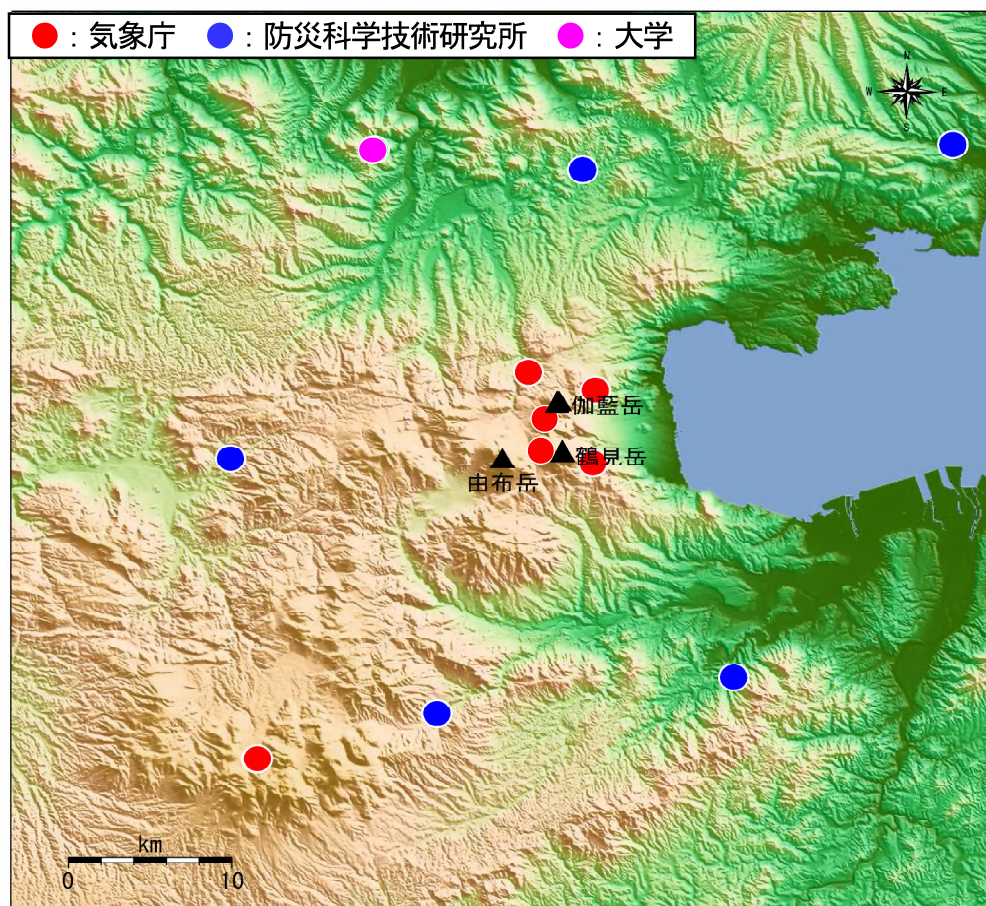


図2 由布岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

福江火山群

(2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○ 概況 (2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動 (図 1)

地震活動は静穏な状態で経過した。

・噴気等の状況

福江火山群に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

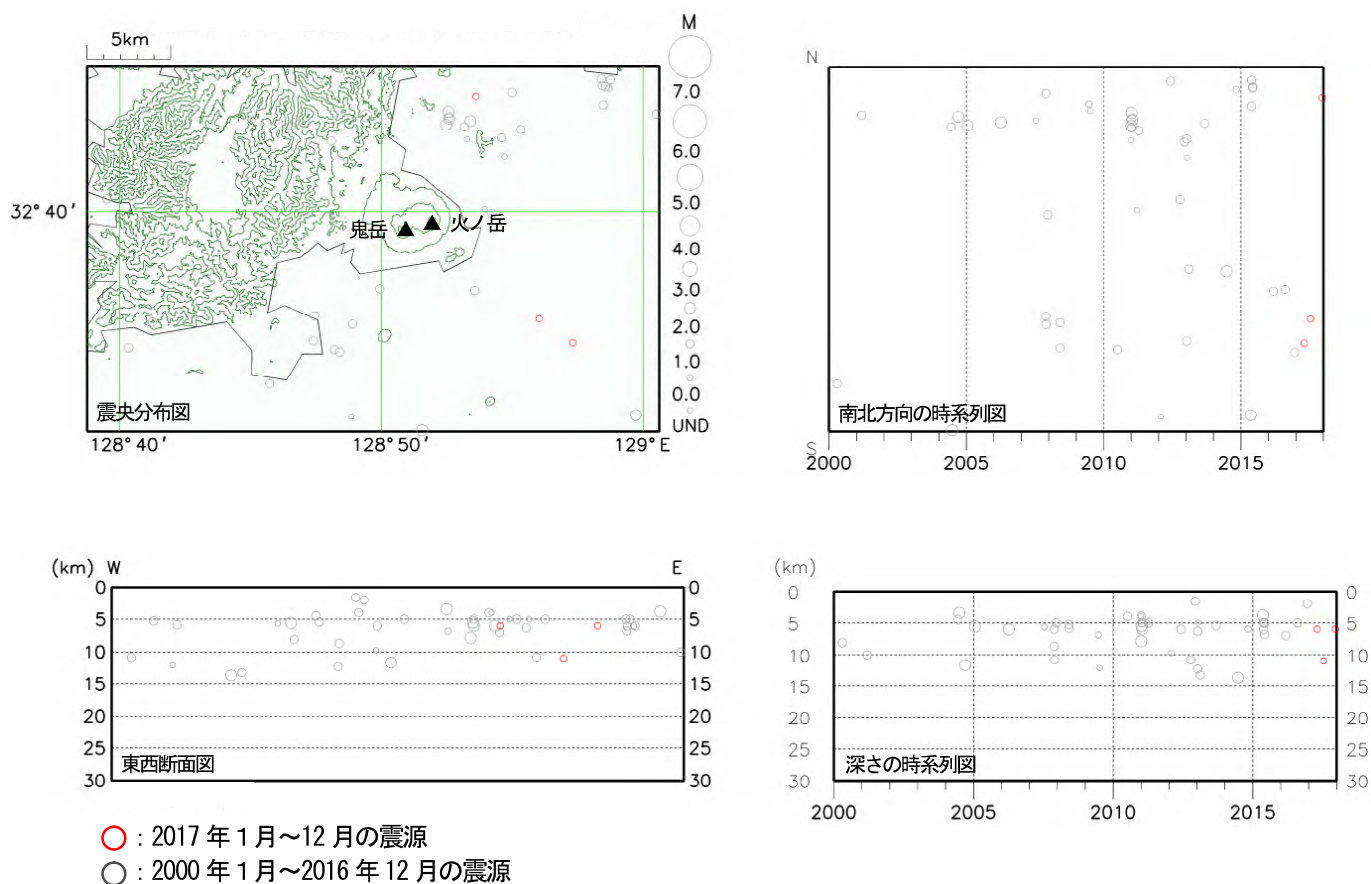


図 1 福江火山群 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月の状況>

地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

この資料は気象庁のほか、九州大学、独立行政法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成した。

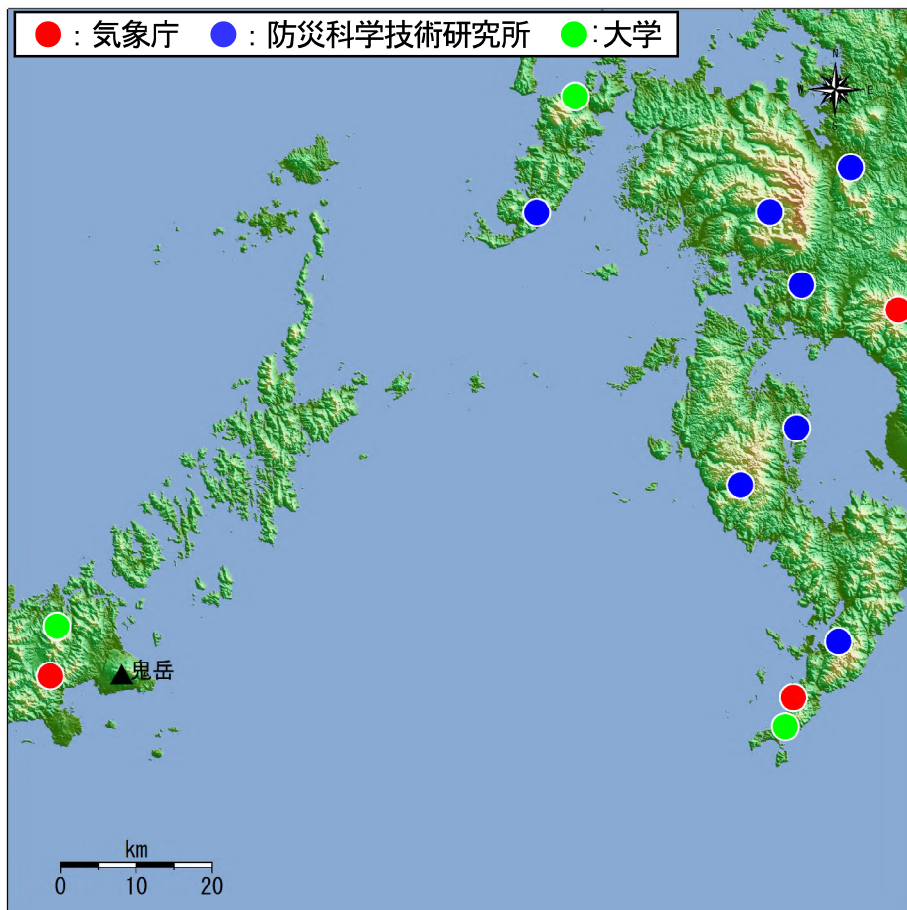


図2 福江火山群 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

米 丸 ・ 住 吉 池

(2018 年 1 月 25 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～2018 年 1 月 25 日）

・ 噴気等の状況（図 1）

住吉池に関して、始良市危機管理課から 2018 年 1 月 24 日に半月前から池の水が濁っているとの通報があり、同日に現地調査を行った。前回の観測（2008 年 2 月 27 日）と比べて、池全体が茶色に変色しているのを確認した。火山活動に伴う噴気や鳴動及び臭気は観測されなかった。池の水温は 9.3℃と異常は認められなかった（気温 6.4℃）。

米丸に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

・ 地震活動（図 2）

地震活動は静穏な状態で経過した。



図 1 米丸・住吉池 住吉池の状況（左：2018 年 1 月 24 日、右：2008 年 2 月 27 日）

- ・ 前回の観測（2008 年 2 月 27 日）と比べて、池全体が茶色に変色しているのを確認した。
- ・ 火山活動に伴う噴気や鳴動及び臭気は観測されなかった。

この資料は気象庁のほか、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成した。

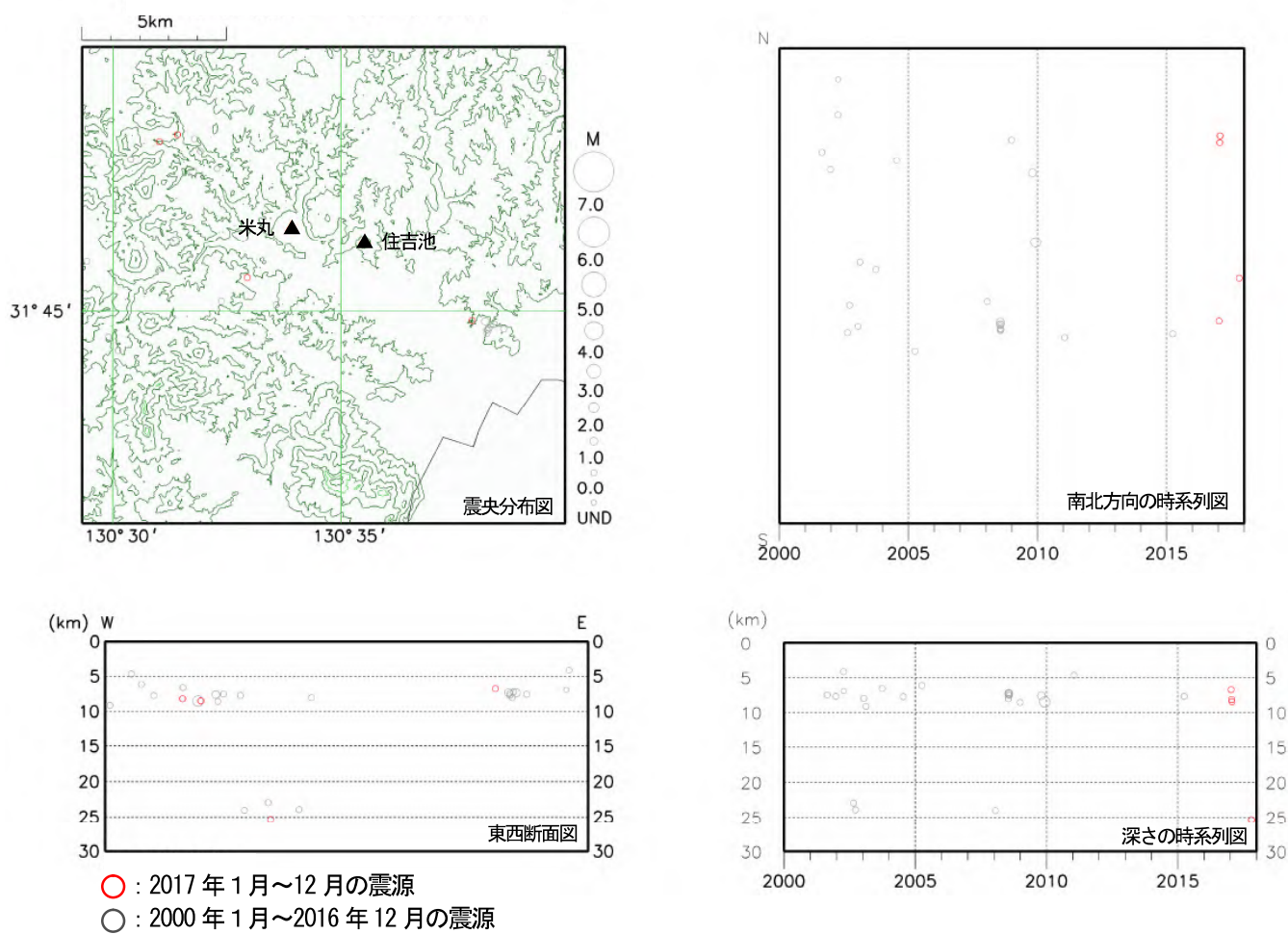


図2 米丸・住吉池 一元化震源による地震活動経過図 (2000年1月～2017年12月31日)

<2017年1月～12月の状況>

地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ (標高)』を使用した。

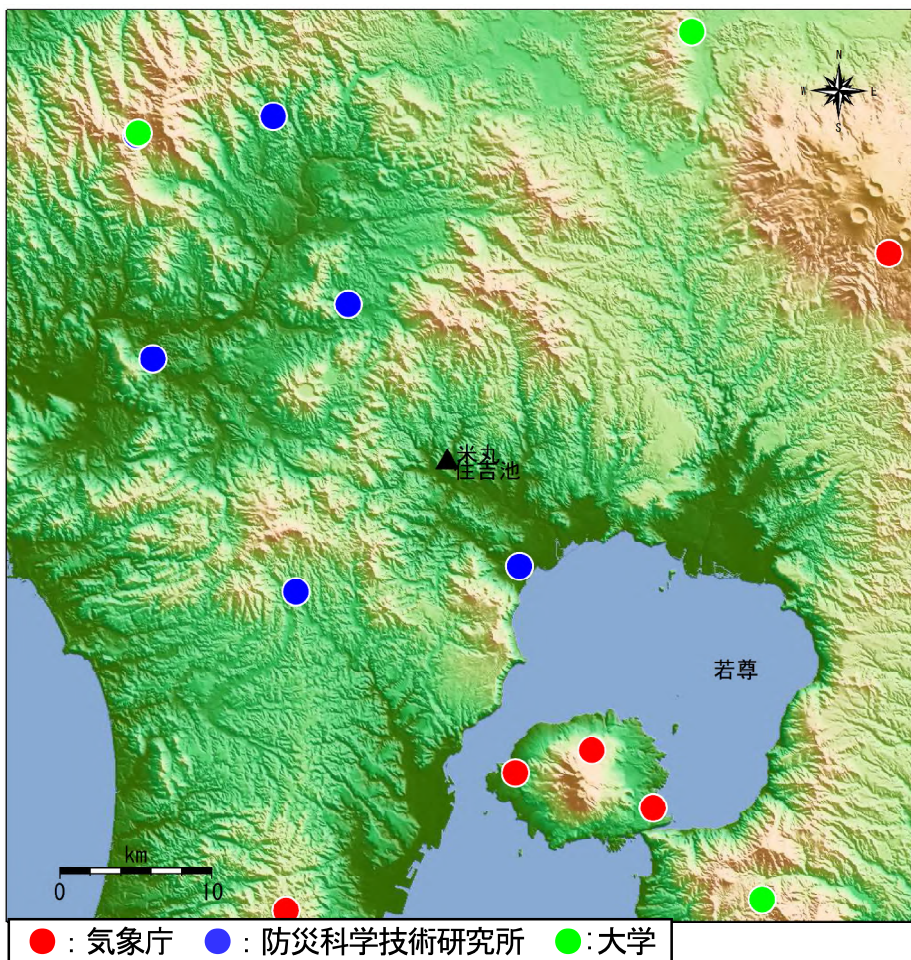


図3 米丸・住吉池 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

若 尊 (2017 年 12 月 31 日現在)

若尊及びその周辺領域で時々地震が発生し、2016 年後半から 2017 年前半にかけてやや増加したが、その他の火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候はみられない。

○ 概況 (2017 年 1 月～12 月 31 日)

・地震活動 (図 1)

若尊及びその周辺領域で時々地震が発生し、2016 年後半から 2017 年前半にかけてやや増加した。

・噴気等の状況

海面に泡が湧出する現象 (たぎり) について、異常に関する報告はされていない。

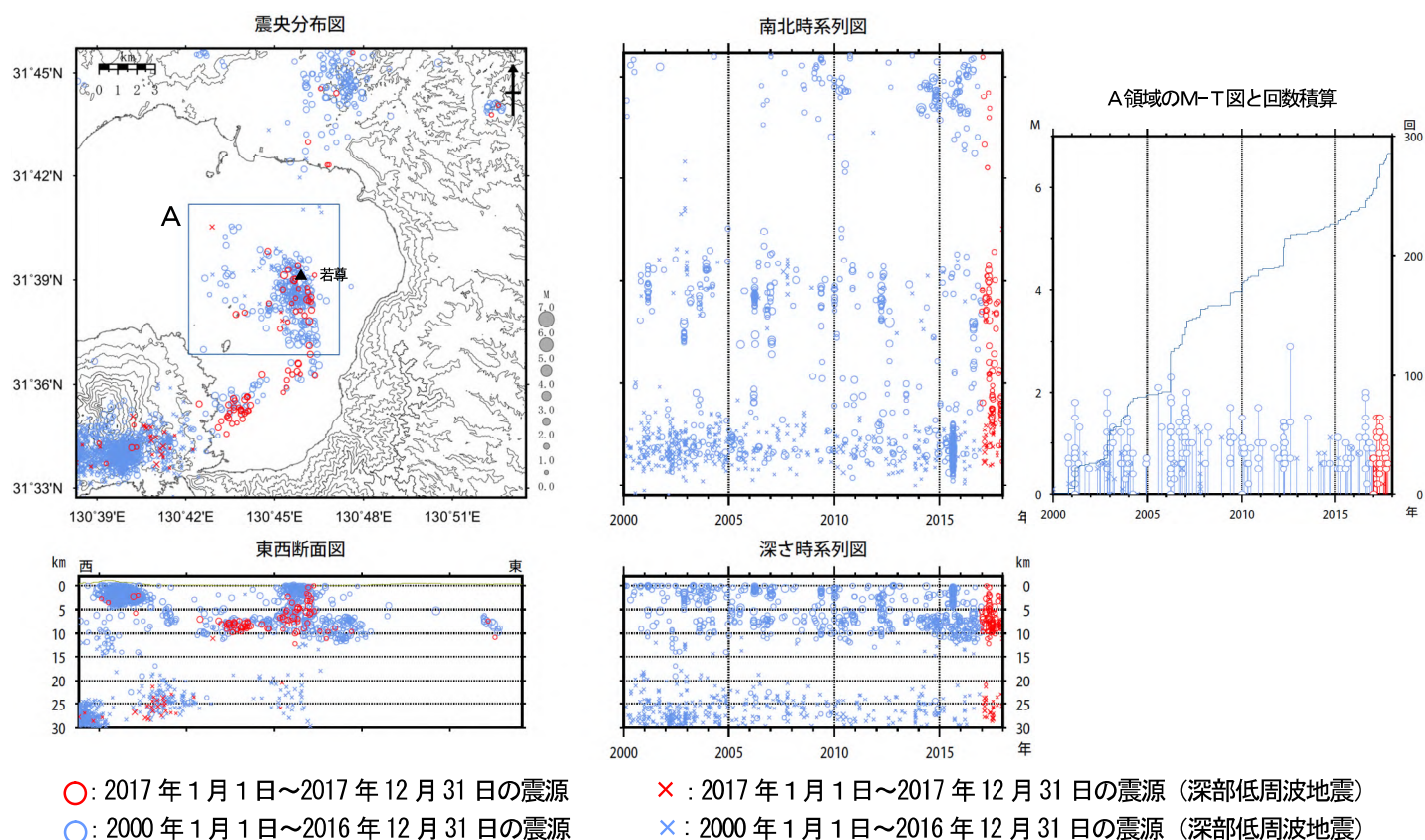


図 1 若尊 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月の状況>

若尊及びその周辺領域で時々地震が発生し、2016 年後半から 2017 年前半にかけてやや増加した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。
表示している震源には、震源決定時の計算誤差の大きなものが表示されることがある。

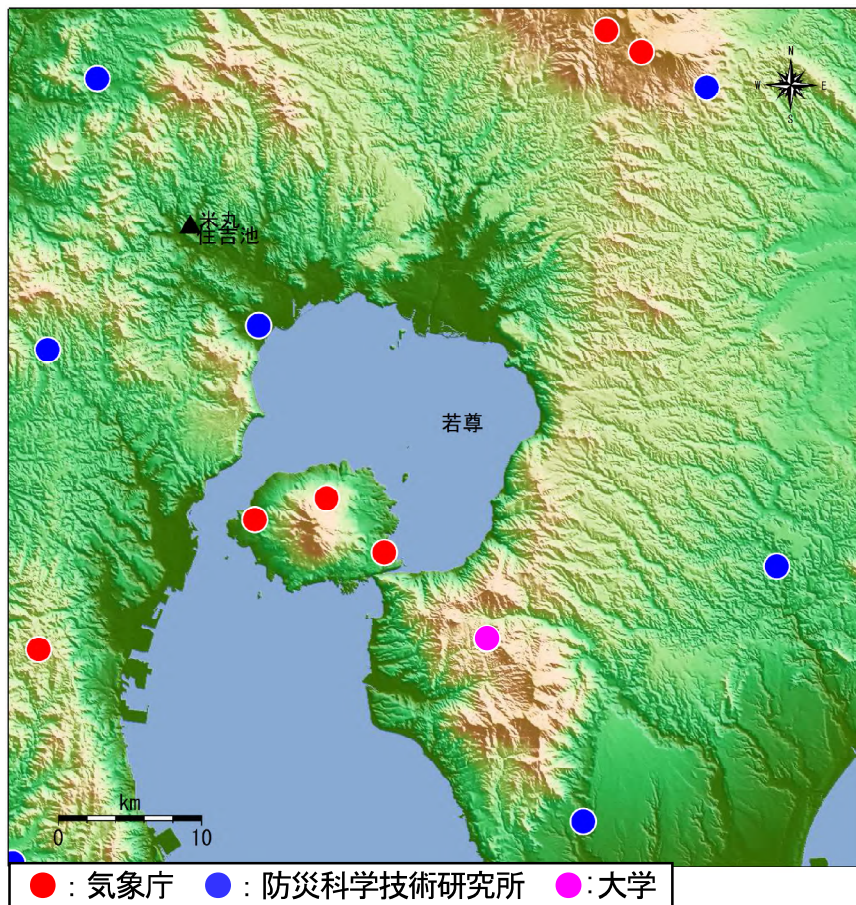


図2 若尊 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

池 田・山 川

(2017 年 12 月 31 日現在)

周辺領域では、2017 年 7 月以降、鹿児島湾を震源とする地震活動が活発しているが、山体で発生する地震は少なく、地震の発生状況に特段の変化はない。その他の火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・噴気等の状況（図 1）

噴気等の異常に関する報告はされていない。

12 月 14 日に、海上自衛隊第 1 航空群の協力を得て上空からの観測を実施した。池田・山川周辺で噴気活動は観測されなかった。

・地震活動（図 2）

周辺領域では、2017 年 7 月以降、鹿児島湾を震源とする地震活動が活発しているが、山体で発生する地震は少なく、地震の発生状況に特段の変化はない。



図 1 池田・山川 上空から撮影した池田・山川の状況（2017 年 12 月 14 日）

この資料は気象庁のほか、鹿児島大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータを利用して作成した。

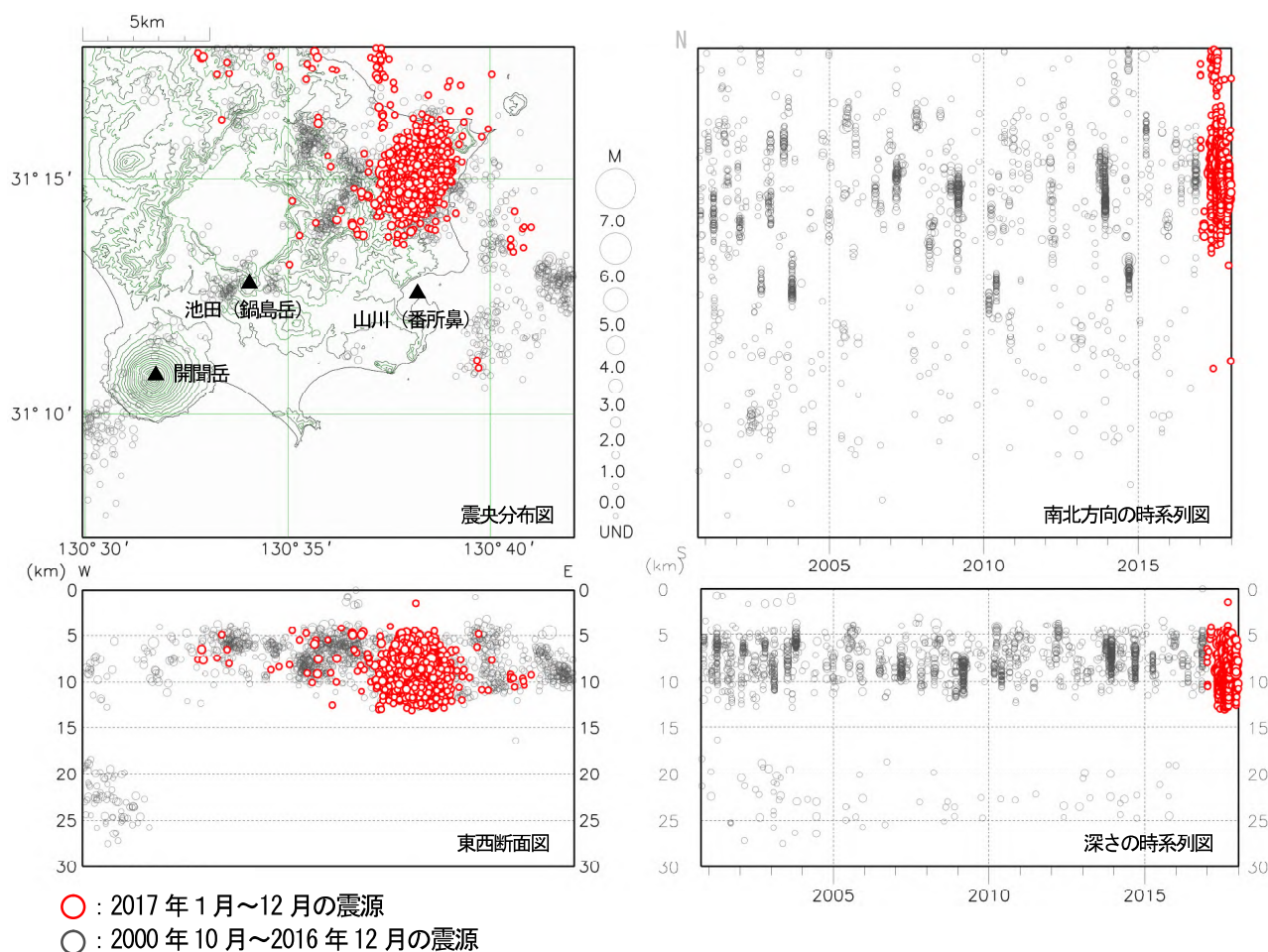


図 2 池田・山川 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 10 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月の状況>

周辺領域で時々地震はあるものの、発生状況に特段の変化はなく経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

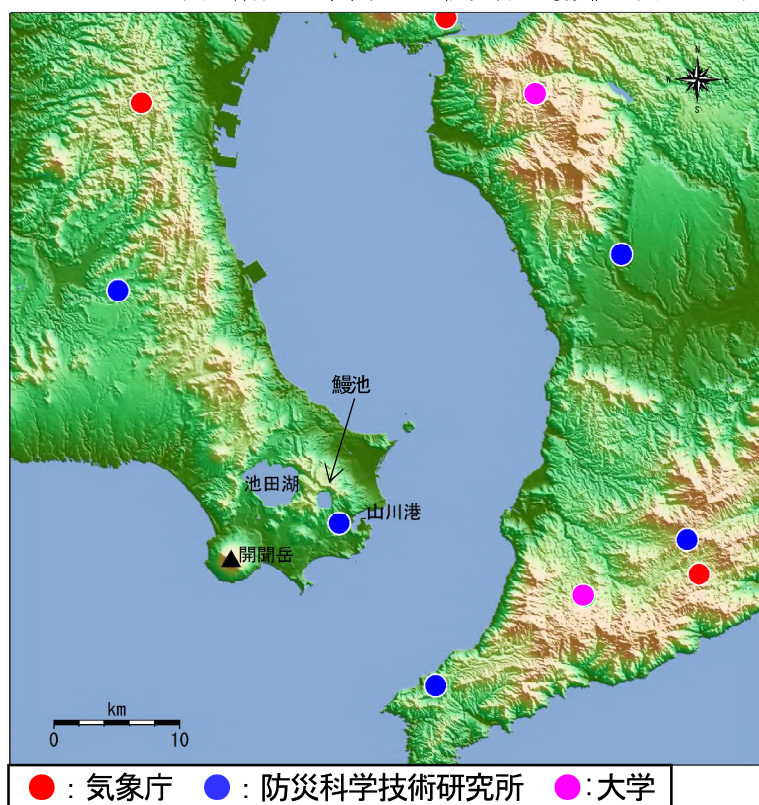


図 3 池田・山川 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

開 聞 岳 (2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○ 概況 (2017 年 1 月～12 月 31 日)

・ 噴気等の状況 (図 1)

開聞岳に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

12 月 14 日に、海上自衛隊第 1 航空群の協力を得て上空からの観測を実施した。開聞岳及びその周辺で噴気活動は観測されなかった。

・ 地震活動 (図 2)

地震活動は静穏な状態で経過した。



図 1 開聞岳 上空から撮影した開聞岳の状況 (2017 年 12 月 14 日)

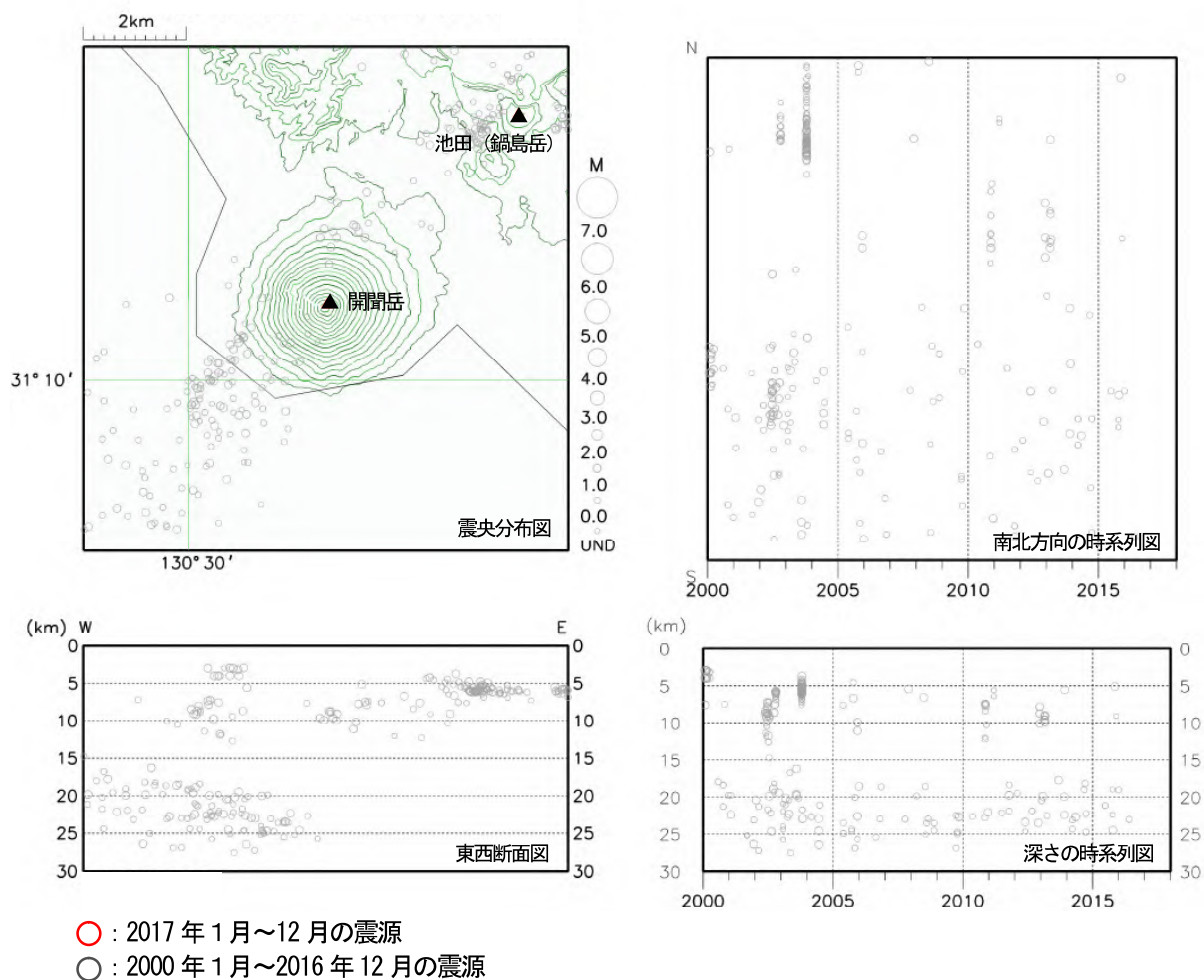


図 2 開聞岳 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月の状況>

地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

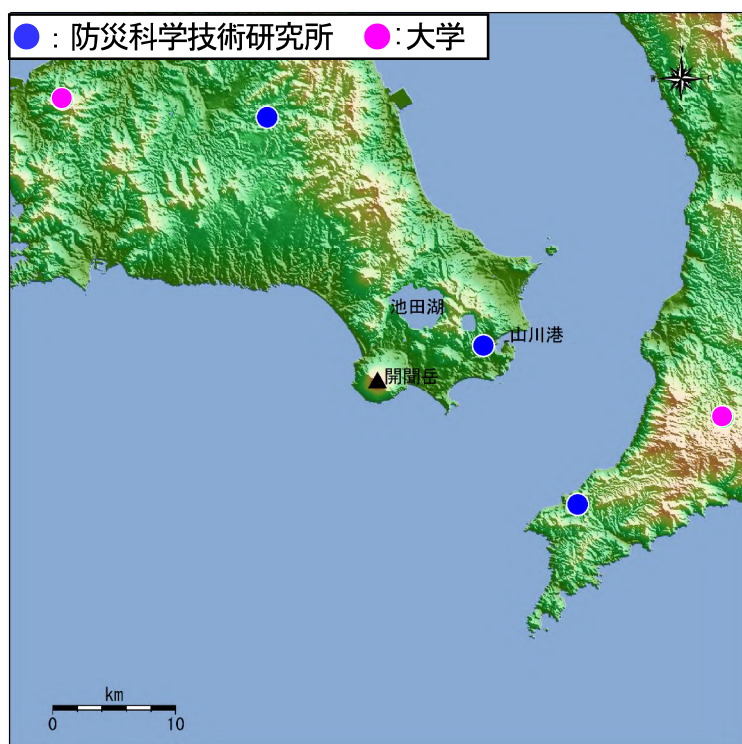


図 3 開聞岳 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

口 之 島 (2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。
噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・噴気等の状況（図 1、図 2）

口之島に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

12 月 14 日に、海上自衛隊第 1 航空群の協力を得て上空からの観測を実施した。燃岳の山頂付近で白色の弱い噴気を観測したが、前回（2014 年 12 月 18 日）と比べて、噴気活動に特段の変化は認められなかった。

・地震活動（図 3）

地震活動は静穏な状態で経過した。



図 1 口之島 上空から撮影した口之島の状況（2017 年 12 月 14 日）

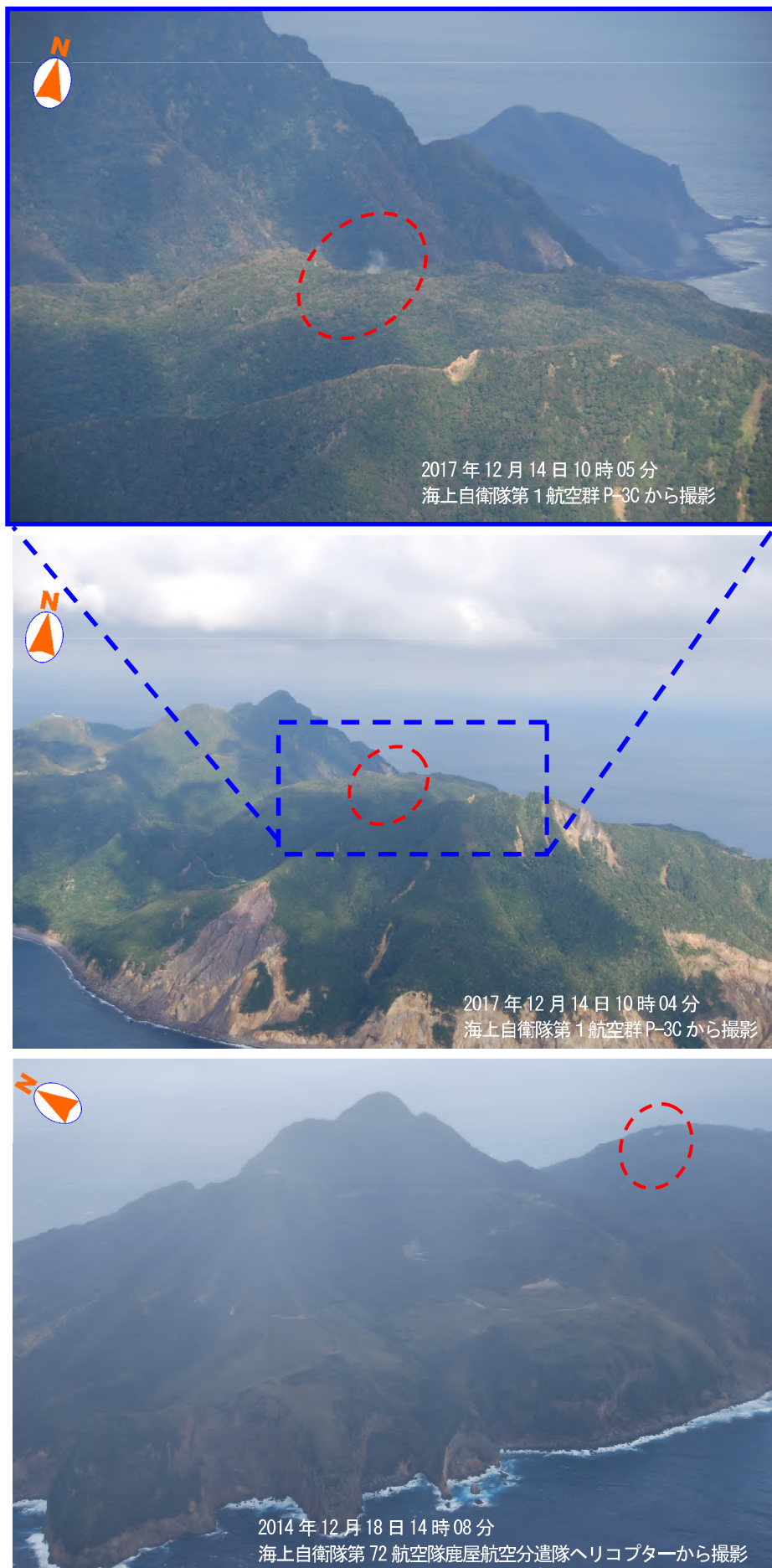


図 2 口之島 燃岳の周辺の状況

燃岳の山頂付近（赤破線内）で白色の弱い噴気を確認した。

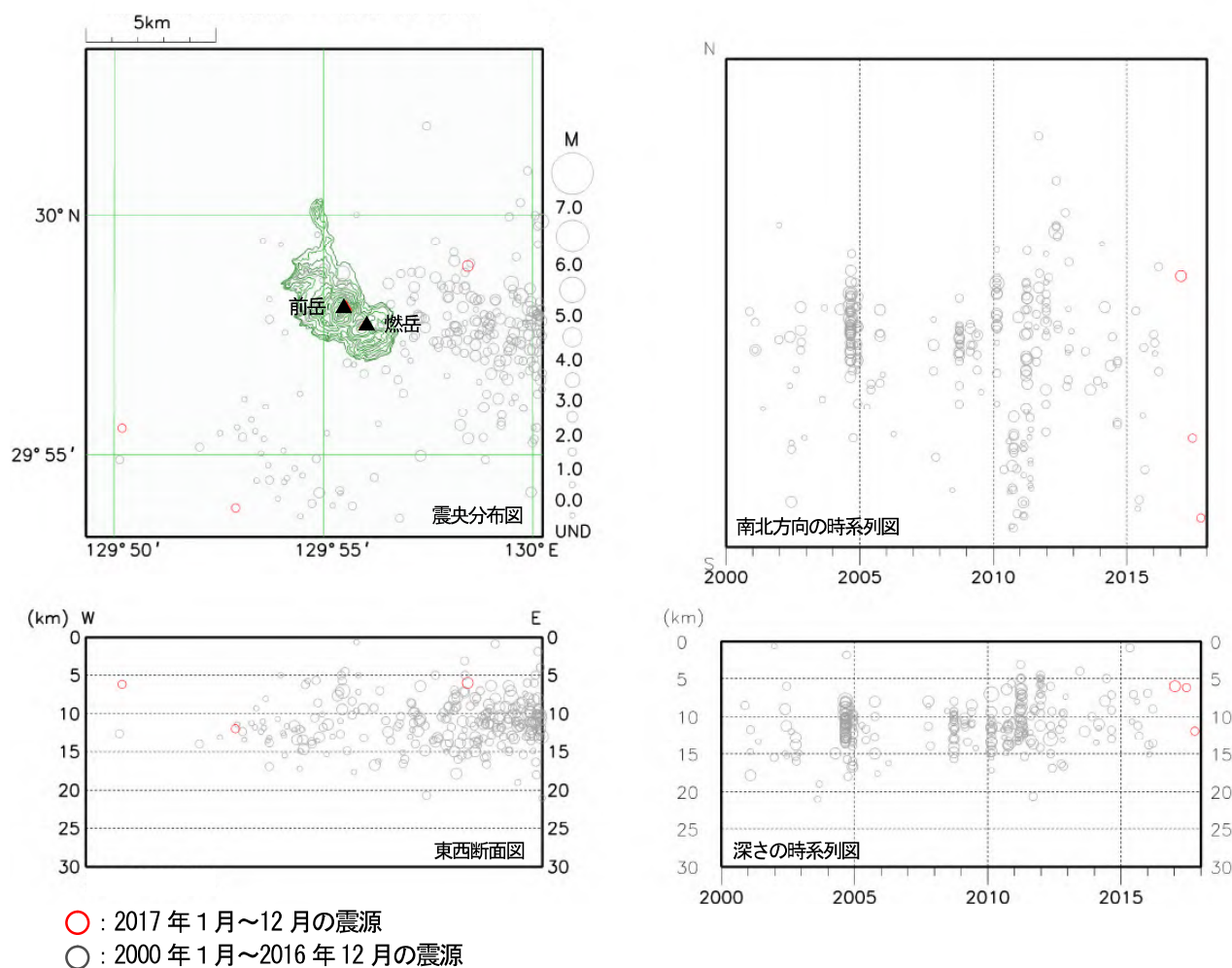


図 3 口之島 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月 31 日の状況>

地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

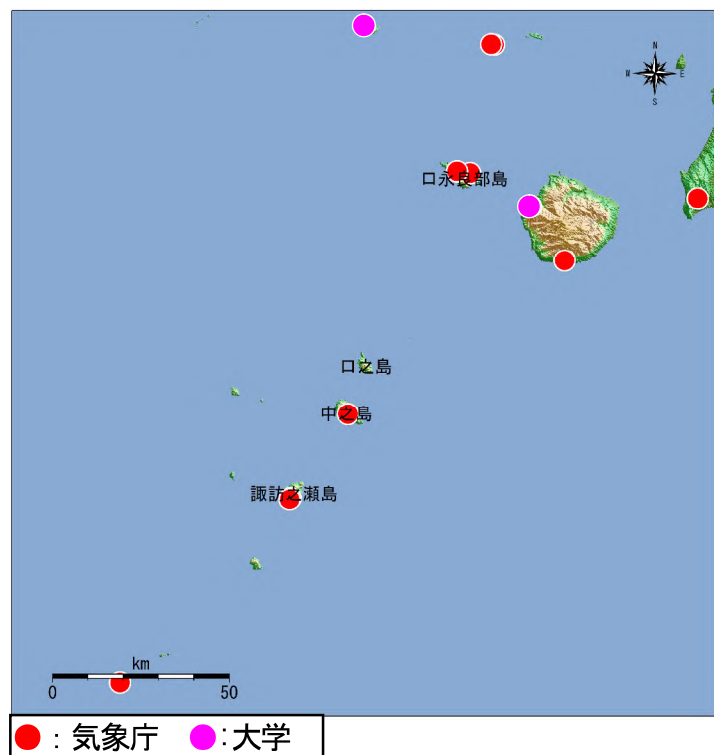


図 4 口之島 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用した。

中之島 (2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候はみられない。

○ 概況 (2017 年 1 月～12 月 31 日)

・ 噴気等の状況 (図 1～8)

中之島に関して、噴気等の異常に関する報告はされていない。

6 月 2 日から 8 日に実施した現地調査では、御岳火口内及び北東斜面の一部で白色の噴気と熱異常域を観測したが、前回観測時 (2014 年 2 月 25 日) と比較して噴気活動や熱異常域の状況に特段の変化は認められなかった。

また 8 月 29 日と 12 月 14 日に、陸上自衛隊及び海上自衛隊第 1 航空群の協力を得て、上空からの観測を実施した。それぞれ御岳火口内及び北東斜面で白色の噴気を確認したが、噴気活動に特段の変化は認められなかった。

・ 地震活動 (図 9)

山体で発生する地震は少なく、地震活動は静穏な状態で経過した。



図 1 中之島 御岳の状況 (2017 年 6 月 3 日 中之島港から撮影)

この資料は気象庁のほか、鹿児島大学のデータを利用して作成した。



図2 中之島 御岳火口内及び北東側山腹の状況
御岳火口内（赤破線）及び北東側斜面（青破線）で白色の噴気を確認した。



図3 中之島 機上観測における撮影位置及び撮影方向
 橙丸は撮影位置を、矢印は撮影方向を示す。

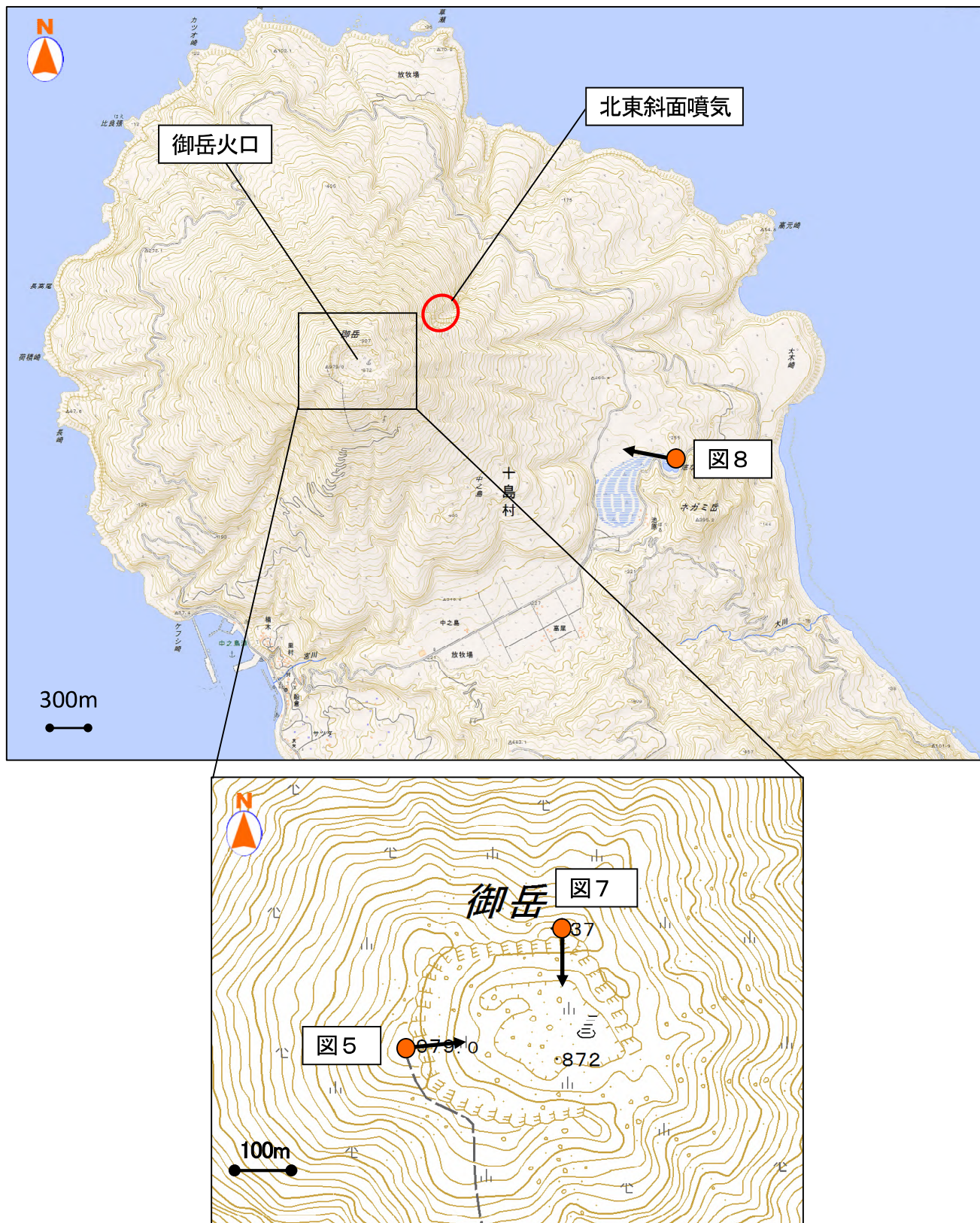


図 4 中之島 現地観測における撮影位置及び撮影方向
 橙丸は撮影位置を、矢印は撮影方向を示す。

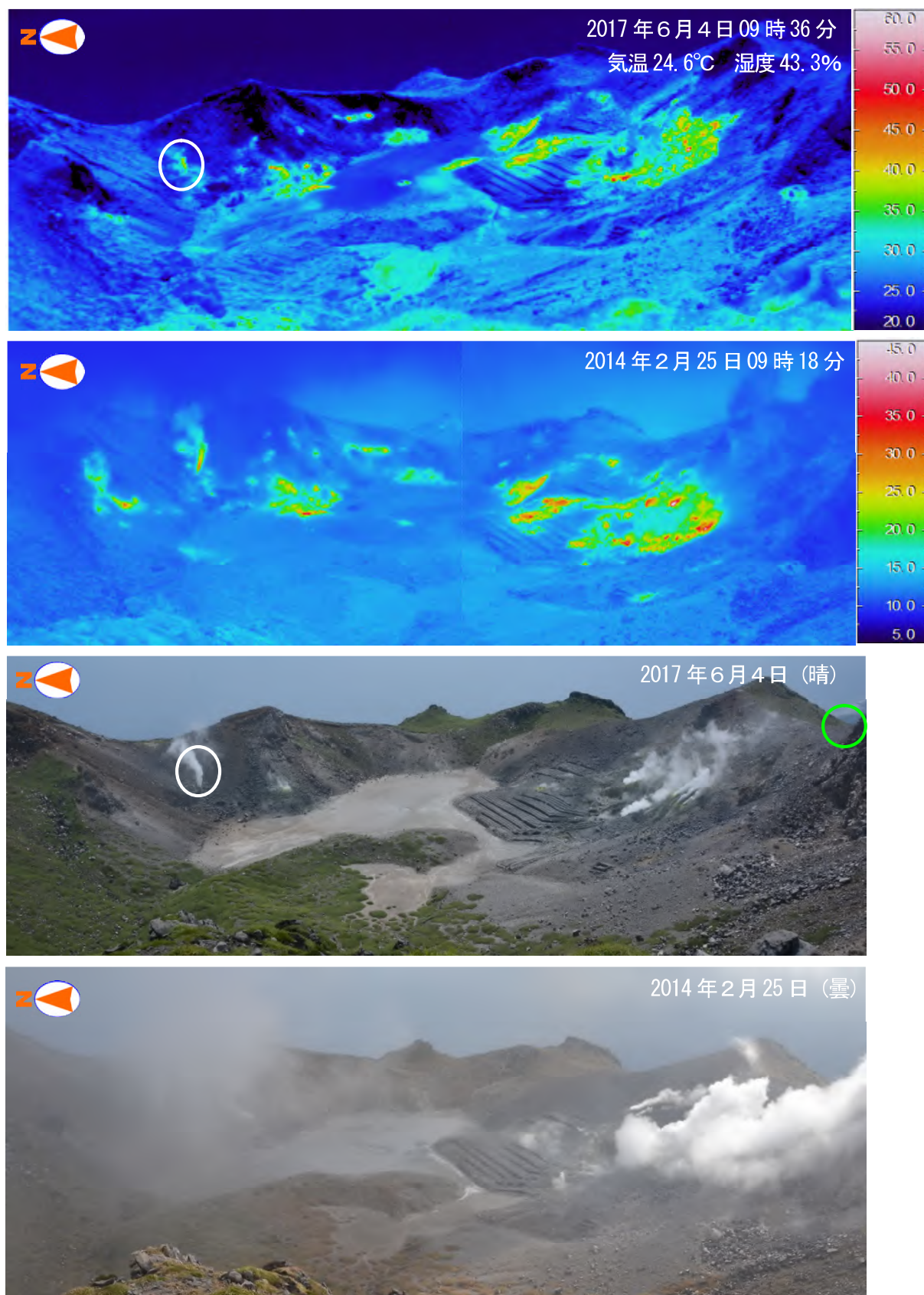


図5 中之島 御岳火口縁西側から撮影した火口内の状況

- ・ 2014年2月25日と比較して噴気活動や熱異常域の分布に特段の変化は認められなかった。
- ・ 図中白丸の噴気孔でサーミスタ温度計による測定を行った(図6参照)。
- ・ 図中緑丸付近で明らかに感じる程度の二酸化硫黄臭があり、簡易検知器で最大濃度2ppmを観測した。



図6 中之島 火口内北東側噴気孔（図5の白丸）の状況

- ・サーミスタ温度計による測定では、噴気温度 133.5℃を観測した。
- ・力を入れないと温度計が飛ばされる程の勢いがあり、測定後はセンサーの先端部分が黒く変色した。

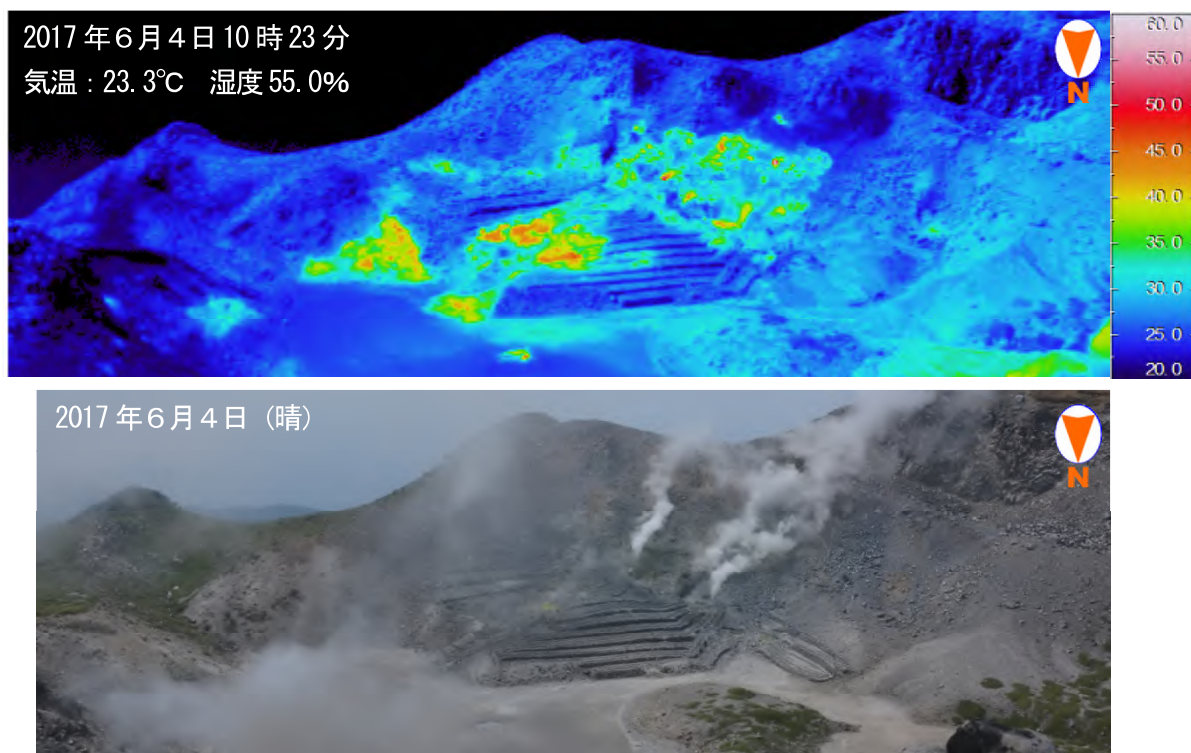


図7 中之島 御岳火口縁北側から撮影した南側火口壁の状況
噴気孔周辺および硫黄採掘跡周辺で熱異常域が認められた。

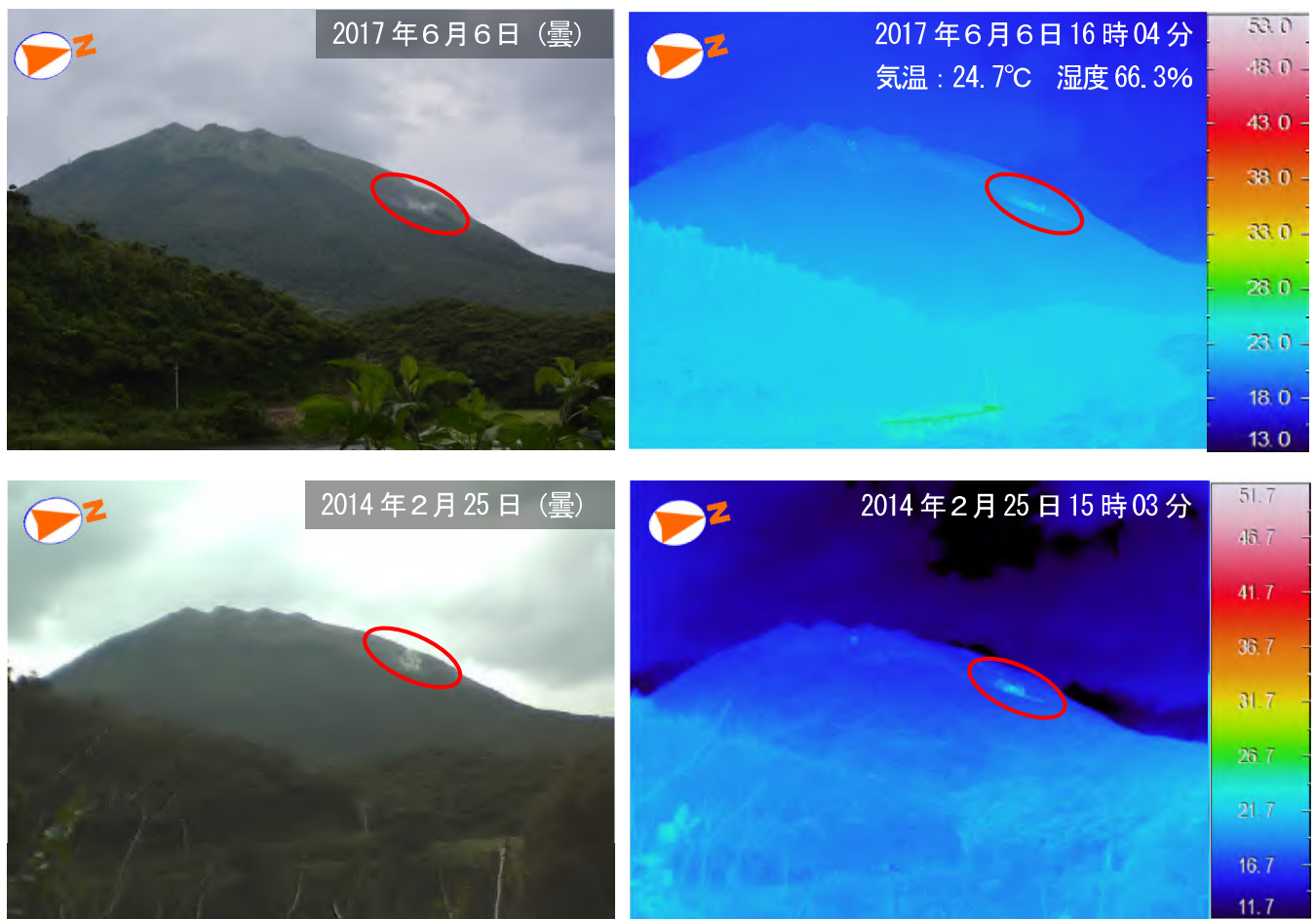


図 8 中之島 御岳東側山麓から撮影した北東斜面噴気地帯の状況

2014 年 2 月 25 日と比較して、北東斜面の熱異常域および噴気の状況（図中の赤丸）に特段の変化は認められなかった。

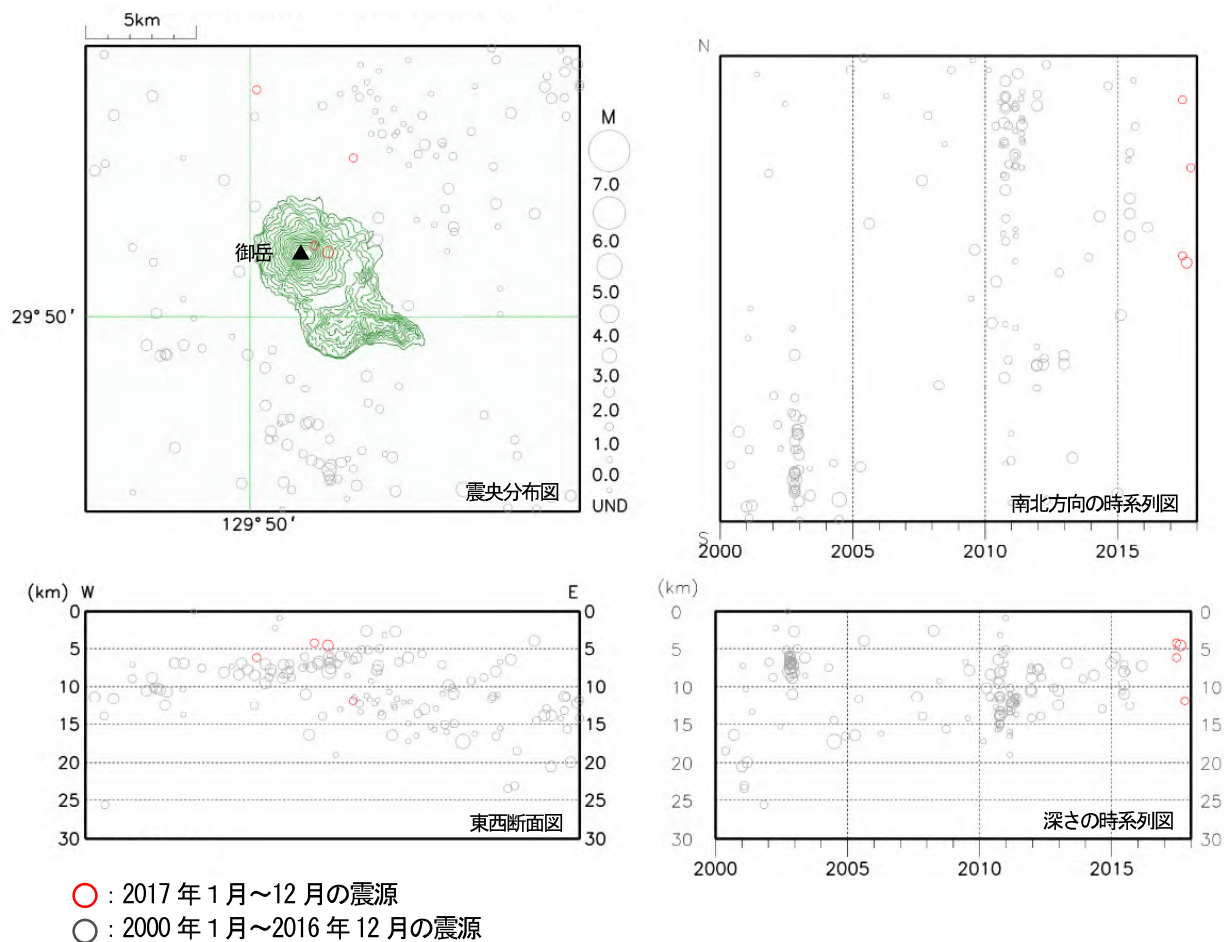


図 9 中之島 一元化震源による地震活動経過図 (2000 年 1 月～2017 年 12 月 31 日)

<2017 年 1 月～12 月の状況>

山体で発生する地震は少なく、地震活動は静穏な状態で経過した。

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

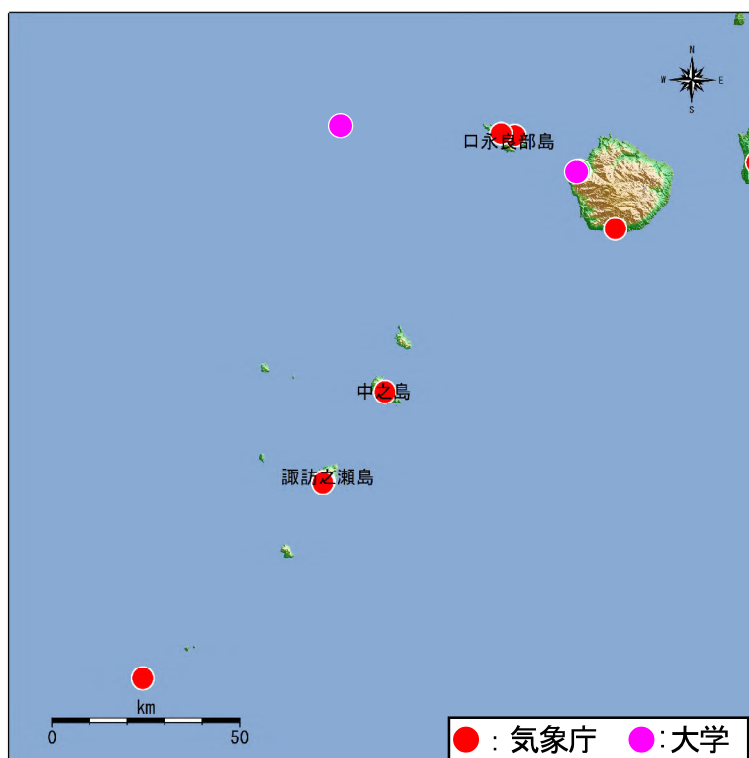


図 10 中之島 周辺の地震観測点

この地図の作成には、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ (標高)』を使用した。

硫黄鳥島 (2017 年 12 月 31 日現在)

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

噴火予報（活火山であることに留意）の予報事項に変更はない。

○ 活動概況（2017 年 1 月～12 月 31 日）

・ 噴気など表面現象の状況（図 1、表 1）

海上からの観測で、島の北側に位置する硫黄岳火口や島の中央部に位置するグスク火山火口から、従来から認められている少量の噴気が観測された。

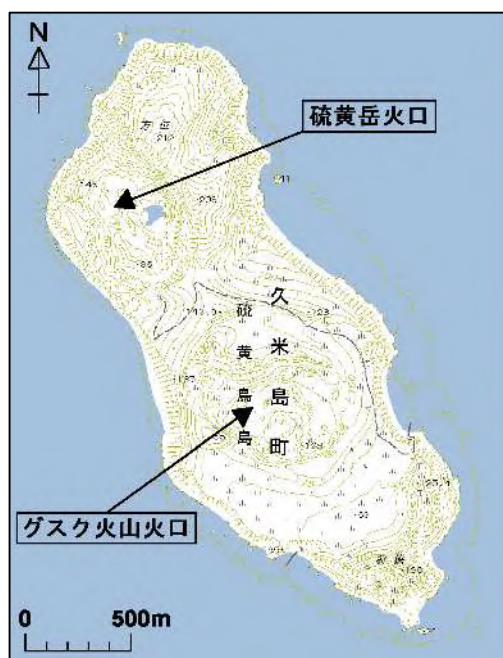
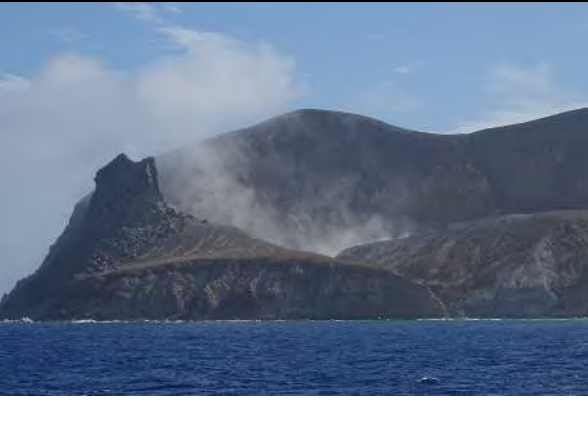


図 1 硫黄鳥島 火口位置図

この図の作成には国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図(硫黄鳥島)を複製した。

表 1 硫黄鳥島の状況

日付及び観測機関	噴気などの状況	
1月18日 気象庁		硫黄岳火口では、白色の噴気が連続的に認められた。
7月4日 気象庁		硫黄岳火口内に弱い白色の噴気が認められた。
12月12日 気象庁		硫黄岳火口内に弱い白色の噴気が認められた。
		グスク火口壁北側の噴気口に弱い白色の噴気が認められた。